

---

# 魔法少女リリカルなのは ～あの頃をもう一度～

naonao

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　あの頃をもう一度　

### 【Nコード】

N5593I

### 【作者名】

naonao

### 【あらすじ】

突然訪れるのは別れ・・・私は嫌だ・・・  
皆と別れたく無い・・・ずっと、ずっと一緒に居たい・・・  
だから、私はやり直すために過去へと旅立つ・・・

\*オリキャラは出ませんが、原作崩壊とキャラの性格崩壊が発生します

## 第一話 タイムトラベルなの（前書き）

この作品はシルフレの合間に書くので定期的に投稿は無理かと思ひます。

他にもキャラの一部が性格崩壊してます。  
それでも宜しければどうぞ

## 第一話 タイムトラベルなの

私達にお別れは無いと信じていた・・・  
六課が解散しても、私達は離れる事は無かった・・・  
だけど、お別れは突然に来た・・・

「なのは、私、来週には結婚するの」

「そ、そうなんだあ。おめでとう、フェイトちゃん」

フェイトちゃんのいきなりの発言。

それは、私とフェイトちゃんとの関係を小さくさせてしまう物。  
そして、フェイトちゃんと同じ場所にもう居られないと云う事である。

悲しいけど、友人としてお友達の幸せを祝わない訳にはいかない。

「なのは、ありがとう」

お願い・・・私に微笑まないで・・・礼を言わないで・・・  
もっと悲しく、切なくなるから・・・

「明日提出しないといけない書類を少し残してるから、私、行くね」

「書類整理手伝おうか？」

「うっん、一人で大丈夫だよ・・・」

私は今出来る限りの笑顔でフェイトちゃんに笑いかけ、軽く手を振る。

そして部屋を出て、傷心を癒そうと飲み屋に出掛ける。  
あまり人気のない屋台を選択し、何時もは飲まないような焼酎を注文。

初めての焼酎は、喉と頭を熱くし刺激する。  
だけど、この痛みが辛い気持ちを忘れさせてくれそうだった。

「ありや、なのはちゃんやないか」 お久しぶりやな。うちもこー  
緒して良かか？」

一人で飲んで泣きたかったのにな・・・

「勿論だよ、はやてちゃん」

「おおきにな。おっちゃん、うちは日本酒な！。それと、串盛り合  
わせ」

「あいよ」

はやてちゃんは私の隣の椅子に座り、軽く背伸び。  
その時に私ははやてちゃんの指についている指輪に気付く。

「はやてちゃん、その指輪？」

「ああ、これな。うち、来月に結婚するんよ」

「そ、そうなんだあ・・・おめでとう、はやてちゃん」

「おおきにな」

はやてちゃんも結婚かあ・・・

はやてちゃんとはフェイトちゃんみたいに頻繁には会えないけど、結婚しちゃう

ともっと会えなくなっちゃう・・・

ドウシテ、コウナルノ？

イヤダ！！サミシイヨ！！

「わっはっは、真っ黒ク口助め、また仕事を寄越してくれて 殺意を通り越して愛が芽生えそうだよ！！」

「大丈夫か、スクライア司書長・・・」

目には赤色の蜘蛛、瞼には紫色のくまと様々なペットを飼っているし、言動もかなり危ないユーノに新人司書は不安を覚える。

「あつ、あれね。安心しろ、お前も直に馴れるから」

「入る部署間違えたかなあ・・・あつ、そう言えば、海のフェイト・T・ハラオウン執務官と陸の八神はやて一等陸佐が連続で結婚するらしいですね」

「そう言えばって、話変わりすぎだぞ・・・まあ、良いけど・・・高町二等空佐はどうするんだろうな？二人が結婚するんだし、彼女も結婚を考えるんじゃないのか？」

「今の話を詳しく聞かせてくれ」

先程までは、依頼の情報を探していたユーノだが、なのは達の名前

が出たので興味を持ち、仕事を放り投げやって来る。  
そして、話を聞くなりいなや顔に手を当てて・・・

「なのはは傷付いている筈だ！！僕がなのはの傷心を癒やす！！」

突然叫ぶ・・・

「「はっ？」」

司書長の暴走に二人の司書は疑問符を付けた間の抜けた言葉しか出ない。

「後は任せたよ！！」

そして、我等が司書長は大量の依頼された書類を指差して疾風の如く去る。

「なのはちゃん、ほなな」

「うん」

はぁ、どうしよっかなぁ・・・

家に帰ってもフェイトちゃんしか居ないし・・・

ヴィヴィオはシスターシャツハの学校の寮に入った為、私とフェイトちゃんだけがあそこに住んでいる。

「お嬢さん、お困りかい？」

突如として、目の前の空間が歪み、一人のフードを被った何者かが現れる。

普段ならレイジングハートを構えて威嚇くらいはするが、今のなのはにそんな気力すらない。

「ふふふ、友人の結婚が嬉しくないのかね？」

「そんな事はない。フェイトちゃんとはやてちゃんが幸せになるなら、私は嬉しい」

口から出るのは偽りの言葉。

「強がっても無駄だよ。私にはあなたの気持ちが取るように分かる。だから、あなたに良い事を教えてあげよう。あなたの友人達とずっと一緒に楽しく居られる方法をね」

「悪いけど、今のフェイトちゃん達は幸せの筈。私はそれを壊してまでは欲しくない」

「勿論、今のあなたの友人の幸せは壊れない」

フードの人間は、『今の』の部分を強調して言う。

「君はタイムトラベルと云う言葉を知ってるかい？」

なのはは無言で頷く。

「私はタイムトラベルを故意に起こす方法を知っているのだよ。知りたいかい？」



これにもなのはは無言で頷く。

「簡単な事だよ。大量の魔力を爆発させて次元に裂け目を入れるだけさ。まあ、大量と云っても通常では行使できない程の量だけど・  
・君は莫大の魔力を生み出すロストロギアを知っている筈だよ。ふふふ、まあ、試すも試さないのもあなた次第だ。私はここで失礼させてもらうよ」

ローブの人間はそう言い残し、闇へと消える。  
そして、なのはは・・・

「タイムトラベルか・・・」

その単語を呟き、その場を後にする。

## 第二話 過去へなの（前書き）

やっとレポートが終わり執筆にかかれそうです  
次話くらいから、キャラが暴走し始めます

## 第二話 過去へなの

ドウシテダロウ？

レリックが安置されている聖王協会に自然と向かっている自分に問い掛ける。

安置されているロストログアを自身の欲望を満たす為に使うと云うのは、自身が今まで忌み嫌っていた犯罪者と同じ事をする事になる。

私って、最低だな・・・

そんな自分を嫌悪。

だけど、歩は緩めない。

あの幸せがどうしても諦めきれないから・・・

なのは何処だろう？

勇んで飛び出したが、なののは居場所が分からず路頭を迷うユーノ。

うーん、本来なら緊急時以外で無許可の魔法行使は禁止されてるけど、僕にとって今は緊急時だ。

ユーノを中心に円形の魔法陣が出現。

そして、魔法陣の上に探し人の髪の毛を置く。

何故にユーノがなののは髪の毛を持っているのかはスルーして頂きたい。

「我に示せ、探し人の居場所を」

魔法陣は収縮し、なのはの髪の毛に吸い込まれるように消えていく。魔力光の色に発色し始めた髪の毛は宙に舞い上がり、なのはの居ると思われる方向に飛ぶ。

ユーノは先行する髪の毛を見失わないようにと、走って追い掛ける。

「ぐう……な、なのはさん、どうして……」

「ゴメンネ。私にはしなくちゃならない事があるの」

聖王協会の遺失物保管庫入り口には、レイジングハートを手に持つなのはと数多くの警備兵の倒れ伏す姿があった……

「カリム様を裏切る気ですか……あなたを信じて慕って来た者達を裏切るのですか！？私だってあなたを憧れてました！！強き心を持つあなたがどうしてして？」

「ゴメンネ……でも、私は強くなんかないよ……」

涙を流し叫ぶ衛兵に一言謝る。

そして、レイジングハートの穂先が光輝く。

「本当にゴメンネ……」

何度目の謝罪だろうか？

だけど、謝って何になるだろうか？

「目を覚まして下さい！！なのはさんっ！！」

だが警備兵の言葉は届かず。返事は桃色の閃光と夢行きへのチケツト。

ミナ、ゴメンネ・・・

邪魔者が消えた今、なのはがレリックを手に入れるにあたっての障害は消えた。

もう後には退けない。

ならば、堂々たる態度で挑むだけだ。

彼女はゆっくりと歩を進める。

こ、これは？

髪の毛の導きにより聖王協会遺失物保管庫入り口に來たユーノは絶句。

無機物である髪の毛は倒れている人間は当然無視。そのまま中へと入って行く。

ま、まさか！？敵襲！？

なのはは大丈夫だろうか！？

なのはを信じている人間である。

思い付くシナリオは、敵襲があり、なのはに救援要請。

なのは以外全滅、そしてなのはは敵を追い掛けて保管庫へと云う物である。

ユーノは迷う事無く髪の毛の後を追う。

なのはの前には多くの赤色の宝石、それと数個の菱形の薄い緑色の宝石。

自分が今までに集めてきた物である。

自分の過去の幸せや悲しみが一杯に詰まったアルバムの様な物。見てるだけで過去へ行きたいと云う思いが高まる。

だが、過去へ遡ると云う事は今の世界と別れなければならない。

フェイトやはやてと仲良くなれるとも限らない。

はやてが闇之書事件で死ぬかもしれない。

負の考えは幾らでも浮かぶ。勿論その逆もしかりだ。

人間とは極端な方向に考えがちである。

ただ、なのはが一番疑問に思っているのは、何時どの場所にどのような形で逆行するかである。

逆行した先が一日前だったりしたら、幸せを取り戻すには手遅れである。

でも、もう悩まない。

なのははレリックとジュエルシードに手を伸ばす。

「私を過去に戻して・・・幸せな世界へ誘って・・・」

二つのロストロギアに願いをことう。

二つのロストロギアは頷くかの様に発光し、部屋を幻想的な光で埋め尽くす。

すると体が次第に軽くなり始め、魔法を使わなくても空が飛べそうな気がし始めた。

二つのロストロギアの光度が更に上がり、眩しさに目を閉じる。

「大丈夫、なのは！！って、うわああ！？」

二つのロストログアが発光を止めた時には部屋には誰もいなかった。  
・  
・

なのは、なのは！！なのはってばあ！！

声がする懐かしい声だ。私はゆっくりと目を開ける。

私の眼前にはアリサちゃんの姿があった。

但し一つだけ異なる点が。

体格が小学生の物であり、聖小の制服を着ている。

目を下にやると私の着てる服も同様の物だったりする。

これが意味する事は過去への回帰に成功したと云う事である。

今度は左右を見る。

すずかちゃんは居るけど、フェイトちゃんの姿が無い。恐らく、P  
T事件の前に逆行したみたいだ。

「なのはってば！！少しは返事なさいよ！！会話中に行きなり目を閉じて反応しなくなっただから心配したのよ」

どうやら、私はこの世界の自分の存在に上書きされたみたいだ。  
この世界の私には悪い事をしちゃったな・・・

「アリサちゃん、心配掛けてゴメンネ。それと、心配してくれてありがとう」

「ちよっ！？違うのよ、なのはが死んだら、警察の事情徴収とかが

あるから心配したんだから!!」

うわーい ツンデレアリサちゃんは可愛いな  
私は目の前のアリサちゃんを抱き締める。

「な、何するのよ!？」

「ふふふ、なのはちゃんとアリサちゃんは矢っ張り仲が良いね。写メ撮っちゃお」

携帯を取り出し、カメラを抱きつきあう私とアリサちゃんに向ける。

「撮るなあ!!」

私は懐かしさに涙が出そうだった。

みんなですつと一緒に居られる事、それは何気なく幸せだった。  
みんなとずつと一緒に居たい。

フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、  
イータちゃん、シグナムさん、シャルさんにリンちゃん。

みんなとずつと一緒に居たい。

だから、私は学校に着いたら作戦を立てるのだった。

みんながずつと一緒に居られる世界を創る為に・・・



### 第三話 哀れなの

「痛いなあ・・・って、此処は何処!？」

先程までは部屋の中に居たはずなのに、今は森中である。

「ギイイ!!」

聞き覚えのある獣の吠える声。

そして次の瞬間には自分に飛びかかって来る。

「チエーンバインド!!」

捕縛魔法を用いて、獣の身動きを取れなくする。

自分を真つ赤な目で睨みつけ、吠えてくる見覚えある獣。

本当に此処は何処だろう？

あれ？

ふと手に何かを握っていることに気付く。

何かと開いてみると、待機状態のレイジングハートの姿が・・・

何故、僕はレイジングハートを持ってるんだ？

不思議に思い首を傾げる。

その際に自分の着てる服がスクライアー族の衣装と云う事にも気付く。

えっと・・・コレってまさか・・・過去？

ピンポンピンポン大正解

「何故だああああ!？」

ムンクの叫びの如く両掌を両頬に当てて絶叫。

しかし、そうと分かれば彼の行動は早い。

バインドを受けて身動きの取れない獣に近付き、ジュエルシールド封印の魔法を叩き込む。

ふう、大変な目に遭ったよ・・・

でも、僕が戻つてると云う事はなのはも戻っているはず。

若くなつた分、僕はなのはを長い間幸せに出来るんだ!!

さうて、なのはを念話で呼び出さないと

あ、でも、なのはがこの時代に来てるとは限らないから名指しは拙いかなあ・・・

学校の帰り道、アリサちゃんとすずかちゃんと話している時だった。

『誰か助けて・・・』

聞こえるのはユーノ君の念話・・・

ユーノ君に関わると禄な展開になりそうにないから無視。

間違い無くフェイトちゃんに合った際に戦闘に走りそうだし、足手纏いだし・・・

レイジングハートが手に入らないのは痛いけど、今回はスルーの方  
向で行こう。

「なのはちゃん、いきなり立ち止まってどうしたの?」

「ううん、何でもないの」

「ぼさつとしてたら置いて行くわよ」

ゴメンネ、ユーノ君。

念話を送ってから五時間経過・・・

日も暮れて夜となる。

季節は春なので凍え死ぬ事は無いが、餓えと云う物がユーノを襲う・

・

な、なのは遅いなあ・・・

まさかこの時代には来てなくて、かつ、この時代のなのはは魔力の才能が無いのかなあ?

ううん、試しになのはの家に行ってみよう。

餓えを耐えつつなのはの家の方向へゆっくりと歩を進める。

フェレットの姿を取ってない所為か、すれ違う人全員がユーノを見る。

勿論、外人が珍しいから等の理由ではない。

「ママ、あのお兄ちゃん、変な格好してる」

「こら指差しちゃ駄目でしょ!」

スクライアの衣装は薄い緑色を基準としており、作りも少し派手である。

拙いなあ、服が目立ち過ぎてるかなあ？

ユーノは近くの木の下に隠れ、視覚魔法を用いて服を至って普通の物にする。

その姿に変えてから、幾分目立たなくなった。

そして、なのは家に到着し呼び鈴の前で立ち止まる。

理由はなのはに合った後にどの様にして確かめるかを考えて無かったからである。

うーん、「僕が分かる？」って聞いて、僕の時代のなのはじゃなかったら気まずいし、「あなたは魔法を信じますか？」って聞いたら宗教勧誘に思われちゃうし・・・

一番無難なのは念話での呼び掛けかなあ。これだけ近くに居るんだし聞こえない筈は無い。

「おい、御前は俺の家の前で何をしてる？」

決心して念話を送ろうとした矢先、声を掛けられる。

えっと、彼はなのはの兄である恭也さんだった筈。

「返答次第では子供と云えど殺すぞ？」

次の瞬間には彼の姿がかき消え、小太刀と呼ばれる武器を僕の喉元に押し付ける。

うわー、素直に話した方が良さそうだな・・・

「僕は怪しい者じゃありません！！ただ、なのはに用があつて！！」

「なのはだと？」

恭也の声が辺りの空気を氷結させてしまうくらいの冷たい声を出す。

「そ、そうです。僕は確かめに来たんです。彼女が僕の知ってるなのはかどうかを！！」

「貴様、我が愛妹を名前で呼び、あまつさえ呼び捨てだと？その無礼万死に値する・・・」

ちよっ！？正直に答えたのに戦闘フラグが立っただけど！！

だけど、僕だって、戦闘訓練を受けた人間（？）だ。

魔法の力を持たない人間に負ける筈はない。

ユーノはバックステップをし、恭也から距離を取る。

そして捕縛魔法を使用。無数の薄緑色の鎖が恭也に伸びて彼を捕縛せんとするが・・・

「奥義・神速！！」

恭也は、自身の体感時間を早めるためにモノクロの世界へとダイブすると、鎖の色は黒に、速度は緩慢となる。無数の鎖の間をかいぐり、小太刀を抜刀。

切り殺すのは流石に拙いので刃を反してユーノの腹部へと叩き込む。

「うぐう？」

自分が何をされたのかを認識した時には既に遅し。  
目の前が暗くなる・・・

「ふん、俺に喧嘩を売ろうなど一億年早いわ」

恭也は気絶したユーノをつまみ上げ、近くを通る川に放り投げる。

「さてと、今宵の飯はなのはが当番だった筈だ。実に楽しみだ」

家に帰宅。何時も通りなのはが笑顔で出迎えてくれる。

「お兄ちゃん、お帰り。お風呂にする？それともご飯にする？」

ぐふっ！？我が妹よ、その嬉し恥し新婚さんみたいな発言は何だ？  
実に良いぞ！！

心の中で親指を立てる。

「ただいま、なのは。父さんと母さんは翠屋でまだ働いているのか？」

「うん。だから、三人で先に食べててって」

くっ、美由希が居るのか・・・

折角、なのはと二人で食事かと胸踊ろかしたのだが、あいつが居ては面白くない

し、嫌な予感がする。

あいつのドジで何度ひどい目にあったやら・・・

「そうか、なのはも学校で疲れてるだろうから、先に食事にしよう。」

そうすれば、なのも早く眠れるだろ」

「うん」

気を取り直して俺となのはは台所に向かった。

#### 第四話 懐かしい食卓なの（前書き）

今回は短いかわり、早めの投稿です  
いかん、シルフレよりこっちを書く方が楽しくなってきた・・・



## 第四話 懐かしい食卓なの

はうゝ、お兄ちゃんに会うの久し振りだなあ。

むう、今見るとお兄ちゃんってかなりイケメンだね。

忍さんが一目惚れしたのも分からなくないなあ。

お兄ちゃんを案内し、台所へ。

テーブルの上には私の作った様々な料理が所狭しと並んでいる。

過去に来たばかりの私が何故今日が当番と分かったのかと云うと、高町家では台所のホワイトボードに誰が当番を書くようにしているからだ。

「キヨウちゃん、今日はご馳走だよ!!」

既に椅子に座り興奮しているお姉ちゃんに、お兄ちゃんは溜め息。

うん、今の私ならその気持ちは良く分かるよ・・・

「しかしだ・・・愚妹の言う通り、今日の料理は豪勢だな。何か良い事でも有ったのか？」

「えっとね、内緒」

流石にタイムトラベルに成功しましたとは言えない。

「それよりキヨウちゃん、愚妹って何!？」

「読んで時のごとく、愚かな妹と云う意味だ。この戯けが」

うわゝ・・・矢っ張りお兄ちゃんはお姉ちゃんには厳しいなあ・・・私も剣術を始めてたら、こんな風に扱われてたのかなあ？

「お兄ちゃんもお姉ちゃんにあんまり厳しく当たっちゃ駄目だよ。お姉ちゃんにだって良い所は一杯・・・少しは有るよ。優しい所とか優しい所とか・・・」

「えっと、なのはも私のカバーをしてくれるのは嬉しいんだけど、他には無いの？」

「ゴメンナサイ、無いです・・・」

「妹にまで気を使われおつて。少しは精進に励め」

「うう、キョウちゃんは矢張り意地悪だよ・・・」

口を尖らせぶつくさ文句を言うお姉ちゃん。

それは、とても懐かしい光景。

お兄ちゃんは忍さんと結婚してから家は家に戻る事も減ったし、私も私で管理局に勤める為にミッドチルダに住み始めたからである。

お兄ちゃんが居て、お姉ちゃんが居て、私が居る。

三人揃つての食事は懐かしく楽しかった。

気付けば目には涙・・・

悲しいと云う感情による物では無い。

嬉しいのに涙が出て来て止まらない。

「どうした、なのは！？まさか美由希に何かされたのか！？」

「どうして私の名前が一番に出るの！？」

「ううん、違うの。お兄ちゃん達と居る何気ない毎日が、何時か無

くなると思ったら悲しくなってきたの」

自分にも涙が出て来る理由は良く分からない。  
私は咄嗟に思い付いた事を言う。

「そうか、安心しろ。この日常はなのはが望む限り永遠に続くからな。俺はなのはが望む限り傍に居てやる」

お兄ちゃんはその言うて、私を優しく抱いてくれる。

「そつだよ。この日常は何時までも続くよ・・・私がキョウちゃんに殺されない限りね・・・」

「良く分かってるな愚妹。ならば、御前には俺の訓練に耐える為に基礎訓練の量を倍にしてやる」

「キョウちゃんの鬼い！！悪魔！！」

「何とでも言うのが良い」

「スケベ！！むっつり！！」

お兄ちゃんに抱かれてる事で直に接しているので、お兄ちゃんが怒りに震えているのが良く分かる・・・

「シスコン！！ロリコン！！」

次の瞬間には姿がかき消え、お姉ちゃんの腹部に掌底を放っていた・・・

お姉ちゃんは風に吹かれた木の葉の如く吹き飛び壁に激突。

その後、地面に落下し電気の流れた棒を刺された蛙の様にピクピクと動くお姉ちゃん。

この光景を見ると、お兄ちゃんってザフィーラとかと互角に張り合えそうな気がする。

「ふん、美由希は放って御飯を食べるぞ」

「うん」

「ぶえつくしよん!!」

再び例の森の中にて・・・

恭也に川に放り込まれ濡れ鼠と化したユーノは、濡れた体を暖める為に、再び例の森に戻り薪を集めて、焚き火をしている。

「今回は失敗したけど、次こそはなのはに接触して告白するぞ」

最早彼の頭からは、この世界のなのはが自分の知っているのはであると云う事になっている。

そして目的も、恋愛のゴールインとなっている。

恭也がこれを知ったら、間違い無く人生のゴールインを果たせそう  
だ。

#### 第四話 懐かしい食卓なの（後書き）

次話では、かの究極メイドの出番の予感・・・  
性格と言葉遣いが多少おかしいですが、そこは「naonaoなの  
で仕方ねえ」とスルーして下さい。  
勿論、あの必殺技<sup>ロマン</sup>を出す予定です

## 第五話 ロケットパンチは科学者の浪漫なの

「アリサちゃん、あ〜ん」

なのはは卵焼きをアリサの口元に持って行く。

「ちょっと、いきなり何よ!？」

「今日のお弁当は私が作ったのでね、アリサちゃん達に食べて欲しいの」

「そ、そう。仕方ないわね、食べてあげるわ」

顔を赤らめ、なのはが口元に持って行った卵焼きをパクリと口に入  
れ、咀嚼。

「やははは、アリサちゃん可愛いな〜」

「アリサちゃん、美味しい?」

「ま、まあまあよ」

なのははから顔を背けて恥ずかしそうに答える。

「そうかなあ、私は凄く美味しいと思うよ」

アリサ同様になのはにあ〜んをして貰い、なのは謹製卵焼きを食し  
たすずかは首を傾げる。

「うるさい、うるさい、うるさい!!」

アリサちゃんはデレも可愛いけど、矢つ張りツンの方が私は好きだなあ

「ねえ、なのはちゃん。今日は私の家でお茶会をする事にしたの。来てくれる?」

そういえば今日か  
フェイトちゃんと初めて会った日は・・・  
よし、しっかりフェイトちゃんを落とすぞ

「うん、喜んで」

「アリサちゃんも来てね」

「ふん、行ってあげても良いわよ。久し振りに猫と遊びたいし・・・  
勘違いしないでよ、なのは達と楽しくお話する為に行くんじゃないんだからね!!」

「はいはい」

「今日はなのはとフェイトが接触する日だ・・・」

例の森の中には、自然界の素材で組み立てられた小屋と、石で組み立てられた竈に、ドラム缶のお風呂等の生きて行くのに必要な物が揃っている。

そんな、無人島生活もしくはホームレス生活をエンジョイしているユーノは、焼いた川魚と食べられる野草などを煮詰めた物を食べている……

此方に来てから早数週間が経過する。

その間に、自然界で生き抜くためのノウハウを学び、逞しく育っていた。

それはもう、食べられる野草、キノコ、魚の捕り方と、サバイバルのプロフェッショナル顔負けの速度で。

なのはとフェイトが接触する場所はすずかの家の庭。

ジュエルシードの憑依対象は、すずかの猫。

僕をするべき事はジュエルシードの封印と、なのはに告白。そして、その後、フェイトとアルフの説得だ。

フェイトはプレシアに依存してるから説得は難しいが、アルフはプレシアを嫌っている節がある。

だから、アルフを味方として先に引き込み、プラス僕となのはの三人でフェイトの説得に当たろう。

これなら成功する可能性も高い筈だ。

よしっ！！善は急げ！！僕は昼食を掻き込み、すずかの家に向かった。

しっかしまあ、すずかの家は何時見ても大きいな……

おっと、感心してる場合じゃないな。

まずは監視カメラを無力化しなければ。

所詮科学の英知により生み出された機器等、無限書庫で得た膨大な知識を持つ僕の前には意味はないけどね。

この手の機器は光や温度で識別してるから、光を上手く屈折させてやり、自身の体温を外気と同化させれば反応しない筈。

実に質の悪い侵入者である。



月村家自慢のセキュリティも、ユーノの前には悲しき事が意味をなさない。だが、防犯装置を無力化し内部に侵入したユーノの前に、一人の女性が立ち塞がる。

セキュリティが機械だけの筈が無い事は、考えれば誰でも分る筈。それを見落としていたのは、自身の力に慢心していたユーノの愚かな点だった。

「他人の家に土足で上がり込む輩には、熱いお灸を添えねばなりませんね」

服は黒一色のロングなメイド服。メイド服の上には純白のエプロン・  
・そして頭にもエプロンに負けず劣らずの白さを誇るメイドカチ  
エーシャ。

そう、彼女こそが月村家お抱えメイドのノエル・綺堂・エアリヒ  
カイトである。

拙いなあ・・・セキュリティの目は誤魔化せて侵入出来たけど直  
ぐに人に見つかるとは・・・負担は増えるけど幻影魔法も使うべき  
だったな・・・

「子供ですので直ぐに立ち去るなら多めに見ましよう。ですが、抵  
抗するなら私の拳が黙ってはいません」

折角侵入したのに逃げてたまるものか。

今なら監視カメラとかも無いし、幻術魔法だけで姿を眩ませて、更  
に奥に向かうだけだ。

恐れる事は何も無い！！頑張るんだ、ユーノ・スクライア！！

「悪いけど、僕にはしなければならぬ事が有るんだ！！」

ユーノの足元に魔法陣が展開され、ユーノの姿が霞む。

「何らかの力により視認不可能。視認方法を温度に変更」

ユーノも流石に人間は温度では探知できまいと、外気と自分の温度を同化させる魔法を解いていたのが不幸だった・・・

ノエルは普通に歩いたり話したりしているが、厳密には人ではない。もうこの時代には存在しない技術を用いて作られたロボットなのだ。その為、敵探索は視認以外に温度でも出来る。

「ノエルパンチ」

ノエルの右腕の第一関節からが胴体から外れ、ユーノ目掛けて発射される。

「噓っ！？ぐふっ！！」

ドリル、自爆装置、目からビームに並び、科学者の浪漫の一つ数えられるロケットパンチはユーノの頸部にめり込み、そりやまあ見事に空の彼方にユーノを吹き飛ばしお星様にする。

飛んでいった自分の腕に仕込まれており自身とを結び付けているワイヤーを引き戻す。

ジャキンと云う、金属がぶつかり合い連結する時に発する音を立てて、見事に元の位置にはまる。

「侵入者撃退完了しました」

この様にノエルの活躍有ってこそ、月村家の日々の平穏だった。そして、哀れお空のお星様となったユーノに敬礼。

## 第六話 久し振りなの（前書き）

漸くフェイトの出版です

今話は何時よりも少し長めに書いてます。

この作品は一話辺りの長さには差があるのは仕様なので目をつむって下さい

## 第六話 久し振りなの

魔力の気配・・・

でも、今のはユーノ君の魔力だよな・・・

急に消えちゃったから、何者かに撃退されたって事だよな。

だけど、ユーノ君以外に魔力の発生は感じられなかった。

もしかして、アルフに格闘戦で撃退されたのかなあ？

撃退はされたが、倒した人物は残念ながら外れである。

なのはは地球の裏の世界に一切関与してないから、海鳴市の超人達を知らないのだ。

海鳴市や地球には数多くの一騎当千の強者がいる。

それこそ、管理局のSSSとも渡り合う者達である。

彼等は人に在らざる者だったり、常人を超えた身体能力で時の刻みを遅く感じたり出来るのだ。

うーん、でもジュエルシードの発動した気配が無いんだよね。

大体の位地は特定出来ても発動しないと封印は出来ないからなあ。

もうちょっと、アリサちゃんで遊ぼう

「アリサちゃん、ほっぺにクリームが付いてるよ」

私はアリサちゃんの頬に付いてるケーキのクリームを人差し指で拭い、自分の口に含む。

これにはアリサちゃんも顔を真っ赤にして混乱に陥いる。

「にゃ、にゃのは！！何するのよ！？」

恥ずかしさの為か、上手く呂律が回っていない。

「えへへ、つい」

「ついじゃないわよ！！私の許可無しでこんな事をするな！！びつくりするじゃないの・・・」

「うん、ゴメンね」

「分ければ良いのよ。次からは許可を取ってからしなさいよ・・・  
すずか、笑顔でビデオカメラをこっちに向けるな！！」

「うふふ、なのはちゃんとアリサちゃんがあまりにも仲が良かったから、つい」

喜色満面で、私がアリサちゃんのクリームを食べるシーンをリピートし始めるすずかちゃん・・・

すずかちゃんの前でするのは早計だったかなあ・・・  
後あのデータは何に使うのかも分かった物じゃないし・・・

その時遂に待ちわびていたジュエルシードの発生の気配を感じる。  
他にもフェイトちゃんの魔力の気配も同時に発生。

「あ、私ちよつとお手洗いに行つて来るね」

そう言つて席を外しフェイトちゃんの気配を感じる方向に向かった。  
森の中でフェイトちゃんは、ジュエルシードの所為で巨大化した猫と戦闘していた。

アルフの姿は無かった。よくよく考えてみれば、アルフはこの戦闘に参加してなかった気がする。

私は掌を猫に向けて、掌の上にジュエルシード封印の術式を組み込んだスフィアを展開する。

突如出現した魔力の気配に驚きフェイトちゃんが私の方を向くけど気にはしない。

展開したスフィアを猫に投擲。

それは真一文字に空を裂き、猫に直撃してジュエルシードから解放元の大きさに戻った猫は何処かへと走り去る。

「アナタは誰？」

突如出現しフェイトちゃんの獲物を横撮りする私を睨み付ける。

「高町なのはだよ。ねえ、あなたは誰？」

「名乗る必要は無い」

うーん、昔のフェイトちゃんってシグナムみたいに固いな。・・・

「母さんの邪魔はさせない。バルディッシュ！！」

バルディッシュ有りでも昔のフェイトちゃんの魔力値はこんな物か  
)

これならレイジングハートが無くても楽勝だね

死神の鎌に類似したバルディッシュ片手に自分の方へ突き進んで来るフェイトを見て、にこりと笑う。

そして、フェイトがバルディッシュを振るいなのはを真つ二つに切断するが、切断されたなのはの姿が消える。

「幻影魔法！？はっ！？」

自分が幻影を切ったと認識させられた後には背中から優しい匂いがして、ギュッと抱き締められていた。

「普通はね、名前を言われたら名前を言い返すんだよ」

なのははフェイトの耳近くに顔を持って行き優しく諭す。

「ふえ、フェイト・テストロッサ」

「そつか、フェイトちゃんかあ。良い名前だね　じゃあ、フェイトちゃんは どうして ジュエルシードを集めてるの？」

「お母さんに集めるように言われたから」

プレシアへの依存が凄いなあ・・・

あゝ、今からプレシア殺しに行こうかなあ・・・  
大体の位置も前回で把握してるし・・・

「そつか、じゃあフェイトちゃんはお人形なんだ？」

声は優しく顔は笑顔で、だが、言ってる事は相手を侮辱する物。

「違う・・・私は　」

「違うないよ。フェイトちゃんはお人形さんだよ。命じられた事だけを忠実に言うお人形さん」

「違う！！これは私の意志でやってるの・・・」

声を荒らげて否定。

だけど、後半になるに連れて声が弱くなる。

「嘘だね。声がどんどん弱くなってるよ・・・それに・・・」

なのはがフェイトの体に指を這わせる。

甘美な刺激が襲うと思いきや、フェイトの顔には痛みに耐える苦しみの顔。

「体中に鞭で叩かれた跡が有るよね？これは誰にされたの？」

「お母さん・・・」

「お母さんの為にしてあげてるのに、どうしてフェイトちゃんは鞭で打たれてるのかなあ？もしかして、フェイトちゃんは鞭で打たれるのが好きなの？」

「違う・・・」

「当然違うよね フェイトちゃん、さっきは人形って言ったけど、フェイトちゃんは人形じゃないんだよ。生きてる人間なんだよ」

「違う・・・私は」

「フェイトちゃんはクローン人間って知ってる？遺伝子を用いて全く同じ人間を生み出す技術なんだけど？」

フェイトの体が震えてるのを密接してるのはは分かった。

震えてる理由は、フェイト本人がそれに類似した技術で生み出されているからである。なのはがこの後にどのような言葉を紡ぐのか



怖いのである。

「でもね、クローン人間だってね立派な人間なんだよ。自分の意志を持って、本当に好きな事をして、喜び、怒り、哀し、楽しむ。生まれは関係無いんだよフェイトちゃん」

もう一度なのははギュッとフェイトを抱き締める。

「だから、フェイトちゃんも自分に素直になって」

「だけど、私はお母さんにしか必要とされてないし、私の居場所はあそこにしか無い・・・」

「そんな悲しい事を言わないの。私にとってフェイトちゃんは大切な人だよ。それに居場所が無いなら私の家においでよ。それで、一緒に暮らして、一緒に喜び、怒り、哀し、楽しむよ」

なのははフェイトの体を回し、自分の方を向くようにして、飛びっきりの笑顔で微笑む。

その太陽の様な言葉と笑顔で、フェイトのプレシアに対する依存と云う名の氷が溶けて無くなる。

「うん」

フェイトはなのはに直視されてる事が恥ずかしいのか、顔を赤らめ頷く。

だが、これでハッピーエンドが来なかった・・・

なのはとフェイト上空の空が黒く曇り始める。

この出来事にフェイトは恐れ、震える。

「お母さん・・・」

震える体で紡ぐのは、母親と云う言葉。

黒の曇りから稲妻が迸り、帯電を始める。

そして、特大の一発がなのはとフェイトを襲おうとした時に・・・

「邪魔なの・・・スターライトブレイカー」

なのはは掌を自分達に迫る一撃に向け、自分の最強技を放つ。

桃色の閃光は稲妻を飲み込み、曇り空をも吹き飛ばし何処かへと消える。因みにこの威力には、プレシアの強さを一番認識しているフェイトが驚く。

「じゃあ、フェイトちゃんの新しい家に行こっか」

「あ、新しい家？」

なのはに手を引っ張られるままについて行く。

目的地は分らないが、なのはなら信じれるのか顔は少しワクワクした物である。

私は携帯を取り出し、家に帰るとアリサちゃんに報告。

「ちよっ！！待ちなさいよ！！」とか言ってたけど、ひたすら謝り封殺。明日学校で怒られるだろうなあ・・・

第七話 不幸拡大なの・・・（前書き）

兎の言動が明らかにオカシイですが、そこはnaonaoクオリティと云う事で諦めて下さい・・・

## 第七話 不幸拡大なの・・・

「うう・・・酷い目に会ったよ・・・」

ノエルの攻撃により、痣が出来た部分に薬草を擦った物を当てて治療をしている。

無限書庫でロストログア以外の情報も収集してて良かったと思いつける。

この世に無駄な知識は無いんだなと喜びに満ちていたが、近くの草村がガサガサと音を立て始めたので、直ぐに臨戦態勢に移行。草村の揺れから、相手は大人くらいと見て取れる。

ジュエルシードにより凶暴化した生物か？

それとも、真つ黒クロ助の母リンディさん率いる管理局か？

後者ならまだ良いが、前者なら命に関わる。

ひとまず、ジュエルシード封印の術式を組み、草村から出て来るのを今かと待つ。

「何処、フェイト」

草村から出て来た人物は、フェイトの使い魔であるアルフだった。幾ら経っても帰って来ないご主人を探しに出て来たのだ。

あ、アルフう！？

って云うか、何故にフェイトを探してるの！？

「ねえ、あんたフェイトを知らない？」

「名前だけで誰か特定出来ると君は思うのかい？」

「そうだよね・・・えつとねえ、こんな感じの女の子」

自分の両髪を手で握りしめツインテールを作る。

「うーん、見てないなあ・・・」

「そっか、ありがとね。じゃあ私はフェイトを探しに行かな・・・」  
言い終わる前に地面に倒れる。

「どうしたんだ!？」

目立った外傷はない、考えられるのは目に見えぬ内部の傷。  
特に脳や心臓に損傷が合ったら拙いので、激しく揺らすのはタブーである。

「お・・・お腹空いた・・・」

あゝ・・・こう来たか・・・

前回でもアルフは食い意地張ってたからなあ。

何度僕の弁当のおかず（肉限定）が持つて行かれた事やら・・・

「えつと、ご飯食べる？」

非常食にと作った山女魚を干した物をアルフに見せる。

「いる!-!」

この際に僕は大きなミスをした。

一つ目は皿に置かずに手で持って見せた事。

二つ目は空腹状態の獣程感情のコントロールが出来ない生き物は無いという事。結果・・・

アルフハ僕ノ手ゴトパツクリト行ッタ・・・

「ウギヤアアアアア!!」

「お父さん、お母さん!!お願いがあるの!!フェイトちゃんをうちに住まわせて!!」

仕事を終えて帰って来た二人になのはは飛び付きお願い。

「「フェイトちゃん?」」

初めて聞く名前に二人の頭にはクエスチョンマークが飛び交う。

「おいでよ、フェイトちゃん」

「うん・・・」

愛くるしくゆっくりと壁から顔を出す。  
その仕草は敵を怖がった小動物の行為。

「うん、良いわよ」

その行為で可愛い物好きのお母さんは落とせたが、お父さんは成功に至らず。

だが、お父さんは正義感が強いから、そこを突く!!

この取引を戦略ゲームで表現するなら、確実に今の台詞でなのはのカットインが入るだろう。

それくらいに彼女は成功を確信している。

「お父さん、これを見て!!」

なのははフェイトに近寄り、志郎と桃子の前に連れ出し、フェイトの服に手をやり・・・  
脱がした・・・

「こ、これは・・・」

「酷い・・・」

彼女の白い肌には無数の蚯蚓腫れが走っており、非常に痛々しい。  
戦闘をあまり好まない桃子に至っては目から涙を浮かべる。

「フェイトちゃんのお母さんは自分の子にこんな事をするんだよ!  
!だから、私、可哀想で・・・」

なのはは目に手をやり擦る。眼からは透明な雫・・・そして、小さな手には何処から取りだした目薬が・・・実に演技の上手い事である・・・

「分かった。フェイトちゃんは今日から我が家の一員だ!!戸籍とかは任せろ!!美沙斗に押し付けるから!!」

「そうね。まずはフェイトちゃんの傷にお薬を塗らないと」

お母さんはフェイトちゃんの手を優しく握り、薬箱が置いてある和室に連れて行く。

お父さんは玄関付近に設置されてる受話器を手に、美沙斗さんに電話をかける。

アリサちゃんの怒声よりもっと大きな怒声でお父さんに返している。

と云うか、戸籍を作るってお父さんは何をする気なの!?

「んじゃ、頼んだぞ」

『待たんか!?!この大馬鹿野郎!!!』

噛み付く美沙斗さんだが、受話器を下ろされては意味を成さず。

受話器を下ろされて通話終了音が鳴っても叫んでる姿が目には浮かぶ・・・

本当にゴメンナサイ・・・

さて、なのはの予想は当たってるかどうか、香港国際警察警察防隊の風景を覗いてみよう。

「待たんか!?!この大馬鹿野郎!!!」

そして帰って来たのは切断の電子音。

次に鳴った音はプラスチックの碎ける音。

発信源は美沙斗の手にある電話の受話器だった物から・・・



他の隊員達はまたかと云う生暖かい目を向ける。

勿論、美沙斗にはない、何代目かも数えれないきれない自分達の課の受話器にである。

因みに美沙斗が赴任してから最短記録は二代目黒電話の一時間である。

「美沙斗、資料を持って来たヨ。あれ、今度はどうしたネ？」

手にどつさりと書類を持った女性兎が、部屋の隊員達の目が生暖かいのに気付き尋ねる。

「あ、兎さん。美沙斗がまたやったんですよ」

「アイヤゝゝゝ何代目が分からない受話器に敬礼あるヨ。南無南無ゝゝ」

「いや、兎さん？意味分かって使ってます！？」

「日本文化は難しいネ」

「ですよゝゝ、自分も納豆が未だに食べれないんです。あゝ、兎さんが居ると和みますね。美沙斗と課を入れ替わり、グヘッ！？」

ご臨終された受話器が隊員Aに投げつけられる。

神速を用いての投擲なので、受話器は音速一歩手前の速度だったりする。

「今ね、機嫌が悪いの。変な事を口走ったら殺すよ？」

香港国際警察最高戦力である美沙斗に反論出来る者はそう居らず、

他の隊員は隊員Aの二の舞にならないようにと首を縦に振りお口にチャックをする。

「で、今度は何言われたノ？」

「架空の戸籍を作ってくれってさ」

「簡単だヨ？中国は戸籍持たない人が一杯ヨ。政府も戸籍管理は徹底的にはやって無いから東洋人の一人二人はどうにでもなるネ。」

「それくらい知ってるわよ。ただ、白人の子の戸籍なのよ！！しかも、高町フェイトって何よ！？余計作り難くするなって話よ！！」

激昂し声を荒らげる。

「アイヤ……頑張ってね。資料はここに置いとくよ、それじゃあ、再見」  
サイツェン

兎も今逃げねば間違いなく巻き添えを喰らうと撤退開始。  
だが、肩に万力で締められたかの様な痛み感じ、足を止める。

「兎、手伝ってくれるよね？」

「アイヤ、私は仕事を思い出したネ。って、痛い、痛いヨ！！手伝うから手を離すヨ！！」

なのはの想像以上に不幸は拡大中だった・・・

## 第八話 それぞれの朝なの（前書き）

ども、御蔭さまで、無事に1万アクセスと総合評価50を突破できました。

シルフレ同様こちらも頑張って行きたいです

## 第八話 それぞれの朝なの

「今日から宜しくねフェイトちゃん」

「「宜しくね」」

「「宜しくな」」

とても暖かい・・・

なのはが居て、なのはのお父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんが一緒に居てくれる。

それだけで、心が暖かい。

自分の本当の子供や兄弟じゃない、偽りの家族である私に微笑んでくれて優しくしてくれる。

「えっと・・・宜しくお願いします」

フェイトは顔を赤くして応える。

「きゃあ、可愛い」

なのはのお姉さんは私を抱き締めて頬擦りをする。

なのはのお姉さんの胸に私の顔が埋まり息苦しい・・・

「止めてやれ美由希、フェイトが困惑してるだろ」

「えー、良いじゃん。キョウちゃんのケチ、シスコンー!」

「一度川に放り込まれたいようだな？三途の川に・・・」

「フェイトちゃん、私、キョウちゃんに殺される」

サンズノ川？

放り込まただけで死ぬような川？

きっと、凍え死ぬ程水温が低いんだ。

「そんな事したらお兄ちゃんが警察に捕まるよ」

「なのは、安心しろ。俺の手を汚さずに殺すから、食卓の面子から消えるのは愚妹だけだ」

「お願いだから私の心配もしてよー！！」

「ふふっ」

三人のやり取りを見ていたフェイトは可笑しいのだろうか笑う。

生まれて初めて味わった楽しいと云う感情。

そして、何時までもここに居たいと恋願うのだった・・・

高町家の朝は早い！！

午前5時には、恭也及び美由希は訓練の為に起床。

志郎及び桃子は翠屋用の軽い仕込みと子供たちの朝食を作る。

そしてなのはとフェイトは、同じベッドでまだ仲良くおねむだった・

フェイトの部屋は本人となのはの希望によりなのはの部屋を共有する事になった。

なのはの部屋にもう一つベッドを置くスペースなど有る訳なく、昨夜フェイトが床に布団で寝ると申し出たが、なのはがそれを良しとせず、半強制的になのはのベッドに引きずり込まれたのだ。

現在、なのはは抱き枕宜しくフェイトの事を抱いており、抱き心地が良いのか幸せな顔で寝ている。

フェイトもフェイトで人の温かさを初めて直で味わい、心地良い夢を見ており時折寝言でなのはの名前を洩らしたりしている。

このまま二人を観察しても暫くは変化が無さそうなので、ちよつぴり不幸な二人に視点を持って行くとしよう。

「アルフ！！そつちに逃げたよ！！」

「待てっ！！今日の晩御飯！！」

朝早くから食糧調達に勤しむ二人。

今晚の食糧こと猪を必死に追い回しているのだ。

「夜行性の筈なのに何故に朝っぱらから居るんだ！？」的な突っ込みは無しの方向で御願います！！

「うおおお！！」

真正面から自分に突進してくる猪に怯むことなく腰を軽く下ろし拳を構える。

「チェーンバインド」

ユーノの展開したバインドが猪の速度を少しずつ下げる。

猪が拳の圏内に入った途端に怒涛の叫びと共に拳を突き出し、猪の鼻っ面に叩き込む。

猪は断末魔の叫びを上げて大きな体を地面に着ける。

「いっちょ上がり　これで、暫くは食いつばぐれそうにないな」

「そうだね。じゃあ、家に持ち帰って保存食にしよう」

「うん」

アルフは自分の体よりも大きい猪を軽々と背負い、ユーノの家へと向かう。

実は昨夜にユーノから食事を貰った後に、フェイトが見つかる当面の間はユーノハウスに住まわせて貰うことにしたのだ。

タダで居候させて貰うのは悪いと今朝は狩りの手伝いをしていたのだ。

ユーノもアルフが居るのならと、普段は相手にしない大型獣類にターゲットを決める。

最近は動物性タンパク質をあまり摂取してない事を考慮しての事である。

徐々に逞しさを増しているユーノであった・・・

二人は家に戻るなり朝食の準備を開始する。

マッチやライターの類は持ってないし、魔力変換資質『炎』も持っていないので、当然摩擦を用いた千年以上も前の技術を用いている。森の木の太い枝から垂れ下がっていた紐。先端が輪っかになっているがユーノは気にもしない。

後はその木の下に落ちていた白色の棒と板を用いて作ったマイギリ

式火起こし道具を用いてである。

作った本人は気付いてないが実に物騒不気味極まりない物である。

煙が立ち始めると、綿で軽く包み込んで息を吹き付ける。

火が次第に強くなると、石で作った竈に持って行き中に入れてゆつくりと小枝等を入れて火をより強く、より火力を持続出来るようにする。

次に竈の上に、水の入った鍋と木の枝を刺した川魚を横において一段落。

後は火加減に気をつけるだけである。

ユーノが魚を焼いてる間にアルフはと云うと、ユーノの作った食べられる野草農園から適当に野草を抜いている。

自分の抜いた野草が本当に食べられるのだろつかと幾度と抜いた野草を鼻で嗅ぎ、野草独特の匂いに眉を顰める。

アルフは抜いた野草を抱きかかえてユーノの元に持って行き、お湯の中に投下。

こうして彼等の朝御飯が完成するのだった・・・

「はぁ・・・フェイトは今頃どうしてるんだろう？私達と違ってひもじい思いとかしてないよねえ・・・」

え、これでひもじくないって？アルフはプレシアと住んでる時は何を食べてきたんだ！？

「アルフ・・・じゃあ、今日は町に出てフェイトと一緒に探そうよ。僕にも探している人がいるし」

「昨夜言ってたのはって子かい？」



「うん。僕の大事な人なんだ」

「そっか・・・なのはって子が見つかるの良いな」

「アルフもね」

彼等は食事を一気に掻き込み町に繰り出すのであった・・・

## 第九話 見られちゃったなの・・・

ふう、今日も良い汗をかいた。

朝の訓練と一風呂終えた恭也は桃子になのは達を起こすように頼まれ、なのはの部屋に向かっていたのだが・・・

「ほら、フェイトちゃん恥ずかしがらないで」

「でも、なのは・・・私、こういうのは初めてだし・・・」

「大丈夫、私に任せて」

部屋から聞こえる怪しげな会話に足を止める・・・  
そして、服が擦れ合う音と服が何か軽い物が床に落ちる音。

なのはあああ！？

お前は一体中で何をしてるんだ！？

いや、落ち着くんだ・・・

二人ともまだ小学生だぞ、それに女性同士・・・

きつと早朝訓練で疲れてるから、幻聴が聞こえただけだ。

「フェイトちゃん、可愛いね」

「な、なのは・・・そんなに见ないで・・・恥ずかしいから」

ぐふあ！？

いかん、俺は絶対に許さん！！

「お前らは何してるんだ!？」

ドアを蹴り開けた恭也は三つの物体を視界に収め、自分はやはり馬鹿だったと再認。

部屋の中には聖小の制服を着たフェイトの姿と床にはフェイトがパジャマとして着ていたなのはの服。

これだけならまだ良いのだが・・・

問題はもう一つ視界に入った物である。

着替え中で半裸姿の愛妹なのは・・・

「にゃ、にゃ!？」

自分のお着替えを兄に見られ混乱状態に陥るなのは。

一応中身は二十代のなのはである。

異性に裸を見られて気にしない年では最早無い・・・

「す、すまない・・・母さんが朝御飯だから降りてこいと・・・」

「にゃあああああ!！」

恭也の必死の弁解も上手く行かず、なのは絶叫・・・

なのは大好き一家で、これにより発生されると思う出来事は・・・

「なのはどうしたあ!！」

親馬鹿である志郎の出現である。

既に手には真剣を抜刀しており、何時でも不審者を叩き斬れるようにと準備は万端である。

そして娘の部屋の前で硬直してる恭也を見つけて・・・

「なにを小学生の妹達に発情してるんだ！！この馬鹿息子があ！！」

真剣を振り下ろす。

恭也は直ぐ様神速を用いて攻撃をかわす。

「俺を殺す気か！？馬鹿親父！！」

「妹の着替えを見て発情する息子を持った記憶は私には無いぞ！！正氣に戻るんだ恭也！！」

「小太刀を振り回して、息子を斬り殺さんとしてるバーサーカーにそっくりそのまま同じ台詞を返したいわ！！」

二人の戦闘はなのは次の絶叫で駆けつけた桃子によって幕を閉じた。

お、お兄ちゃんに裸を見られた・・・  
うう・・・恥ずかしいし、顔を合わせ辛い・・・

中身が大人なのが仇なし、物凄く恥ずかしがるなのは子供の頃と違いケロリと忘れられないのが大人である。

朝食の最中には気まずい空気が場を征服しており、愚妹こと美由希が恭也をからかう言葉と、恭也の何かが切れる音と・・・人間一人が壁に埋没する音しか無かった・・・

恭也の美由希への攻撃のおぞましさに初見のフェイトは怯え、隣に座るなのはに抱き付く。

にやははは・・・やつぱり普通の人が見たら怖いよねえ・・・  
慣れって恐ろしいなあ・・・

しかし、怯えて抱き付くフェイトちゃん可愛いよ～  
小さい時はこんなに初々しいのに、大人になったらあんなに逞しい  
の？うーん、シグナムの影響かなあ？

「おい、フェイト。口にご飯粒が付いてるぞ」

恭也は愚妹を抹殺した後、フェイトの頬にご飯粒が付いてるのに気  
付き、手を伸ばして取ってやり、それを口を含む。

にやああああ！！お兄ちゃん堂々と何してるの！？

「あらあら、恭也も世話好きねえ」

恭也の行為に桃子は口に手をやり、上品そうに笑う。

「あ、ありがとう・・・」

フェイトちゃんも顔を赤くしてお礼を言っちゃ駄目なの！！

「恭ちゃん、私のほっぺにもご飯粒が！！」

何時の間にか復活したお姉ちゃんが、故意にご飯粒を付けてお兄ち  
やんに強請るが・・・

「ああ、付いてるな・・・神速を用いたでこぴんで取ってやろうか  
？」

「やっぱり、遠慮します・・・」

親指と人差し指で円を作り上げ、見た客も裸足で逃げ出しかねないスマイルゼ口度で訪ねる。

流石に、己の命をすり減らしかねないと判断した美由希は、手を横に振り引く。

今日の朝はフェイトちゃんが居る。

それだけで、よりいっそう賑やかになる食卓。

学校もどれだけ賑やかになるのかな？

・ 前の時みたいにな、アリスちゃんが張り合わなければ良いんだけど・・・

## 第十話 襲来雷の転校生なの

フェイトちゃんは行きなりの転校と云うのもあり、お父さんの車に乗せられて、私より先に学校へ向かった。

なので、今日の登校は私とアリサちゃんとすずかちゃんの三人と云う何時も通りの登校だった。

勿論、登校時の話題は昨日の件である。

『アリサちゃんの言うこと一つ聞く』と云う、なんとも小学生らしい約束で解決した。

約束後のアリサちゃんは始終嬉しそうに笑い、それは学校に着きホームルームが始まるまで続いた……

「今日は転校生を紹介する。おい、入って来て良いぞ」

先生の合図で入って来るのはフェイトちゃん

アリサちゃんが転校して来た時同様に皆の目がフェイトちゃんに向けられる。

「高町フェイトです。よろしくお願いします」

ぶふっ！？お父さん一体美紗斗さんに何をさせたの！？

フェイトちゃんの名字が見事変わったの！？

その事は家に帰って聞くとして、今は初々しいフェイトちゃんを私の目に焼き付けないと

フェイトちゃんは皆の前で挨拶するのは初めてと云う事もあり、前史同様恥ずかしそうにもじもじしながら自己紹介。

あまりにもその仕草が可愛いかった私は即座に携帯のカメラで写真を撮る。

「高町はこのクラスの高町なのはの親戚だ。まだ日本に馴れてないから、聞きたい事が有ったら高町なのはに聞くように。じゃあ、高町の席は・・・ちっ、同性って呼び難いな・・・お前等二名は今日から名前で呼ぶぞ。フェイトの席はなのはの隣だ」

相変わらずいい加減な担任教師である。

だが、ルックスが良く話し易い事から生徒からの人気は高い。

フェイトは笑顔で手を振るなのはの元に嬉しそうに早歩きで向かう。なのはの隣に新しく置かれた席に座り、なのはの方を見て照れ臭そうに笑いかける。

「んじゃ、ホームルーム終わり」

担任教師が出席簿を手に抱え教室から出ると、一斉になのはとフェイトの周りに人集りが出来る。

そして、次々と質問を投げ掛ける。

二人の関係やフェイトの趣味。

質問の種類は様々である。

質問を答える度に新しい物が飛んでくる。

その光景になのはは少し安堵する。

前史では、リンディの所で一般常識等を学んでから来ているのに、今回はいきなりの転校だったからである。

これを見た限り、フェイトは無事にクラスに馴染めそうだった。

ふふふ、これから楽しそうになりそうなの



一躍クラスの人気者と化したフェイト、だがそんな状況を面白く無さそうに見ているアリサ。

「ふふふ、アリサちゃんフェイトちゃんにジェラシー？」

理由は至極簡単。何時もは自分にぴったりだったなのはがフェイトばかりを相手するからである。

転校初日だからと云うのは良く分かる。

だけど・・・何故か焼いてしまう・・・ジェラシーを感じてしまう・・・胸が熱く痛い・・・

「ち、違うわよっ!!」

カメラ片手ににこにこと凶星をつくすずか。

つかれたアリサは顔を真っ赤にして手をバタバタと振って否定するが、見え見えである。

「でも気になるね。なのはちゃんの親戚に外国人は居なかった筈なんだけどね？友達や知り合いは一杯居るんだけどね。フィアッセさんや飛ちゃんとかね」

「そ、そうでしょ!!私もそれが気になって不機嫌な顔してたのよ!!決して、なのはを取られた気がしたからとかじゃ無いんだからね!!」

あ、アリサちゃん・・・本音が出てるよ・・・

だけど、あの子は誰なんだろう？

今までのなのはちゃんはフェイトちゃんの事を話した事は一度も無い。話して貰った事がある外国人は、フィアッセさんと飛ちゃんの二人

だけ・・・

何時も隠し事はしないのはちゃんだから、フェイトちゃん  
の存在は最近まで知らなかったのかな？

だったら、昨日のお茶会で急に帰ったのはフェイトちゃん  
が原因？

次々とすずかの頭の中で創り出されるフェイトの正体案。

そして、完成したのがフェイトロボット説か隠し子説と云う物だ・

・

まあ、なのはがフェイトを半分拉致し、美紗斗がフェイトの贋の戸籍を作ったなんて普通は思い浮かばないけどね・・・

うん、後でなのはちゃんに聞いてみよう。

**第十一話 激突、炎対雷なの!!（前書き）**

今年も残すはあと数十分!!  
皆さん、良いお年を!!

## 第十一話 激突、炎対雷なの！！

何か作者の策謀の匂いがするが、一時間目は体育である。

ふふふ、絶景なの

更衣室内でアリサやすずか、フェイト達の着替えを見て悦に入っているのは・・・はつきり言って危ない人状態である。

今日のアリサちゃんの下着は青と白のストライプ

すずかちゃんとフェイトちゃんは白一色の下着

麻雀なら白のみだから字一色の役満なの

とっても眼福なの

おっといけないいけない、私も着替えないと

「なのは、この服恥ずかしいんだけど・・・」

体操着ことブルマを身に纏ったフェイトは、恥ずかしそうに上の服の前を両手で伸ばして太股辺りまで隠す。

昨日まであった傷は、桃子の塗った謎の薬で跡形もなく消えている。

私としては、フェイトちゃんのバリアジャケットの方が露出度も高く恥ずかしいと思うんだけどなあ？

「大丈夫だよ、とっても似合って（萌え）るよ」

「そう？」

「うん、だから大丈夫だよ」

「な、なのは・・・私はどう?」

私がフェイトちゃんを誉めていると、顔を真っ赤にした体操着姿の  
アリサちゃんがやって来る。

毎回体操着姿は見物させて貰ってるのに、今日に限って聞いてくる  
と云うのは・・・まさか、アリサちゃんがジェラシーを  
アリサちゃん可愛い!!

「うん、アリサちゃんも凄い似合ってるよ」

「ふん、やっぱりそうよね」

言葉とは裏腹に顔は非常に嬉しそうに・・・だが、今度はフェイト  
が少し不機嫌そうにする・・・

はっ、まさかこれがアニメや漫画で有名な泥沼三角関係!?

ホーリートライアングル

でも、この状況をどうにかしないと・・・

最後に船だけ浮かんで、「ナイスボートです」で終わってしまう  
予感が・・・

中には誰も居ませんよ的展開は嫌なの!!

「あの・・・なのはちゃん?どうして顔を青くして震えてるの?気  
分でも悪いの?」

「何ですって!?!しょうがないわね。私が保健室に連れて行ってあ  
げるわ」

「なのは、私が連れて行ってあげる」

二人は素早くなのはの腕を掴む。

しかし、今日来たばかりのフェイトに保健室の位置が分かるのだろうか？

そして、二人は小学生の女子が出せる力とは思えない程の力で、なのはを綱引きの要領で引つ張り合いする。

二人とも痛いから！！

体が真つ二つに避けちゃうから！！

すずかちゃん助けて！！

この中で一番付き合いの長いすずかにアイサイン。

サインを受け取ったすずかは笑顔で、二人がなのはを取り合う写真を一回取ってから、二人をなのはから剥がす。

「はいはい、そこまで。なのはちゃんが痛がつてるでしょ？私がなのはちゃんを保健室に連れて行ってあげるから、二人は体育館に先に行つてて」

すずかは素早くなのは手を引き、更衣室から出て行く。

高速戦闘を得意とするフェイトでさえ、すずかの行動の早さにはついて行けず・・・

「にやははは、すずかちゃんごめんね」

「別に良いよ。私だって何時もなのはちゃんに助けて貰ってるし。本当に体は大丈夫？」

「引つ張り合いされて痛い・・・」

「いや・・・そうじゃなくなつて・・・」

会話が上手く噛み合わない・・・

取り敢えず、保健室になのはを連れて行ったすずかは、保健の先生になのはを預けて、アリサとフェイトが張り合っていないかと心配なので、体育館へと走る。

そして、その心配は現実の物となっていた・・・

今日の体育の内容は、こんな日に限ってドッジボール・・・

コートのインにはフェイトとアリサと目にも留まらぬ速度で飛び交うボールの姿しかあらず。

「うおりゃあああ!!」

アリサの怒涛の叫びと共に投げられる渾身の一撃。

直に受け止めたフェイトの顔に一瞬苦の表情。

運悪く突き指をしてしまったのだ。

だが、ボールは落とすまいと精一杯掴む。

そして助走を付けて、痛む指を我慢しボールを投げる。

ボールには威力等無く、ゆっくりと宙を舞いアリサの元へ・・・

今まで速いボールしか無かった為か、アリサはボールを取り損ねる。担任の先生は終了のホイッスルを鳴らす。

これで幕は降りたかと思いきや、アリサはスタスタとフェイトに近付きフェイトの腕を引っ張る。

「指は大丈夫？」

「えっ？」

「最後の私のボールを取った時に突き指したでしょ？」

「うん」

フェイトは首を縦に動かして肯定。

そんなフェイトを見てアリサは溜め息を吐く。

「先生、フェイトが突き指したので保健室に連れて行って来ます」

「おう。んじゃ、頼んだぞ」

手を軽く振ってアリサに任せ、自分は他の生徒に次の指示を出し始める。

「本当に、気を付けなさいよね」

「ごめん・・・」

「いや、謝らなくても・・・まあ、私もむきになりすぎたわ・・・  
ごめんね・・・」

「いや・・・えっと・・・」

フェイトは何かを必死に考え始める。

アリサには何を考えているのか分かったのか・・・

「アリサよ。アリサ・バニングス」

「私はフェイト。高町フェイト」



「「よろしくね」」

アリサが何かしでかすのかと心配したすずかだが、二人の笑顔を見て胸をなで下ろす。

どうやら二人は上手く行きそうだ。

あとはなのはがどうするかである。

だが、きっと良い方に進むとすずかは信じている。

## 第十二話 やり取りなの・・・（前書き）

なんと総合評価がまさかの100を突破  
こんなに遅い投稿なのに・・・  
自分でも信じられなかったりします（汗）

## 第十二話 やり取りなの・・・

「先生、調子が良くなりました」

「はいはい、じゃあ、もう少し寝てましようね」

本日何度目のやり取りだろうか、そして、何度目のスルーだろうか・  
・

うう・・・アリサちゃんとフェイトちゃん大丈夫かなあ・・・

熱を計らさせられた際に、運悪く微熱だったので、ベッドに寝かされたのだ・・・しかも、保健の先生の監視付きで・・・

まあこれは、なのはが何度も保健室から脱走を企てたのが原因だったりもする。

現在何とかして抜け出そうと頑張るが、保健の先生はにこにこ笑いながら、自前のスルースキルを全開。

「先生、お手洗いにいきたいのですが・・・」

「あらあら、病人だけで行くのは危ないから先生もついて行ってあげるわ」

くっ、一枚岩にはいかないの・・・

「じゃあ、のどが渴いたから、水を飲み・・・」

「水道水はカルキ臭くて飲みにくいでしょ？保健室のなら浄水器が付いているから、ここで飲むと良いわ」

手強すぎなの!!

なのはが次の策を練っていると、保健室のドアをノックする音。

「あら、誰かしら?」

保健の先生がなのはの側を離れた今が好機と、なのはは判断。

ゆつくりとベッドから起き上がり、抜け出そうとするが、保健室への来訪者と目があつてフリーズ。

「あつ、なのは!!!寝てないと駄目じゃない!!!フェイトからも何とか言つてやりなさいよ!!!」

「そうだよ、なのは。アリサの言う通りだよ」

あれ?二人とも名前呼び?

「えつと・・・ごめん・・・」

鬼のような剣幕で二人が詰め寄ってくるので、仕方なくなのは再びベッドに横になる。

「ところで、二人はどうしたの?」

「えつと、フェイトが突き指をしたので連れてきました」

「ええ!!!フェイトちゃん大丈夫、きゃっ!?!」

勢い良くベッドから飛び起きようとするが・・・保健室の先生はな

のはの頭を一瞬で掴みベッドに押し戻す・・・

「病人は静かにしないと駄目よ」

「す、すみません・・・」

今この瞬間に、フェイトの中での保健室の先生の強さがなのはを超えてしまい、恐怖の対象と化した・・・

「さて、フェイトちゃんだったかしら、怪我した場所を見せてちょうだい」

「は、はい・・・」

「取って食べはしないから、リラックスしてちょうだい・・・なのはちゃんは何度も脱走を企てたりしたから、少し力付くだったけど、普段は大人しい性格だから安心してね」

先生、余計なことを・・・

「何度も脱走を企てた？」

「なのは・・・」

うう、アリサちゃんとフェイトちゃんが睨んでる・・・

「じゃあ、フェイトちゃん指を見せてちょうだい。湿布を張っておくから」

先生は引き出しから湿布を取り出し、フェイトちゃんの指に貼る。

それは、突き指により生じた熱を奪い、指をひんやりと冷やす。

「あとは安静にしてなさいよ。じゃあ、あなた達戻って良いわよ」

「」「」「はい」「」

どさくさに紛れて返事が一つ多い。

「なのはちゃんは駄目よ」

だが瞬時にばれる。

「はい・・・」

高町なのは、フェイト転校初日の大半を保健室で過ごす羽目に・・・

### 第十三話 再びの出会いなの（前書き）

あゝ、何故か今回は何時もの倍の長さになりました。

恐らく次話は元の長さに戻ると思います。

それと、次話くらいから飛と晶を出す予定ですが、後書き辺りにトラハのキャラの説明付け加えた方が宜しいでしょうか？

作者の脳内では『なのは好き』トラハ知っている』の方程式が成り立っておりますので、知らない人は特にトラハ陣のキャラが出現したらこんがらがってくると思いますので、メッセージが何かで教えて下さい

最後にどうでも良い一言・・・

トラハだったら、なのはパパこと土郎さんが死んだよね、あとすずかは流産だったかな（？）、因みにアリサは亡霊だし、クロノの名字はハーヴェイだし、他にも上げれば幾らでも出てくる・・・

（汗）

既に矛盾が発生しているこの作品・・・その辺に突っ込みは入れないでね・・・

### 第十三話 再びの出会いなの

なのは何処だろう？

ユーノとアルフは街に繰り出してなのはとフェイトを探していた。動物の姿では移動に時間が掛かるため、人型を取っている。

現在は公園にて休憩中。

ジューズの自動販売機が「買・わ・な・い・か」とランプを付けて誘惑をしているが、一文無しの二人には残念ながら誘惑は通じない。

お金を稼ごうにも、この次元では児童労働は禁止されており、幾ら体は子供、頭脳は大人のユーノでも働けないのだ・・・

「見つからないね・・・」

「うん・・・」

何かがおかしい・・・

それ以前に街に子供が居ない事がありえない・・・  
思い出せ、普段なのはが何をしていたのかを・・・  
あっ・・・

「そうか、学校だ！！アルフ、なのはの居場所が分かったよ！！」

「ガツコウって何だ？美味しいのか？」

「学校って云うのは、子供達が集まって勉強する所の事だよ」



勉強と云う言葉に反応して、勉強嫌いなアルフは嫌そうな顔をする。

「なのはって子は真面目なんだな・・・なあ、ユーノ。フェイトも学校に居るかな？」

「どうだろう・・・でも、もしかしたら居るかもしれないね」

「よし、ならガツコウとやらに行くよ!!」

アルフは勢い良く立ち上がり、ユーノを急かす。

だが、そうは問屋がおろさず・・・

公園内にジュエルシードの反応が発生する。

そして次の瞬間には人間の何十倍とある巨大なカラスが、ユーノ達を見ていた・・・

「アルフ、先ずはこいつを封印するよ!!」

「オツケー!!」

ユーノは外への被害を恐れて結界を展開。

そして、レイジングハートを起動。

アルフと空中戦を行うカラスに標準を定めようとするが、高速戦闘をしている敵を定めるのは難しく、追うのがやっとの様子。

「ユーノ、まだか!？」

空を飛ぶのを得意とするだけあって中々手強く、アルフの攻撃をかわずや否や嘴攻撃を仕掛けてくる。

鋭い嘴の一撃一撃が、槍が刺さったかの様にアルフに傷を負わせて行く。

ユーノは標準を合わせるのを一時中断し、空へと飛び、辺り一面の空間を歪ませ

て、その歪みからチェーンバインドを放つ。

しかし、カラスはバインドから逃げるように急降下。

そして、攻撃対象をユーノへと変更。

即座に障壁を展開して、拒絶するが・・・

障壁に次々と広がる罅・・・

アルフが急いで援護に向かうが・・・

間に合わない・・・

拙い！？なのは、助けて！！

「ユーノおお！！」

アルフの悲痛な叫び・・・

そして、障壁が砕け散る・・・

ユーノはもう駄目だと目を閉じるが・・・

衝撃は来ず、代わりにカラスの巨体が地面に堕ちる轟音、そして、砂埃・・・

カラスの巨体の上には、ユーノにとって見覚えのある魔術師の姿が有った。

「君達、大丈夫か？」

そう、見覚えのある奴は一番の天敵であるクロノ・ハラウンだった・・・

げっ・・・クロノ・・・クロノと出会うのはもっと遅かった筈なのに？

どうして、ここに！？

「大丈夫です！！ジュエルシードを封印するので、そいつから離れてください！！」

クロノがカラスから離れるのを確認し、シーリングモードのレイジングハートをカラスに向け、封印の術式を込めた緑色の砲撃を放つ。それはカラスに着弾すると、カラスの体内から光り輝く翡翠色の菱形の宝石を取り出し、輝きを封ずる。

巨大化の根元が消えた為、カラスは元の大きさに戻り空へと消える。ジュエルシードを無事に回収しこれで一段落ついたが、新たな問題が出現している。

「僕は時空管理局のクロノ・ハラウンだ。君達と話がしたい。僕について来てくれるかい？」

「嫌」

即答だった・・・

前史でクロノに関わる度に酷使されていた所為か、無意識で要求を拒否してしまう。

「なら、君達を管理外惑星に於いての無断魔力行使の罪で強制連行させてもらう」

S2Uを向けられた瞬間、ユーノの中で切れてはいけないものが切れた・・・

「上等だ！！お前は何時も何時も物事を押し付けて！！」

「ちよつとユーノ！？せつかくだから、フェイトの搜索とか手伝って貰った方が！？」

「何時も？僕と君が会うのは今日が初めての筈だが？」

ユーノの暴走に二人は困惑。

あ・・・落ち着け僕・・・このクロノは僕の知っているクロノとは違うし、それに、アルフの言う通りだ。

クロノ達管理局を利用してなのはに接近すれば良いじゃないか

「あは、ごめん。君が僕の知っている人に似てたから、つい取り乱しちゃたよ」

「そ、そうか・・・物凄い敵意だったか、何時も酷い仕打ちを受けてるんだな・・・」

「そうなんだよ。そいつは僕の上司と云うことを良い事に大量の仕事と栄養ドリンクを送りつけて来て、『悪いが、調べて於いてくれ』だぞ！？一週間もまともな睡眠が取れなかった事が何度あったと思う！？」

ヒートアップしクロノに詰め寄るユーノ。

これが前史のクロノなら、笑いながら「なら、そんな君に特別ボーナスだ」と、新たな仕事と栄養ドリンクを手渡すだろうが、この世界のクロノはまだ子供と云うこともあり、ユーノの剣幕に少し引いてしまう。

「分かったから！！君の苦勞はしつかりと伝わった！！じゃあ、話は船艦アースラで聞かせて貰うよ。僕に付いて来てくれ」

人気のない林の方に移動し始めるクロノに付いて来二人。

林に入るや否や、足下にアースラ艦内への転送魔法の魔法陣が出現し、三人をアースラへと誘う。

アースラの艦内に移動し、先ずはリンディの居る指令室に案内された。

そこには相変わらず、緑茶に砂糖とミルクを入れたリンディティーを笑顔で飲むリンディの姿が・・・

うげえ・・・リンディさんは、よくあれを平然と飲めるなあ・・・無限書庫の司書達の忘年会の罰ゲームにしょっちゅう用いられてたと云うのに・・・

「ふう、美味しいわ あら、いらっしやい 私はこの船艦アースラの艦長をしている、リンディ・ハラウンと云います。あなた達をここに案内したクロノのお母さんです」

「母さん、最後の紹介は余計だから・・・」

「あらそう？もう、クロノったら恥ずかしがらなくても良いのに」

「そうだよ。別に恥ずかしがらなくても良いのに」

リンディの援護に入るエイミィ。

クロノはそんな二人を見て頭を押さえつつ、本題へと話を進めようとする。

「さてと、先ずは君達に見て欲しい映像がある。エイミィ、例の映

像を映してくれ」

エイミィがコンソールを操作して画面に表示させたのは、桜色と黄色の二色の砲撃がぶつかり合う映像とその二つの砲撃の魔力値を表す数値である。

「桜色が3000万で黄色が2500万だ・・・」

桜色と黄色・・・

恐らく、なのはとプレシアかな？

「双方共にSSSランカー級の術者ですね」

SSSランカー、それは管理局のランク決めの物差しで測りきれなかった化物達に与えられる称号。

彼等一人一人が何千人規模の一個大隊に匹敵する力を保有している。今回はそのSSSランカー二名の戦闘形跡が有った為、クロノ達は一目散に飛んできたのだ。

「で、僕達はこの二名の魔術師を追って来た所に君達と出会った訳なんだ」

「はぁ・・・」

「僕が思うに君達が集めているロストロギアが今回の事件の鍵<sup>キ</sup>となる存在ではないかと思っている。そのロストロギアについて話してくれないか？」

「構いませんが、その代わり僕達の御願いを聞いてくれませんか？」

「物にもよるが、取り敢えず話してみてくれ」

「実は僕は人捜しをしているんです。その人捜しを手伝って頂きたいのです」

ユーノとアルフはなのはとフェイトを捜している事を話す。

だが、捜している理由や二人の住んでいる所までは話さない。

訳は、バレると色々ややこしくなるからだ。

フェイトは人造魔導師だし、なのはなのはで先程の画像では桜色の砲撃を放ってたし・・・

クロノはユーノ達の要件を特には気にせず受け入れる。

まさかその二人が今回の事件の鍵とは知らずに・・・

「じゃあ次は僕の番だ。君達が集めているロストロギアについて話してくれ」

「僕達が集めているこのロストロギアは、ジュエルシードと云って、使用者の願望を実現させてしまうロストロギアです。実はこのロストロギアを運んでいる最中に何者かの攻撃を受けて第97管理外界『地球』にばらまいてしまったのです」

「実に厄介な物をばらまいてしまったな・・・」

「攻撃・・・恐らく、先程の魔術師のどちらかと推測されるわね。

向こうより先に全てのジュエルシードを回収しないとね・・・エイミィ、この子達の持って来たジュエルシードの魔力の波長を解析して頂戴！！解析が済み次第搜索に入るわよ！！」

「はい、艦長！！それじゃあ・・・ところで名前は何て言うの？」

「あ、ユーノ・スクライアです」

「アタシはアルフ」

「『スクライア・・・』」

彼等の中である疑問が一つ解決する。

それは、何故こんな子供が危険なロストロギアを保持していたのかである。

様々な次元をさすらいロストロギアを発掘するスクライア一族。

その一族の人間なら、危険なロストロギアを持っても不思議ではない。

まあ、三人の中での解決はどうでも良いとして、こうしてユーノのなのはとの接触作戦が開始された・・・



## 第十四話 戻ってきた二人なの

「「ただいま」」

学校を終え、自宅のドアを開けると二人の女性が格闘中だった・・・

「おっ、お帰り〜!!」

「お帰りなさい!!」

二人はなのはに気付くや否や、戦闘を中断し、表面上仲良さげに振る舞いつつ、互いの足の踏みあいを開始。

そんな二人になのはは溜め息を吐き、笑顔で二人の肩を掴む。

「喧嘩はダメだって言ったよね？晶ちゃん、レンちゃん？」

「なのはちゃん、痛いわ!!ほんま堪忍してや!!晶が先にやってきたんや!!うちは悪くないんや!!」

「俺は悪くない!!悪いのはレンの奴だ!!」

互いに責任の押し付けあい。

なのはと桃子の前には高町家に住む二人は恐怖しているからだ。

二人自身の戦闘能力は高くはないが、以前に書いたとおり、恭也や士郎が出現するからである。

まあ、現在のなのはは魔法を行使できるので、二人が居なくても十分に脅威なのだが・・・

「二人とも頭冷やそつか？」

某部下が聞いただけで発狂しかねないと噂されている呪文。  
それ以降の続きを味わってない者でさえも、脳内で警告のベルを鳴り響かせる。

「「ゴメンナサイ・・・」」

「ここは休戦だ」とアイコンタクトを互いに取り合い謝る。  
普段から喧嘩ばかりしているが、実際にはお互い認め合っており、信頼している。

だからこそ成立したアイコンタクトである。

二人が謝りっこをするとなのはニコリと笑顔に戻り、肩から手を離す。

「晶ちゃんもレンちゃんも休暇はどうだった？」

「おう、すっかり山籠もりをエンジョイしてきたよ。これ、お土産」

晶は黒い横掛けのナイロンバッグから、春の旬、山の幸である山菜が一杯に入ったビニール袋を取り出してなのはに手渡す。

「晶ちゃんありがとう。今日の晩御飯に使わせて貰うね」

なのはの向ける飛び切りの笑顔に、向けられた晶は顔を真っ赤にして照れる。

「ぷつ、そんなんがお土産とか笑うで」

それが面白くないのかレンが茶々を入れる。

「なんだと！！じゃあ、お前のお土産を見せてみるよ！！」

「ええで、うちのお土産はコレや」

どこことなくレンは紙袋を大量に取り出して、中の内一つを開封して中身を見せる。

中には豪華絢爛な刺繍がされた白いチャイナドレスが一着。  
レンのお土産とはチャイナドレスのようだ。

「うわー、チャイナドレスだあ レンちゃん、高くなかった？」

「その辺は安心してええよ 閉店間際の店の品を買い叩いたただけから 店のおっちゃんも感激の涙流して売ってくれたで」

それは、感激の涙じゃない気が・・・

「あ、そうそう。なのはちゃん、その子は誰だ？」

「そや、うちも同じこと思ってたんよ」

「あ、フェイトちゃん自己紹介をお願い」

「う、うん。高町フェイトです」

「「高町・・・？」」

やはり二人ともそこに引つ掛かるかあ・・・

「えっとね、フェイトちゃんも二人と一緒に、ここに住んでいるの。  
ただフェイトちゃんの場合は複雑な事情があるの」

「ふうん、まつ、良いや。俺の名前は城島晶。宜しくな」

「うちの名前は鳳蓮飛。レンて呼んでや」

二人とも細かい事は気にしないさばした性格だし、自身も様々な事情を持っているので他人の事情をそれ以上は詮索しない。だから、これで話は終了。

「ところで、お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

普段なら誰よりも真つ先に出迎えてくれるお兄ちゃんが居ないと云うことは、まだ大学か修行中と云うことになる。

「えっと、師匠ならテレビを見ながら横になって煎餅を食べてた美由希を見て、『弛んでいる！』とか言って連行して行ったぞ」

「まあ、その煎餅がオシシヨーが楽しみに取ってた鈴旬堂の煎餅やつたから、こうなったんやけどな」

二人はお兄ちゃんから、武術等を学んでいるためお兄ちゃんの事を普段から師匠と呼んでいるの。

さてさて、お兄ちゃん達は訓練中みたいだし、今から何をしようかなあ……

うーん……

考えてはみるが思いつかない。

なので、取り敢えず宿題を片す事にしたのだった。

「キヨウちゃん、もう勘弁してよ!!」

「まだ30キロしか走ってないだろうが!!今日はこの倍は走るぞ!!」

「そんなー!?!」

恭也の逆鱗に触れ、恭也と共に60キロものマラソンをさせられている美由希は、流石に半分も走ると弱音を吐き始める。

まあ、フルマラソン以上もの距離を短距離のスピードでともなれば、弱音の一つや二つや三つは吐きたくもなる。

「ふむ、距離が短いと文句が有るようだな?ならば、更に倍にしてやろうか?」

「滅相ありません・・・」

これ以上愚痴を垂れば、更に距離が伸びかねないので、美由希は諦めて走ることにした。

120キロって何処の24時間テレビ・・・しかも、完走したからと云って誰の涙も出てきはしない。出て来たとしても、それは年下からの憐れみの涙である。

感動も糞もない無駄にキツイ訓練なんぞしてたまるかである。

更に走る事20キロ・・・漸く終わりも見えてきた時である。

先頭を走る恭也が突如として走る足を止めて、何処からか小太刀を取り出して抜刀。

「キヨ、キヨウちゃん!?!どうしたの!?!」

自分より身長が高い恭也が居るために、前が見えないので、数歩横に移動して恭也が止まった理由を見つけようとする。  
そして、妙な衣装を着込んだ外国人の子供を二名見つけた・・・

## 第十五話 激突、お兄ちゃん対脇役ーズなの

「また貴様か？しかも、今回は仲間を引き連れて・・・」

「だから、僕をなのはに逢わせて下さい！！彼女が僕の知っているなのはか知りたいんです！！」

「ねえ、あの子達誰？」

話が全く読めない美由希は恭也のシャツの裾を軽く引っ張り小声で訪ねる。

「なのはの後を追いつけるストーカーの類だ。もしくは・・・龍がもしれん・・・前回戦った際に見たことも無いような、なんとも表現し難い力・・・そう、魔法の様な力を行使していた」

地球には魔法は浸透しなかった為に、それがアニメや漫画の中ではなく実際に存在していると認知している人間は殆ど居ない。だからこそ、恭也の様な反応となるのだ。

「魔法の様な力・・・」

龍の構成員と幾度か相手している美由希にはピンとくる表現。

以前に、フィアッセの護衛任務の際に相手した大剣使いは、自身の影の中を渡り歩き移動していた。

あれを魔法と言わずとして何を魔法と言よう。

普段はポケポケした美由希も真剣な目へと変化させて小太刀を抜刀。

完全に敵意剥き出しの二人に、どうしてこうなったと溜め息を吐くユーノ。

そして、恭也と美由希の会話が小さくて、ユーノのストーカー云々が聞こえてないクロノは、なのはをそこまで守と云う事は、彼女には何かしらの秘密が有るのではない、今回の事件に繋がる可能性ありと、ひとまずデバイスのS2Uを通常形態にして構える。

そして、辺りにピリピリとした空気が広がり、四人は皆の動きを見逃さないようにと神経を研ぎ澄ませ睨み合う。

「だから、なのはに一目だけでも良いので逢わせて下さい！！一目見て僕の知っているのはじゃなかったら、もう二度と近付きませんから！！」

「断る。貴様等の様な怪しげな力を行使する連中になのはを合わせれるか！！」

ユーノの要求は瞬時に跳ね返される。

余談だが、クロノのデバイス展開が原因の一つを担っていたりもするカードが杖に化ける、そんなオカルト的な因子を持つ技を見せられたら、怪しまずにはおれない。

これが、今から手品をすると宣言してからの行為なら、誰も怪しまないが、明らかにこんな緊張しきった中で手品をする馬鹿はおるまい。

「僕達は怪しい者ではない。時空管理局の者だ。彼に君の妹さんを逢わせてあげて欲しい」

魔法文化の発展していない地球では、時空管理局の存在はほんの一部にしか知られておらず、クロノの言ってる事は二人には理解できず、因みにこれに対する恭也の反応は・・・



「時空管理局・・・怪しげな宗教団体だな・・・」

知識が無い者なら、まあ、そうなるだろうな・・・

「なっ！？時空管理局は決してその様ないかがわしい団体ではない！！全次元の安全と秩序を守る、君達の世界でいう警察みたいな組織なんだぞ！！」

「そうかそうか・・・その壮大な寝言は、家に帰ってお布団の中で言ってくれ」

「うがつ！？ふっふっふ、そこまで言うなら良いだろう。公務執行妨害で逮捕する！！」

先に動いたのはクロノとユーノ。

クロノは大量の魔力刃を、ユーノは捕縛するための鎖を展開、だがユーノの方はまだ動かさない。二人の戦闘スタイルが接近戦のみと読んでの行為だ。

「来たぞ、美由希！！」

二人は神速を発動して、モノクロの世界に素早くダイブ。

白と黒のみで表現された世界では、同じ力を発動している者以外はビデオをスロー再生してるかのように、ゆっくりと動いており、如何に速い攻撃と云えども避けるのは非常に容易い。

魔力刃同士に生まれているほんの僅かな隙間の間を素早く駆け抜け二人に肉薄。

小太刀の峰を向けて一閃。

本来なら決まるはずの一撃が甲高い音を発する。それが意味するの

は不発に終わったと云う事・・・

「悪いですけど、前回の戦いで、分析させて貰いました」

策師ユーノは前回の激突の僅かな時間だけで、恭也の放つ一撃の威力と速度を把握し、それを防ぐために必要な防御力を持ち、最も早く展開出来る防御障壁を編み出したのだ。

そして、先程展開し後ろに待機させていたチェインバインドを一閃。チェインバインドは鞭の様にしなりをあげ、恭也達を急襲。その一撃を防ぐために二人は二本の小太刀を盾として防ぐ。だが、ユーノの目的は捕縛でも攻撃でもなかった・・・

チェインバインドは鎖鎌の鎖の様に小太刀に巻き付き、ユーノ達の方へ強く引つ張る事で二人の武器を取り上げる。

そう、ユーノの目的は武器を取り上げる事。

つまり、二人の無力化であった。

「クロノ、今だ!!」

取り上げた武器は自分達の後ろに投げ捨てて、攻撃役のクロノに今が好機と呼び掛ける。

「分かった!!これで、一気に決める!!」

何が分かったのかは知らないが、この二人、当初の目的を忘れており、恭也達に勝つことしか考えてないようだ・・・

「行くぞ、S2U!!」

『Boss・・・Do you omit the first

plan / don't you? (ボス、当初の目的を忘れてませんか?)」

インテリジェンスデバイスでもない、無口なストレージデバイスでも流石に突っ込みを入れたくなったようだ・・・

「うるさい!! 公務執行妨害の罪は大きいんだ!!」

「I'm so tired・・・(はぁ・・・)」

クロノが、S2Uを握り締め、再度魔力刃を展開しようとしたその時だった・・・  
S2Uが突如バラバラに切り裂かれた・・・

「「えっ・・・」 / 「What?」

武器は取り上げた筈、恭也達も一歩も動いてない、なのにS2Uが破壊された事に二人は驚く。

「何を勘違いしている。不破の攻撃手段は剣だけにあらず」

恭也の剣術は確かに御神流の物であるが、同じ流派でも少し別物なのだ。

御神の中でも殺人に最も特化した流派、御神不破流、それが恭也の使う流派の正式名称である。

この流派では、二本の小太刀以外に、鋼鉄線や投擲用のクナイ等も用いており、剣士が苦手とする遠距離もしつかりとカバーしている。

今回クロノのデバイスを破壊した武器は鋼鉄線。デバイスに素早く巻き付け、強く引くことで切断したのである。

「神速発動!!」

二人が拍子抜けしている今が、勝利を戴く好機である。

恭也は本日二度目のモノクロ世界にダイブ。

瞬時に二人に接近し、二人の鳩尾に一撃を食らわせ昏倒させる。

そして、気絶した二人を担ぎ上げ、近くの川に投げ捨てる。

「うわ、鬼だ・・・」

春とはいえまだ肌寒い、明らかに容赦ない仕打ちに、敵といえども可哀想に思えてしまう美由希。

「さてと、早く家に帰るとするか。なのはとフェイトが待ってるぞ」

剣士達の魂とも云える武器を拾い上げ、自分の物は腰にぶら下げた鞘に戻し、美由希の物は二本を重ねて本人に手渡す。

そして、二人は残り10キロを全力疾走して帰った・・・

## 第十六話 それは大きな勘違いなの（汗）（前書き）

えっと、シルフレも書いておりますが、暫くの間旅行しますので、感想やメッセージの返信が出来ない可能性がありますので、死んだなこの作者とか思わないでね

## 第十六話 それは大きな勘違いなの（汗）

「く、クロノにユーノ君、どうしたの!？」

「「ぶえつくしょん!！」」

目が覚め、ずぶ濡れの状態でアースラに帰還した二名。

そんな二人に驚くアースラ乗組員。

二人はなのはを探しに行った筈なのに、濡れ鼠と化しているから当然なのだが・・・

「エイミイ、本局からデバイス強化の為に、シャリオ・フィニーノ技師がマリエル・アテンザ技師を呼んでくれるか・・・」

「え? 良いけど、どうしたの?」

「任務より大切な私用が出来た!! あいつを僕は倒す!!」

普段から何事もクールなクロノの燃えっぷりに、エイミイは、一体何が有ったんだと少々困惑。

だが、普段から仕事以外には興味を持たない弟分が熱意を持って始めれる何かを見つけたのが嬉しく、笑顔で軽く返事し、本局のシャリオ・フィニーノ技師こと、シャリーに連絡を取るのだった・・・

「おかえりー、師匠」 / 「おかえり、オシシヨー」

俺が帰宅一番に楽しみにしているのは、愛妹<sup>なのは</sup>の出迎え・・・

だが、今日は違った・・・  
奴等が帰って来たのだ・・・

「ああ、お前等は今日戻って来たのか？もう少しゆっくりしてくれば良かったのに」

「いやあ、師匠達が恋しくなって戻って来たんだ」

「うちも、やっぱり、こっちに居る方がオモロいからなあ」

お前は面白くても、俺が面白くないんだ。

何度お前等の暴走に巻き込まれたと思ってるんだ・・・

「そうか、なのははどうした？」

「今、フェイトと一緒に晩御飯を作ってるぜ」

「いやゝ、暫く会わん内になのはちゃん進化したなゝ。うちもびっくりするくらいに料理上手になっとるやん」

そりゃあまあ、中身は大人で一人暮らしをして来たのである。

これで料理下手な方がおかしい。まあ、彼等の知ることではないが。

「まあ、俺もいきなりの上達に一瞬別人ではないかと疑ったが・・・あの可愛さは本物のなのはでしか出せん。きつと、俺の為に隠れて練習してたんだな。本当に可愛い奴だ」

「師匠、頭の中大丈夫か？」

「もう、手遅れやな。蛆が湧いてなのはちゃんの事以外は考えれん

様になつとるな」

なのはが料理中と聞くと、鼻歌混じりの上機嫌で台所に向かう恭也。そして、玄關に残されたのは、何時もの事ながら呆れている晶と飛。そして、60キ口を爆走して息絶え絶えの美由希の三人だった・・・

「遅い！！遅すぎる！！フェイトは一体何をもたもたしてるの！！」

彼女、プレシア・テストロツサはRPG等で魔王が座ってそうな玉座に深く腰掛け、ヒステリックに叫んでいた・・・

「まさか、私の砲撃を打ち消したあの小娘に殺されたとか・・・いや、でもフェイトに限ってそんなヘマはしないと思うのよね・・・はっ、私は何をあの人形の心配してるの！？いや、あの子は私の手駒なのよ、私の計画の為の戦力が減るのは拙いから心配するのは当然よね！！」

勝手に大声で自問自答を始めるプレシア。

まあ、この場には彼女とアリシアの素体しか居ないので、大声出した所で御近所迷惑なんて事はない。

「でも、あの小娘が気になるわね・・・調査に向かってみようかしら・・・決して、フェイトが心配だからとかじゃないのよ！！」

プレシアは地球に向かう前に資料集めを開始する。

服装や文化を学ぶのである。

調査なので目立ってはいけない、その為には地球の人間に紛れ込む必要があるのだ。



そして彼女は、資料置き場に有った唯一の地球の資料『メタルギア』を見始めた・・・

「成る程・・・地球人は潜入調査の時にダンボールに入っているのね」

ああ、彼女が普段から嫌っているアルフでも良いから、ここに誰かが居れば絶対に違うと指摘してくれただろうに・・・  
取り敢えず、資料を読み終えたプレシアは、捜査に必要な道具を集めて地球に向かうのだった・・・

退屈だな・・・

小学生の授業等受けても既に頭に有る知識だけに、なのはは退屈していた。

体育や家庭科と云った、体を動かす教科なら、年関係なく楽しめるのだが、流石に算数は飽き飽きである。

何か面白い事は無いかな・・・

そんな軽い気持ちで外を覗くと、校門近くでダンボール箱が動いていた・・・

「にやっ!？」

あまりの出来事に驚くのは。

「どうした高町?そんなに、問題を当てて欲しいのか?なら、大問

「三の問題を解いてくれ」

「は、はい・・・一番は25で、二番は32で」

私は問題を答えつつ再び窓の外へと視線をずらす、そこには動くダンボール箱の姿は無かった・・・  
一体、あれは何なの!?

第十七話 段ボールの中は蛇が王道なの (前書き)

投稿が遅くなっちゃいました(汗)

## 第十七話 段ボールの中は蛇が王道なの

放課後、結局あれからなのは、ダンボール箱の事で頭が一杯になり、退屈な授業の暇潰しとなっていた。

その後も外を何度も覗くが、あれ以降はダンボール箱どこるかフェレットすら現れず。

だが、下校中にダンボール箱が現れた・・・

運の良い事に、アリサちゃんとすずかちゃんは習い事の為に、車で帰っている。

万が一戦闘になっても問題は無いだろう。

『なのは、後ろからダンボール箱がついて来てるけど、どうする？』

あくまでも会話が聞き取られないようにと考慮しての念話。

怪しむ素振り一つせず、フェイトは落ち着いてなのはに訪ねる。

『あ、フェイトちゃんも気付いてた？実は授業中にも校門近くで見かけたんだけど、狙いが分からないの。殺気の類は感じられないし・・・』

『うん。でも困ったね・・・懐かれちゃったら世話とか大変でしょう？なのはの家って、ペット禁止だったけ？』

『いや、そういう問題じゃないと思うけどな・・・取り敢えず、次の曲がり道を曲がって、電信柱の裏に隠れよう。それで、ダンボールを取って正体の確認をしてみよ。もしかしたら、フェイトちゃんが探してるアルフかもよ』

何処かズレたフェイトの発言に戸惑いつつも、ダンボール箱の中身の正体に好奇心を沸かすなのは。

『うん』

二人は早歩きで移動し、次の曲がり道を曲がって、電信柱に隠れる。そして、息を殺してダンボール箱が来るのを待つ・・・そして、ダンボール箱が来た瞬間に・・・

「えいつ」

なのはが勢い良くダンボール箱を持ち上げる。

「「「あつ・・・」」」

間の抜けた声が三つ・・・

二つはなのはとフェイトの物、そして、もう一つは・・・

「お、お母さん!？」

全身をアーミーファッションで固めたプレシア。顔には丁寧にもフェイスペイントが・・・

「ち、違うのよ!!私ね、あなたがくたばってるかと思って、亡骸を見に来てあげたのよ・・・」

「そうなんだ、心配してくれてありがとう。お母さん」

「か、カロリーメイト美味すぎる!!」

顔を赤らめ、胸ポケットから取り出したカロリーメイトを突如として頬張り始める。

その唐突な行為に全くといって良いほどついていけずにいるのは、な、なんなの？

プレシアってこんなキャラだったけ？

もしかして、私が逆行した所為でこんな事に？

「お母さん、そんなに一気に食べたら喉に詰まるよ？」

「ふっ、問題ない」

突如として、人類の未来より己の妻が大事な髭司令の名言、「ご丁寧に段ボール箱を机に見立てて、口元を隠すような手の組み方をする。メタルギア以外にも、間違った日本の知識を詰め込んできているようだ。

顔を赤くして更なる暴走をしているプレシアと、天然が入ったフェイトの合の手に、自分はどうすれば良いのかと、なのはは困惑する。過去にこの様な事件が発生してない為、対処法が思い浮かばないのだ。

「取り敢えず、話を戻させて貰うわ。貴女、何者かしら？」

暴走していた先程までとは完全に打って変わり、落ち着きを取り戻して、ゆっくりとその冷たい眼をなのはに向ける。

「私は高町なのは。普通の小学三年生だよ」

「普通の小学生如きに、私の魔法を打ち抜ける訳はないでしょ？あの時の魔法、明らかに10年以上の長い年月を掛けて開発と改良した魔法よね？貴女の年齢を仮に10としたら、あの魔法は、貴女が生まれる前から貴女自身によって開発を始められた魔法となるのだけど？貴女は何者かしら？」

ちつ、流石は年増・・・フェイトちゃんは誤魔化せても、彼女は無理だったか・・・

ああ、フェイトちゃん！！そんな悲しそうな目で私を見ないで！！

逆行した人間だとは言えないし、どうすれば・・・

「そこで私は一つの答えに辿り着いたの。なに、非常に簡単な事よ・・・貴女の正体は」

くっ、正体をバラされるくらいなら！！

「あっ、口が滑ってしまったの！！スターライトブレイカー！！」

全力全開で、阻止するだけなの

流石は元管理局の白い悪魔は伊達じゃない・・・桃色の砲撃は、無防備なプレシアを急襲し、空のお星様に仕立て上げる。

キラーンと云うアニメチックな擬音が入った後に、素早く自分の右手で軽く頭を叩き、ドジっ子を演じてみる。

「本当に、なのははおっちょこちよいだね」

よし、何とか誤魔化せたね・・・

でも、プレシアに正体がバレたみたいだから、早く始末しないと・  
・  
フェイトちゃんには、アリシアを追い掛けてアルハザードに逝った  
って云う事にしておけば問題は無いはず。

次々となのはによつて構築されていく、プレシア暗殺計画・  
果たしてプレシアの運命は如何に・  
・



## 第十八話 ？「バカの方程式は成り立つなの（前書き）」

今回の御話から赤星が出て来ますが、当作品内では、面白みを出すために原作とはかなり違う設定になってますので、以下の点に注意して下さい！！

- ？・何故か恭也と忍と同じ大学に進学している
- ？・性格が崩壊している
- ？・戦闘能力は原作時より強化されており、恭也と普通に張り合える程の戦闘力で、純粋な強さは美由希以上
- ？・原作ではモテる設定だが、モテない設定に変更
- ？・無駄にエロい
- ？・全国大会での戦績はベスト16ではなく、堂々の優勝
- ？・大の巨乳好き
- ？・ゾンビ以上のタフさを保有
- ？・バカ

## 第十八話　？「バカの方程式は成り立つなの

東京某所、そこは世界問わず、多くの民によってオタクの聖地と呼ばれている。

本日も無数の人々が歩行者天国を歩き、道端では戦闘服メイドを装備した女性が呼び子をしており、非常に活気がある。

不幸にも飛ばされた女性こと、プレシアは、そんな場所の裏路地にて目を覚ました・・・

くっ、作り主のジェイルに似て、非常に礼儀知らずな人造魔導師だこと・・・

いきなりの殺傷指定の純粹魔力砲撃に、死を覚悟したわよ・・・

プレシアの至った回答は、自分と同じレベルの科学者である、ジェイル・スカリエツィの造った人造魔導師である。

確かに、この回答なら、技術の持ち越しも出来るし、幼少時でのあれ程の才能の開花も有り得る。

普通ならばそれが正解だが、なのはは逸脱した存在なので、不正解まあ、いきなり、タイムトラベラーなんて回答に結び付けれる人間等到底居るわけはなからう・・・

さて、これからどの様にして、フェイトを奪還しようかしら・・・べ、別にフェイトが心配だからとかじゃないのよ！！

フェイトには、私の様々な技術が詰まってるから、それが、あの子を通して、ジェイルに漏れるのが嫌なだけなのよ！！勘違いするんじゃないわよ！！

さてと、まずは、この裏路地から出ましようか・・・

それと、多少はこの世界の貨幣も用意したから、お茶でも飲んで作戦でも立てるとしましょう。その前に、衣装をなんとかしましょう。

資料と衣装が全く違うじゃないの！！

まったく、誰があんな偽資料を買ったわけ？

取り敢えず、変身魔法で、外見年齢を若くし、服は普段から着ている物に戻す。

そして、彼女は路地から出て、一番近くにあった喫茶店に、取り敢えず入った・・・

店名の『萌萌カフェ』なんて物を一切と見ずに・・・

「デバイスはこんな感じで良いかな？でも、まだ安全面が確立していないベル力式カートリッジシステムを搭載して良かったの？」

「構わない、あいつに勝つにはこれでも足りないくらいだ・・・」

自分の新型デバイスを握り締め、手で感触を確かめる。

「ユーノ君も、はいこれ」

「有難う御座います」

ユーノもレイジングハートの改造をすっかり依頼してたりするのだが、良く民間協力者のデバイス強化の許可が降りたものである、と疑問を抱かれた方の為に補足だが、現在ではカートリッジシステムに関しては不明な点が多く、少しでも多くの情報が欲しいからである。

そして、立候補者が民間協力者となると、万が一事故が発生しても、労災手当てを払う必要もないため、モルモットとしてはうってつけな訳である。

だから、管理局は簡単にユーノの分も許可したわけである。

「それと、二人とも新しいデバイスの名前を考えた？」

「僕は既に決まってます」

シャーリーの言葉に、ユーノはパツと返す。

そして、己の新しいデバイスの名前を呼んだ・・・

「レイジングハート・エクセリオン」

と・・・

「恭也、海鳴市にメイドカフェが出来たのを知ってるか？」

本日、忍の奴は講義が無いため、大学には来てなく、俺は中学の頃から腐れ縁のある友人赤星勇吾と二人で学食の飯を食べていたのだが・・・

因みに、俺は狸そば、赤星は唐揚げカレーだ。

奴は突如として、喜色満面でスプーンを高く掲げ叫ぶ。

毎度の事ながら、こいつの奇行っぷりは大学でも有名なため、周りの奴等も「また、赤星と高町か・・・」で終わってしま・・・何故に俺の名前も入っているのだ？

「で、何が言いたいんだ？」

「メイドさん口説きに行こうぜ、恭也」

またか・・・大学入学時には、この馬鹿はかなりの女性から好意を持たれてたのだが、この奇行っぷりが知れた瞬間に、好意を持つ者は居なくなった・・・

つまり、こいつは黙っていれば、女性にモテる奴なのだ。

「断る。俺はその様な破廉恥な店には行きたくもないし、万が一にも、それが忍やなのはにバレたら、どんな顔をすれば良いのか分からない」

「そうか、なら、なのはちゃんとフェイトちゃんに聞いてみる事しよう」

「待てっ！！俺の妹達に変な世界を教えるな！！誘うなら美由希を誘え！！」

「いや・・・流石に美由希ちゃんは止めとく・・・何か嫌な予感があるから・・・まあ、じゃあ、行くよな？」

満面の笑みで尋ね返す赤星・・・

今すぐに奴の顔面に、神速を用いた鉄拳を食らわせたいが、ここでは人目につくし、それ以前に奴の異常な程高い身体能力の前には通用しなかったりもする。

夜の一族と呼ばれている人間と妖怪のハーフの類や、永全不動八門一派等の化け物集団に属さないこいつが神速を避けれる理由は、何度も受けている内に避け方が分かったとの本人談。  
ある意味、人間では無いな。

「ぐ・・・不承不承ながら行くことにしよう・・・」

「俺も御前も最後の講義は一緒だった筈だし、大学終わったら直ぐに行こうぜ」

「分かったが・・・俺が行った事に関しては、誰にも言っなよ」

「勿論だとも。あゝ、俺好みの巨乳はいないかなあゝ。ところで、恭也は大きい派？それとも小さい派？」

「ふむ、無駄に大きいよりは小さい方が良いな。いざという時に邪魔で、戦い辛いだろうし」

「お前らしい回答だな・・・」

俺の回答を聞いて嘆息する赤星。

嘆息するくらいなら、最初から聞くな。

## 第十九話 突撃メイド喫茶なの

それから数時間が経過し、午後の講義も全て終わり、俺と赤星はメイド喫茶に向かう。

場所は意外にも翠屋に近い事が判明。

「おい、赤星。この店が出来たのは先週くらいか？」

「そうだけど、何で恭也がそんな事を知ってるんだ？はっ、もしかして、むつつりさんだったか！？」

「死ね・・・しかし、成る程・・・謎が解けた・・・」

「謎ってなんだ？体は大人、頭脳はキン肉マンの淀川恭也君？」

「誰がキン肉マンだ！！」

く、竹輪耳のコイツに話しても、会話が成立せん・・・これ以上話しても無駄そうだな・・・

「ははは、嘘だつて。恐らく、翠屋の客が先週くらいから減ったから聞いたんだろ？それに、あそこの客は翠屋で何度も見たことがある客だしな。しかし、男つてのは直ぐに色物に流されおつて・・・嘆かわしいな」

その台詞をそのままお前に返してやろうか？  
というか、分かってるなら、最初から言え！！

「おつ、次は俺等の番だな」

順番が来たので、俺と赤星は店内に入る。

「「お帰りなさいませ、御主人様！」「」」

店内に入ると、先ずはメイドに扮した女性のお帰りなさいませコール。

「う、御主人様、当店の利用は、は、初めてか？」

胸に自身の名前か、源氏名かは知らんが『しぐなむ』と云うプレートを付けた外国人女性が、店の利用が初めてかどうかを尋ねてくる。しかし、顔を真っ赤にしてまで何故にこの様ないかがわしい店で働くのだろうか？

もしかして、家庭の事情なのか？

ちなみに、彼女の問いには、馬鹿が「もっちろんです」と即答。あかほし

「そ、そ、そうか・・・ではなかった、そうですね。では、先ずは席の方に案内させて・・・案内します・・・」

そして、俺等を席に案内し、メニューを渡し、また別の客の所に戻る。

その際に、『しまる』とプレートに書かれたまた別の外国人女性に何か言われていた。

恐らく、励ましか何かであろう。

「恭也、しぐなむちゃん萌えるなあ！！」



「燃える？彼女は不燃物の類では無いと言いたいのか？」

「その燃えるじゃなくて、草等が萌えるの時に使われる萌えるだ！  
」

「さっぱり、意味が分からん・・・で、何を頼む気だ？俺は、ドリンクだけですます気だが」

しかし、ドリンク一杯が400円。オマケにチップとして、来店料が800円・・・

うちの店なら、美味しい紅茶とシュークリームに愛妹<sup>なのは</sup>の笑顔を注文しても600円足らずだぞ・・・  
どんなぼったくりバーだ・・・

「じゃあ俺は、『好き好き御主人様オムライス』にしよ」

な、なんと破廉恥な料理名だ！！

流石に、このネーミングセンスには、俺も突っ込まずにはおれない・

・  
・  
ここが店内でなければ、直ぐにでも「なんと、破廉恥な！！」と叫びたい所だ。

取り敢えず、注文するために、ベルで店員を呼び注文する。

ちなみに、店員は『しゃまる』と云う、さっき『しぐなむ』を励ましてた女性だ。

「注文を承ります」

「俺は『好き好き御主人様オムライス』で、恭也は？」

「オレンジペコーのホットを」

「畏まりました」

彼女はメニューを回収し、直ぐに厨房にオーダーを伝えに向かう。  
彼女は『しぐなむ』と比べると、かなりノリノリである。

俺の推測だが、『しぐなむ』は友人である彼女の巻き沿いを喰らったのではないかと思う・・・俺のように・・・

「うおゝ、しぐなむちゃんもしゃまるゝちゃんも凄い胸だな恭也！  
！おら、わくわくしてきたぞ」

駄目だこいつ！

別の意味でだが、危険度は冷蔵庫や細胞フリーザーセルを超越している！！

「そうか・・・お願いだから、サツに捕まる時は俺を巻き込むなよ・  
・・・」

「大丈夫だつて。おつ、メイドさんとツーショット500円だと！  
！これは是非チェックだな！！」

壁に貼つてある有料サービスを見て、更にテンションを上げる馬鹿。  
しかし、写真一枚一緒に撮るだけで500円だと？

同じ500円を使うなら、なのはにお小遣いとしてあげて、一緒に  
写真を撮った方がましではないか。

「ご、御主人様、オレンジペコーを持って参りました。砂糖とミルク  
はどうする・・・どうしますか？」

俺の紅茶を持って来たのは『しぐなむ』・・・ここまで同じ女性

がやって来るとなると、何者かが運命を操っているとしたか思えない。

「両方頼む。それと、その言葉遣いは疲れんのか？なんなら、普通に話したらどうだ？俺が思うに、『しゃまる』に巻き込まれて働いているのだろ？」

「む、忝ない。私も、本来ならこのような破廉恥な店で働きたくはないのだが、私の大切な御方に日頃の感謝としてプレゼントを渡したくてな・・・それで、シャマルの奴が見つけてきたバイトがここで・・・奴はウェイトレスとしか言っておらず、私もバイト初日にこの様なバイトと知ってな・・・」

延々と愚痴を言いつつ、俺のオレンジペコーに何杯も砂糖を入れ続ける。怒りか何かで我を忘れているのだろう・・・

追記だが、砂糖の入れ過ぎで紅茶が、液体では無くなりつつある・・・  
・  
流石にもう飲めまいな・・・

「恭也、責任持って、しぐなむちゃんの愚痴を止めるよ」

延々と愚痴り始めた『しぐなむ』を止めるようにと赤星が、小声で言ってくる。

確かに、原因は俺にあるしな。別の話題を見つけねば・・・

恭也は話題を見つける為に、『しぐなむ』ことシグナムの体を軽く見て、ある事に気づく。

「ところで尋ねたいのだが・・・剣術の類をやっていないか？恐らく、西洋剣かと思うが？」

「そうだが、何故分かった？」

俺の思った通り、彼女は肯定する。

「手の豆だ。剣術や棒術をする者には特有の豆が出来るからな。豆の大きさから見て、かなり長い年月修行しているな？」

「肯定だ。しかし、その様な事で読めると云う事は・・・御前かなり出来るな？何時か手合わせを願えるか？」

「構わんど。俺の家の電話番号を覚えておこう。模擬試合をしたい時は連絡してくれ」

俺は鞆から、筆記用具とルーズリーフを取り出し、ルーズリーフに自宅の番号を書き彼女に渡す。

彼女はそれを折り畳み、ポケットにしまう。

「では、暇が取れ次第、連絡させて貰うぞ・・・えっと、名前を聞いてもいいか？」

「高町恭也だ。」

「恭也殿か・・・私は烈火・・・ではなくて、八神シグナムと云うヤガミシグナム？ハーフか何かか？」

「じゃあ、模擬試合を楽しみに待ってるぞ」

「私もだ」

そう言ってシグナムは、厨房へと戻って行く。  
さてと、どうしたものか・・・

第二十話 ミスは付き物、彼女はうっかりしやまるゝなの（前書き）

え・・・総合評価が200超えてる（汗）

これだけ不定期な上に、一話一話が短い小説なのに・・・（汗）

いやはや・・・びつくりです・・・

さうて、そろそろ『A's』編に突入します。

えっ？ジュエルシードやユーノ君やプレシアはって？

それは、今後の御楽しみと云う事で（笑）

あと、題名のカオスっぷりは無視して下さい（笑）

## 第二十話 ミスは付き物、彼女はすっかりしゃまろゝなの

さてと、どうしたものか・・・

恭也が悩んでいるのは、恭也ばかりがシグナムと仲良くなり、自分は蚊帳の外を食らい不満顔の赤星と、存在が糖尿病への高速道路と化したオレンジペコーである。

「む、どうした赤星？不満そうな顔だが？」

「何故だ！！何故何時も御前ばかりなんだ！！」

「意味が分からん。偶々、剣術で気があっただけだ」

「くそお、俺も剣術やってるのに、何故にモテない！！」

赤星も俺と同様に剣術をしている者であり『草間一刀流』の師範代である。

腕は美由希以上で、一撃の重さで云うと、俺をも超える。

そんな、剣道家は頭を抱えて絶叫。

何時でも何処でも暴走する、馬鹿を放っておき、俺はオレンジペコーの成れの果てを一口。

紅茶味のガムシロップを温めた様な味である。

「おい、今度は御前の料理を『しゃまろゝ』が運んできてるぞ。声をかけてみたらどうだ？」

「おう」

直ぐに機嫌を直し、鼻歌を歌い始める。  
女性以上に変わり身が早い男である。

だが、事件が発生。

オムライスとケチャップを御盆に乗せて運んでいた『しゃまる』  
は、何も物がない筈なのに、地面で躓き・・・

「お待たせしまし、きゃあ!？」

見事にオムライスとケチャップが宙を舞い・・・俺の顔面にクリテ  
イカルヒット。

流石にこちらにも、身構えて無かった為、かわすことすら出来ずに、  
その一撃を受ける羽目に。

「きゃあ!？大丈夫ですか!？」

大丈夫かと聞かれれば、回答は否。

という、慌てずに布巾を渡してくれ・・・

「き、恭也がまたフラグを立てた・・・なんて、羨ましい奴だ」

顔面にオムライスの洗礼を受けて嬉しい奴が居るか!!

「悪いが、布巾を貰えるか？」

「あ、はい!!」

『しゃまる』から、布巾と云う名前のテーブル拭きを受け取り、  
それで顔を拭く。  
臭い・・・



「気に病むな。うちの愚妹は年中の様に同じ失態を曝しているしな」

「俺も何度美由希ちゃんの攻撃を喰らったやら・・・」

オムライスが熱いと言っても、火傷する熱さではなくまだマシなレベル。

以前、俺と赤星は、美由希が零した沸かし立て珈琲、しかも500mlポット丸々全部を喰らった事もある。

あれと比べれば、肉体的損害に関しては大した事はない。

まあ、その後は、騒ぎを駆けつけて来た店長が何度も丁寧に謝り、俺を店内のシャワールームへと連行しようとするが、家が近いのを理由に断る。

本来は店内のを借りようかと思ったが、今日は不幸みたいなので、万が一シャワールームでバツリ女性に会っても困るので止める。

「赤星、俺は先に帰らせて貰う。店長、会計を頼めるか？」

だが、店長は迷惑を掛けたのを理由に、タダで良いと言ってくれる。俺は言葉に甘える。最近は、新しい愛妹たるフェイトも出来た為、アイスを奢ってやるにしろ今までの二倍の料金を払う必要がある。可愛い妹達の少しでも喜ぶ顔が見たいから、無駄な出費を抑えたい。店を出た俺は、寄り道せずに我が家へと直行。

運の良い事に、まだ誰も戻っておらず、出迎えてくれる人間は居ない。なので、特に会話することもなく脱衣場へと向かう。

俺は洗濯機に、ケチャップの染みが出来た服を即座に入れて、洗剤アタックの攻撃を入れスイッチを押し、洗濯機を回す。これで証拠隠滅は成功である。

後はゆっくりと風呂に浸かり、妹達の帰りを待つだけだ。

そして、風呂場のドアを開けて・・・あの時にシャワーを借りておけば良かったと後悔した・・・

「きゃあああああ!？」

「どないしたんや、オシショ？元氣あらへんけど？」

「己の不運に嘆いているだけだ。それと、余計な詮索はするな・・・」

「どうせ、なのはちゃんと浴場で全裸で出会して、叫ばれたとかだろ？」

見事に図星を突いた晶には、『ドキッ 眼前にSHINKENの切っ先』をプレゼントだ・・・  
む、メイド喫茶の影響か、少々変な言い方を・・・

「う、ごめん師匠・・・冗談です・・・」

晶は両の手を挙げて降参ポーズをした為、恭也はさっと刀を鞘に戻し食事を再会。

「あははは、でも恭ちゃんもなのはもさあ。昔は良く一緒にお風呂に入ってたじゃん。別に裸見たくらいで騒ぐことないんじゃないの・・・じよ、冗談だよ・・・だから、恭ちゃんもなのはも私に武器を向けないで!!て、それよりなのはは何処から包丁を取り出したの!？」

「お姉ちゃん？そんな事を言うなら、丸一日家の中を全裸で過ごしてみるのは？」

「なのはよ、俺はこいつの全裸を見るのは苦痛に過ぎん。だから、家の外に追い出しても良いよな？」

「別に構わないよ でも、翠屋に変な噂が立つと困るから、追い出す際は人目に気をつけてね」

「勿論だ」

「ゴメンナサイ！！」

すこぶる笑顔で物騒な事を言い始める二人に、晶以上に深々と頭を下げて謝罪する美由希。  
この二人ならやりかねないと判断したからであろう。

「うふふ、冗談に決まってるじゃないお姉ちゃん ねっ、お兄ちゃん？」

「当たり前だ。冗談も分からん愚妹が・・・」

「いや、本気に聞こえましたが？」と突っ込みを入れない、晶、レン、フェイト、美由希の四人。だが、突っ込みを入れたら最後。  
「じゃあ、本当にしてあげる」と笑顔で実行されそうな気がする。

まあ、ともかく恐怖が支配した空間に救いの光こと電話が鳴る。  
恐らく、翠屋で翌日の仕込みを作っている士郎と桃子からだろうと思ひ、電話に一番近いのはが受話器を取る。

「はい、高町です」

『私は八神シグナムと云うの者だが恭也殿に代わって貰えないだろうか？』

「えっ・・・？」

電話をかけてきた人間はなのはの良く知る人間だった。

第二十一話 ウザさが定評なあの人風に言くと、嘘はいけない、格好悪いよう

サブタイトルが貧乏執事のごとく並みに、長くカオスになりつつある本作品。

ちなみに、ウザさに定評のある人と云えば、当然、デュラララのウザさんの事です。

第二十一話 ウザさが定評なあの人風に言っと、嘘はいけない、格好悪いよう

どうしてシグナムがお兄ちゃんに電話を？

いや、それ以前に、既に夜天の書、いや闇の書が覚醒してる？

『む、もしもし？どうかしたのか？』

取り敢えず今は怪しまれないようにして、後で考えよう。

「ごめんなさい、ちょっと待って下さいね。お兄ちゃん、シグナムさんから電話だよ」

「む、シグナムからか？」

お兄ちゃんは掛かってくる心当たりがあるのだろう、私から受話器を受け取ると、「うむ」とか「ああ」とか簡単に返事をしつつ次々と話を進めていく。

そして最後に「楽しみにしてるぞ」と嬉しそうに返す。

まさか、デート！？

でも、シグナムってそんなキャラじゃないよね？

でも、プレシアみたいに私の所為で人格が変わってたら・・・

「ふむ、あゝんしろ恭也」なんて言いながら、お兄ちゃんにパフェを食べさせるシグナムなんて見たくないの！！

次々と脳内劇場を繰り広げているなのは、流石に恭也を除く人間はどん引きである。

「な、なのは！？どうしたんだ！？」

「お兄ちゃん！！シグナムさんとは何処で知り合ったの！？」

愛妹の暴走に心配そうに尋ねた恭也だが、なのはの問いに回答が来ず、顔色を信号の様に目まぐるしく変え、逆に心配される立場に早変わり。

「そやで、オシショー！！シグナムって誰や！？」

「まさかキョウちゃん、忍さんが居ながらに浮気なの！？」

「師匠、嘘だよな！？」

「お兄ちゃん、どうなの？」

更には他の物からも破竹どころかダイナマイト爆弾の勢いで尋ねられ、本人もどうすれば良いのか分からない事態に・・・

素直にメイド喫茶で出会い、偶然趣味が合って試合の約束をしたと言えれば良いが、メイド喫茶と云う言葉がある<sup>タブー</sup>ので、正直には言えない。

かといって、他に女性と話せる機会は・・・  
そこで、恭也はある考えに辿り着いた。

「実はシグナムは、留学生として大学に来た者で、偶然にも剣術をやっているそうで、つい手合わせをする約束をしていたんだ」

大学なら異性とも話す機会は多いし、それに手合わせの約束は本当の事である。  
皆を納得させれると恭也。

「嘘やな・・・」

「師匠、嘔吐くならもつとマシな嘘をつこつよ・・・」

「いい、キョウちゃん。嘘を吐く事は一番最低な事だよ?」

「そうか、なら、冗談も拙いよな?嘘を吐くことになるしな。では、本当に全裸にしたお前を外に放り出すとしよう」

「いや〜ん、キョウちゃんのエッチ」

そんな馬鹿な対応をしたお姉ちゃんは、今日も壁と仲良くキスをした・・・

それにしても、お姉ちゃん良く死なないね・・・  
しかし、シグナムが大学に?

でも、剣術を得意とするのは確かだし、戦闘狂なのも確か。

それにお兄ちゃんが嘘を吐くメリットもないし、本当の事だと思う。  
でも、何で大学に行ってるんだろ?  
はやてちゃんが何か言ったのかな?

「だから、嘘じゃないって!!」

「嘘や、きつとメイド喫茶とかメイドカジノとかメイド献血とかで  
出会ったんやろ!？」

「師匠、なんでそんな店に!?メイドの格好くらいなら、頼めば俺  
らがしてあげるのに!!」

「誤解だ!!というか、何故メイド関連ばかりをピンポイントで並  
べる!!」



じゃあ、お兄ちゃんから話を聞き出すためにも、取り敢えず、この言い争いを止めないと・・・

でも、メイド服かぁ・・・フェイトちゃんに着せたら似合うだろうな

この間のレンちゃんのお土産のチャイナドレスも凄い似合ってたし・

うふふふ・・・ジュルジュル・・・おっと、涎が・・・

「うん、私、お兄ちゃんを信じるよ。フェイトちゃんもお兄ちゃんを信じるよね」

「なのはが信じるなら私も信じるよ」

「あちゃゝ、なのはちゃんが味方したか・・・ほんなら、うちらも信じんとあ

かな・・・なあ、オサル？」

「今すぐに息の根を止めてやろうか？似非関西弁混じりのカメえ！」

「二人とも頭冷やそっか？」

「「ゴメンナサイ!!」」

うう・・・どうして私の家は争いが絶えないのだろうか・・・

さて、後でお兄ちゃんから情報を聞き出さないと。

それと時と場合では、闇の書の暴走を手助けしないと・・・でも問題は、私やフェイトちゃんが管理局に接触してないから、私

達だけで防衛プログラムの破壊を無事に行えるのか？

他にもリインフォースの問題もある。

初代リインフォースが生き残ると云うことは、リインフォースIIが誕生しないことを意味する。

つまり、どちらとこれから過ごすかを選択しなければならない。

あの悲しい思いをはやてちゃんにさせたくないなあ・・・

私はどうしたら良いんだろ？

まさか、こんな二者択一の選択を強いられるとは・・・

「なのは、大丈夫？」

深刻な顔をして悩んでいたのだろう、フェイトちゃんが心配そうに尋ねてくる。

「む、美由希、また何かなのはにしたのか？」

「いや、今回は流的にキョウちゃんでしょ!？」

「そやな、メイドさんの件もあるしなあ」

「師匠!？メイドの格好なら、俺やカメがしてあげるから!！」

「なんの話しだ!？いや、それ以前に、メイドは違うと言ってるだろうが!！まあ、なんだなのは・・・悩み事が有ったら俺等に言え。何かしらの力になってやれるやもしれん。お前に暗い顔は似合わ・・・まさか、あのストーカー共か!？最近は矛先が俺に向いてきてたから、お前には手を出さんと思ってたのだが・・・」

似合わないと続けようとしたお兄ちゃんだが、思い当たる節を見つけたのか声を張り上げる。

それより、ストーカーって・・・もしかして、プレシアの事？

ここで軽く補足だが、なのはに話すが当初の目的だったクロノとユーノの二名。

だが、何時の間にやら目的が打倒恭也にすり替わっており、週一の頻度で襲撃を仕掛けているのだ。

勿論、幾らカートリッジシステムを取り込んだと云えど、恭也の敵ではないのだが・・・しかし、徐々に実力が増してきており、最近では『神速』の一撃をかわされる事もある。

「オシシヨー！！ストーカーやって！？ほんなら、うちの槍術で退治したるわ！！オサル、あんたの出番はあらへんよ」

「はあゝん、ノロマなカメに撃退されるようなストーカーだったら、師匠は気にもかけないって。俺の拳で生まれてきた事を後悔させてやる」

実はこの二人、当然の事だが、武術の達人である。

恭也や美由希から比べれば、まだ未熟なこの二人。しかし、管理局のAランカー程度なら互角にやり合える実力をちゃっかり持っている。

そう、戦闘民族サイヤジンが集う高町家の総戦力は管理局の一個大隊に匹敵するレベルなのだ。

「なんやて！？やるんか、オサル！！」

「やってやろつじゃないか！？」

はあゝ、何かと理由をつけて喧嘩する二人に溜め息。

「二人とも喧嘩は良くないよ?」

「なのはちゃん、包丁はあかんって!?!」

「俺等は仲良しだから安心しろって!?!」

晶ちゃんは直ぐにレンちゃんの肩に手をやり、二人はにっこりと笑う。

まあ、足の方は相変わらず相手の足を踏まんと忙しく動いているのだが・・・

まあ、何時もの事なので、諦めるとしよう。

「じゃあ、私は先に二階に上がるね。御馳走様でした」

「なのは、私も行くよ。御馳走様でした」

私とフェイトちゃんは仲良く話しながら、食器を流しに漬けて、二階へと登った。

## 第二十二話 決意なの・・・（前書き）

今回は、二話連続ですね

シルフレも、今まで放って置いた分、今回は投稿です

## 第二十二話 決意なの・・・

フェイトちゃんは、本人及び、私の希望で同室になっており、毎日一緒にベッドで寝ています

フェイトちゃんって、ぷにぷにしてて抱いて寝ると、とっても寝心地が良いの

フェイトちゃん自身も嫌がっている様子もないしね

でも、前に一度朝早く我が家にやって来たアリサちゃんとすずかちゃんに見られて、アリサちゃんが大騒ぎした事もあったなあ。

で、結局その日は、アリサちゃんとすずかちゃんが家に泊まりに来て、私のベッドは幾ら小学生と云えど、四人で寝た所為で、物凄く窮屈だったの。

でも、ツンデレアリサちゃん、可愛かったなあゝ

おっと・・・また涎が・・・

先ず部屋に戻った私とフェイトちゃんは、明日の学校の宿題をこなす。

残念な事にフェイトちゃんは、リニスから英才教育を受けたアリシアちゃんの記憶を持つてる所為で、全教科抜群の成績である。

この時点で、「お姉さんが教えてあげるなの」作戦は成立せず。

く、普通アニメとか漫画だったら、同居人のどちらかは勉強が苦手です、片方が勉強を教えることで更なる進展があるのに・・・

それにしても、簡単だなゝ、宿題・・・

まあ、体は子供頭脳は大人だから、仕方ないか。

サンデー

週刊少年日曜日の漫画の3か月で何百もの死体を見て来た疫病神小学生探偵バーローもきつと同じ事を思った筈なの。

とまあ、色々とくだらない事を思いつつ、解くこと5分。宿題は見事簡単に片付く。

フェイトちゃんも、後数問で形が尽きそうだと云うことで・・・

今の内に脳内作戦会議ー！！

さて、お兄ちゃんの部屋にみんなが寝静まった後に押し掛けて、シグナムの来る日について詳しく聞き出す。

そして、シグナムを通してはやてちゃんに接触し、内部調査を開始。本来なら、今晚にでもはやてちゃんの家で、幻影魔法で変装して押し掛けて調査したいけど、シャルが、恐らくは侵入者探知用の魔法を発動しているはずだから、一発ではれてしまう。更には、お兄ちゃんと会った今日の日にそんな事が有ったら、向こうも怪しむだろう。

それだけでなく、堅物のシグナムだし・・・

「なのは、私も終わったよ」

宿題の書いたノートを閉じ、学校鞆に仕舞いながらフェイトちゃんが報告。

「じゃあ、ゲームでもする？」

「いいよ。ところで、何する？」

私はにこにこ笑いながら押し入れより、二つのソフトを取り出す

「バイオハザード5とヴァーチャリーファイター、どっちが良い？」

バイオハザード5は、みんな大好き空耳ゲームバイハザード4の続編で、ファン待望の二人プレイ対応。

前作の4では、敵の「おっぱい」発言が伝説なアレなの。

ふふふ、そう言えば、逆行前の六課の時に、みんなでやったなあ、このゲーム

スバルが敵が出る度にティアナに抱きついてたんだっけ？

それで、その度にティアナが操作するシェバが死んじゃって、私からリアルに攻撃されたりして、部屋が阿鼻叫喚、ゲフンゲフン・・・非常に盛り上がったゲームなの

そして、もう一つのゲームは、ゲームセンターに置いてある格闘ゲームの、移植版。

レンちゃんと晶ちゃんは、このゲームに非常にお熱で、毎日のように私の部屋に来てプレイしている。

現在の勝敗はレンちゃんが二回勝ち越し。

結局、バイオの方はフェイトちゃんが怖がり、ヴァーチャリーファイターに決定。

私達が数戦している間に、食事の終わった晶ちゃんとフェイちゃんが何時も通り乱入して来て、四人での順番交代の対戦が始まる。みんなが御熱になり始めた所で・・・

「ちょっと、御手洗い行つて来るね」

と、抜け出して、御兄ちゃんの部屋に向かうのだった・・・

はあ・・・今日は厄日だ・・・

メイド喫茶では、顔面にオムライスを食らうし、自宅に帰ればなのはと風呂場で出会し、食事中にはシグナムの事で問い詰められるし・・・

こんな日は、さっさと寝てしまおう。

そう思い、素早く明日の講義の教科書を鞆に詰めて、部屋の灯りを消して布団に横になる。



横になって、数分もせぬうちに部屋のドアがノックされる。

「お兄ちゃん、なのはだけど、入っても良い？」

「構わんぞ」

美由希なら、構わず無視だが、なのはなので対応。

俺はむくりと起き上がり、部屋の灯りを再び点けて、ドアを開ける。

「ゴメンね。ちょっと、聞きたい事が有って来たの」

十中八九シグナムとの関係の事だな・・・

「シグナムの事か？」

「うん。シグナムさんと何時手合わせの約束をしたの？」

「今週の土曜日だ」

「私、お兄ちゃんとシグナムさんの試合が見たいんだけど、見ても良い？」

む、意外な展開。

試合を見せても減るものではないし、寧ろ、格好良く決めればなのはの好感度も上がるしな。

「別に構わないが、少しは離れておけよ。今日、シグナムの手の豆を見た時に、かなり練習している人間だと見て取れたしな」

「うん、分かった。お邪魔してごめんね。おやすみ、お兄ちゃん」

「ああ。おやすみ」

そう言つて部屋を出るなのは、そして安堵の溜め息の恭也。恭也は安堵した所為で、なのはのボソツと漏らした言葉を聞き取れてなかった・・・

「運命を変えてみせる」と云う、なのはの決意の言葉を・・・

ここは何処！？

私は暗闇の中をずっと独りで走り続けていた。

確か、私は御兄ちゃんの部屋で、運命を変えると決意して・・・それから・・・

思い出せない・・・

とにかく、早く出口を見つけて明るい世界に出たいと思いながら。

ハシルハシルハシルハシル・・・ダガ、デグチハミツカラナイ・・・

「誰か居ないのー！？」

走り疲れたので、私は叫んで誰かに助けを求めようとした。

「なのはさん、なのはさん」

運の良い事に、私の呼び掛けには直ぐ返事があった。

私は喜びに満ちた顔で、声のする方を向く。

そこには、聖王協会で私に思いをぶつけてきた警備兵の姿があった。彼は手を伸ばし、振り向いた私の首を絞める。

「どうして裏切ったのですか!？」

そう叫び、更に力を込めていく。

私は手を首から剥がそうとするが、びくともしない。

息が出来なくて苦しい・・・

私は首を締めてきた警備兵にスターライトブレイカーを打ち込み、吹き飛ばす。

そして、解放された私は別の方向へと直ぐ様走り出す。

また暫く走ると、目の前にお兄ちゃんとお姉ちゃんが現れる。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん!! 助けて!!」

私はお兄ちゃんに抱きついて懇願するが、お兄ちゃんに突き飛ばされて、地面に尻餅をつく。

何時もは優しいお兄ちゃんとお姉ちゃんの顔が、何故か険しかった。

「断る。それより、俺の本当のなのは返せ。この偽者が」

お兄ちゃんはそう冷たく言い放ち、私に小太刀の切っ先を向ける。

私はその怖さに直ぐに立ち上がり脱兎の勢いで走って逃げる。

暫く走ると今度はアリサちゃんやすずかちゃんと出会うが、彼女達もお兄ちゃんと同じ様に、昔の私を返せと冷たく言い放ち、襲いかかってくる。

そして私はまた逃げる。

しかし、逃げても次々と私の大切な人達が出て来て襲いかかってくる。レンちゃん、晶ちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん、シグナム、シャマル、ユーノ君、お母さん、お父さん、忍さん、フィア

ツセさん、他にも沢山の人が・・・

私はフェイトちゃんならきつと助けてくれると思い、喉が枯れるまでフェイトちゃんの名前を呼び続けて走る。

そしてやつとの思いでフェイトちゃんを見つけた。

「フェイトちゃん、助けて!!」

「どうしたの、なのは？」

フェイトちゃんは驚いた顔で、私を見る。

どうやら、フェイトちゃんだけは何時も通りのようだ。

「みんなが変なの!!」

それを聞いたフェイトちゃんは可笑しそうに笑った・・・

「だって、なのはが悪いよ。みんなを騙してたんでしょ？私を騙したように・・・」

「違う!!私は騙してなんかいない!!」

「違わないよ？だって、なのはは知ってたんでしょ？私の事もこれから起きる事も全てを。しかも、この時代のなのはを私利私欲の為に消し去って居座っているんでしょ？」

そう言ってフェイトちゃんは・・・ワタシノクビニテヲカケタ・・・

「いやああああ!!」

物凄い勢いでベッドより飛び起き、私は辺りを見る。

そこで初めて先程の事が夢である事に気付く。  
後味の悪い夢と汗でびっしりなパジャマが気持ち悪い。

「どうしたの、なのは？」

私の叫び声で目を覚ましたフェイトちゃんが眠気眼を擦りながら、心配そうに尋ねてくる。

「ごめん、ちょっと怖い夢を見ただけ」

「どんな怖い夢？」

「みんなが私を嫌いになる夢・・・」

私はそう返すと、フェイトちゃんは私を優しく抱いてくれる。

「大丈夫だよ。世界中の人がなのはを嫌いになっても、私は絶対になのはを嫌ったりしないよ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

何時もは私がフェイトちゃんを抱いて寝てたのに、この日だけは何時もととは逆だった・・・

私はフェイトちゃんの暖かさが心地良かったのか、再び夢の世界に旅立った。

今度は怖い夢ではなく、私が、フェイトちゃんが、みんなが楽しそうに笑っている夢だった。

## 第二十三話 八神家作戦会議なの

「主はやて。明後日の午前は、少し用が出来ましたので、病院への通院はザフィーラとシャマルと一緒に行かれてください」

場所変わり、話題の八神さんちをピックアップ。

現在晩御飯のようで、食卓には、純白の宝石と云わんばかり輝く銀シャリ、ジャガイモ、ニンジン、糸こんにゃく、牛肉と様々な素材が柔らかくなるまで煮込まれた肉じゃが、海鳴港で朝に揚げたばかりの鰈の煮付け。

そして最後に、そんな素晴らしい面々の中で一際輝き、皆の目線を釘付けにする程のオゾマシキ存在である緑色の味噌汁らしき物・・・明らかにこいつだけは、トクホも農林水産省も安全保障の印鑑を擦しかねるメイドバイシャマルと判断できる。

シグナムは、なるべくそれを視界に入れないようにしつつ、一家の主八神はやてに申す。

「あ、ええよ。シグナムも自分の好きな事を一杯しい」

主であるはやては、当然にこやかに返す。

何時も自分の事ばかりしてくれて、自身のしたい事を犠牲にしていたシグナムが、初めて自身のしたい事を優先したのである。

寧ろ、それははやてにとって嬉しい事である。

「で、用ってなんや？逢い引きかなんかか？あ、さっき、電話で言ってたキョウヤってゆう人やな？」

「いえ、断じて違います！！ただ、恭也殿は武芸に秀でているそうで、一度手合わせをする約束をしたものですから、決してその様な

事はありません!!」

顔を自身の二つ名以上に真っ赤にし、否定する。

「なんや、つまらんや。ところで、何処で試合をするんや? うちも診察が終わり次第向かうから」

「あ、実は道場の場所は分かり難いから、取り敢えず2時に翠屋と呼ばれる喫茶に来てくれと言われたので、道場の詳しい場所が分からないのです」

む、翠屋っちゅうと、あのケーキが美味しいんで有名な店やな。しかも、海鳴食べ歩きマップでカッブルや小さな女の子が好きな人にお勧めな店ベスト1位やったはず。

まさか、実は試合と銘打ってシグナムにデートのお誘いか!?  
ふふふ、キョウやって人、なかなかの手練れやな・・・  
でも、シグナムがデート・・・

あかん、シグナムがあゝんされて照れるのが見てみたい!!

深読みのし過ぎで、あらぬ方向へと妄想が突き進むはやて。

残念ながら、なのはラブな恭也にはそんなつもりはさらさらない。

「そうなんか。じゃあ、仕方ないな。ほんなら、負けたらあかんで」

「畏まりました。主はやての騎士として恥ずかしくない結果を残します」

むふふ、後でシャルと作戦会議や

こちらでも、なのは同様に作戦が立てられるのであった。

そして、決戦当日……

本日は土曜日。日曜日に次いで、一家で出掛けることが多い曜日である。

更に、快晴の為、更に多くの人間が外出をする。

車椅子の少女、全身を暑苦しいコートで身を包む女性、プロレスラー顔負けの屈強な男、そして最後に幼女。

この怪しげなパーティーもその中の一組だ。

「シャマル、盗聴器と発信機の具合はどうや？」

「正常ですよ、はやてちゃん。ほら、このイヤフォンからシグナムの声が聞こえるでしょ」

『おねーさん、お茶しない？俺、伝説の男、渋井丸拓生、略してシブタク』

『流石、拓さーん』

『失せる……』

シャマルの言うとおり、イヤフォンを耳に当てると、そんな会話が聞こえる。

てか、そのナンパ師の名前は色々と拙いんちゃうか？

著作権とか、下手したらお月様に死のノートに名前書かれてやられてしまうで！？

「おー、完璧やー！！しかし、幾ら魔法に敏感なシグナムと云えど、



税込み7350円の科学の力の前には平伏すしかないんやで」

「その代わり、ザフィーラの今月の食事がドッグフードになってしまえますけどね」

「ぬお！？何故、私の食事がドッグフードに！？それより、シャマル。私は犬ではなく狼だ！！」

「どちらも犬科でしょ？細かい事言ったら、生の玉葱を食べさせるわよ？」

「それは犬ではなく猫なのでは？」

「うふふ、今晚から一食分減りそうね 大丈夫よ、痛くないからね 狂犬病のワクチンを打つようなものよ」

闇の書を取り出したシャマルは、頗る笑顔で、開いたページをザフィーラに向ける。

「それは洒落にならん！？止める！！」

「ほんま、二人は仲良しさんやな」

「はやて、ザフィーラは良いからアイス食べたい」

「おい、私が居なかったら、誰が盾になると言うのだ！？」

「盾なんかいらねえだろ？何時も盾の守護獣とか言いながら、前線で独りで格闘してるくせに」

そんなごもつともな意見に何も言えず、黙り込むザフィーラと、こやかに笑い、ヴィータとザフィーラの腕を強く握り・・・

「格闘ってなんの話や〜？」

問い訪ねるはやて。

「もう、はやてちゃんったら、この間のゲームの話ですよ」

慌てて答えるシャマル。自分達が闇の書完成の為に動いてる事ははやてに止められてるため、密かにしているのだ。

「あゝ、ゲームの話しか〜。確かにザフィーラは前線で暴れまわってたな。『前に出過ぎだ、自重せい！！』って軍師に言われてたけど無視しまくりやったな」

「その癖、赤い馬に乗ったゴキブリみたいな奴にやられちまうしよ」

「いや、負けた理由は、一緒にプレイしていたシグナムが、幾ら経っても救援に来なかったのが原因だと・・・」

「シグナムが機械音痴なのは知ってるでしょ？」

毎度の事ながら、シャマルの突っ込みは毒舌ながらも的を獲ているので、反論が出来ない。

「機械音痴以前に、攻撃も出来ない味方大将に『貴様が敵だな！！』と斬り続けてる時点で救援は望み薄やろ？おっ、シグナムが翠屋に入っただけやで？そんなら、うちらも翠屋に入るで」

「はやて。私、アイス食べたい」

怪しい機材を手に持ちつつ彼女達も翠屋に突撃した。

第二十四話 気にもならないアイツの名前は何だっけなの (前編) (前書き)

赤星の事を恭也が赤坂と言っていると指摘が有りましたが、決して執筆ミスではありません。

間違えた理由は今回のタイトル

## 第二十四話 気にもならないアイツの名前は何だっけなの（前編）

道中、自称渋い謎の男にナンパされるなどあったが、無事に翠屋に着いた私は店のドアを開ける。

店内は非常に洒落ており、私の元に店で働いている店員がやって来る・・・しかし、主はやてくらいの女の子を働かして良いものなのだろうか？

「いらつしゃいませ」

「む、ここに恭也という者が先に来てると思うのだが？」

「あ、じゃあ貴女がシグナムさんですね。お兄ちゃんなら、もう来てますよ」

お兄ちゃん？

ああ、恭也殿の妹君か。確かに電話の時の声と一緒にだな。

私は少女に案内されて、恭也殿が座ってる店の一番角の席に案内された。

「お兄ちゃん、シグナムさん来たよ」

「すまん、なのは。後、小一時間で赤坂が救援に来るから、それから行くことにする。なのはもう休んでシグナムの相手を頼めるか？俺が受け付けに回るから」

「大丈夫だよ、別に疲れてないし。だから、お兄ちゃんがシグナムさんの相手をして。あ、シグナムさん、何かお父さんに言って作

って貰いましょうか？」

「いや、迷惑だろ？お構い無しに」

どうやら、この少女が働いている理由は、父君の店の手伝いだからであろう。

つまり、あそこで働いている金髪の少女は、なのはという少女の友達か何かであろうか？

しかし、この店の人間からは私と同じ匂いがするのだが・・・もしかして、武術に秀でた一家なのだろうか？

御名答・・・高町一家は超人類サイヤジンの集団なので・・・

「ふふ、じゃあ、珈琲とシュークリーム持って来ますね」

「いや！？お構い無しに！！」

しかし、既になのはという少女は、厨房に姿を消す。

そして、直ぐに珈琲の入ったカップとシュークリームを持って来て・・・

「どうぞ、翠屋自慢のシュークリームです」

と、私の前に置く。

「か、忝ない」

「じゃあ、シグナムさん、お兄ちゃん、また後でね。いらっしやいませー！！」

来客が来た合図の電子音が鳴った為、少女は大慌てで入り口がある方に向かって行く。

「良い妹君ですね」

「ああ、目に入れても痛くない程可愛い自慢の妹だ」

「そうですか。我が主も恭也殿の妹君と同じ年くらいでして、私も主の為なら死んでも良いくらいです」

「そうか、しかしすまん、少し待たせる羽目になって。なのはがどうしても、試合を見てみたいと言つのでな」

申し訳なさそうに恭也殿。

「いえ、構いません。あ、それと我が主も後でお邪魔するのですが、構いませんか？今は、通院をしているので、遅れてですが」

「土曜日に通院とは、骨折か何か？」

「いえ、主は足の方が不自由でして」

「不躰だったな・・・すまない」

一瞬にして気まずい空気が、立ち込める。

私は話を変えようとするが、話題が見つからない・・・

取り敢えず、目の前に置かれた洋菓子を食べることにしよう。

一口・・・

サクツとしたクッキーシユを噛んだ瞬間、口の中に程良いカスタードの甘さが広がる。

バイト先の甘ったるいだけのシュークリームとは大違いだ。

「これは実に美味しいな。バイト先を悪く言うのもなんだが、あそこの物と比べると天と地の差がある」

「それは、実はなのはが作ってる。洋菓子は母さんとなのはが担当。料理は父さんとフェイトが担当している。後、三名程妹や同居人が働いてるが、基本的にあいつ等は接客だ・・・」

フェイト殿？もしかして、先程の金髪の少女か。しかし、残り三人について話す

際は、どうしてそんなに沈んだ顔に・・・

「そうですか」

「さてと、で、シグナムはどここの流派だ？俺は永全不動八門一派が御神不破流だ」

これまた大層な名前の流派・・・  
矢張り、かなりの達人か？

「恥ずかしながら、私は我流だ」

「何を恥じる？全ての流派は先代の我流から始まったのだ。つまり、どの流派も我流みたいなものだ。強く、実用的でさえあれば、それは立派な流派だ。恥じる必要はない」

「ふむ、確かにそうだな。しかし、恭也殿との試合が実に待ち遠しい」



「俺もだ」

その後も剣術の事で、花咲かせる二人。  
端から見ると、それは恋人同士にも見えないことはなかった。

「お待たせしました！！何名様で・・・す・・・か？」

「四名や。それと、席やけど、あそこの女性とは離れた席でお願いな」

なんで、はやてちゃんがああああ！？

シヤマルもヴィータちゃんもザキーラも居るし・・・あれ、犬の名前ってこんな

一撃死の魔法つばい名前だっけ？

そして、その怪しい装置と格好は何っ！？

「かしこまりました。じゃあ、お席の方に案内しますね」

「頼むで〜」

「はやて。私、アイス食べたい」

「私はジェラートが良いです」

ヴィータちゃん、相変わらずアイス好きだねえ・・・

取り敢えず、私ははやてちゃん達を席に案内し、メニューを渡す。

「では、じゅっくりどうぞ」

ザラキーマを除くはやてちゃん御一行は嬉しそうにメニューを捲り、どれにするかを楽しそうに話す。

てか、犬の名前って本当になんだっけ？

まあ、犬の名前がザキだろうがザラキだろうがなんだろうが、別にどうでも良いので、取り敢えずザフィーラと名付ける・・・あ、そうそう、犬の名前はザフィーラだったね。

てへ、私のドジっ

とまあ、歳過ぎてぶりっこぶるのも恥ずかしいので、今の台詞は虚数空間に仕舞い込んでと・・・

私はお冷やはやてちゃん達のもとに持って行くことにする。

「あ、注文お願いします」

丁度タイミング良く、はやてちゃん達も注文の品が決まったようだ。はやてちゃんは私が、伝票を取り出すのを確認すると・・・

「バニラアイス一つとマンゴーゼラート二つ、あとあそこの外人さんの胸一揉みとドッグフードな」

「主、だから私は!!」

ザフィーラが何かはやてちゃんに反論しようとするが、私はその前に・・・

「注文を繰り返しますね。バニラアイス一つ、マンゴーゼラート二つ、ドッグフード一つですね。それと、生憎ですが、フェイトちゃんの全ては私が独占してるから売り切れなの」

「あゝ、せやったか。それは、残念や。そんなら・・・」

はやてちゃんの視線が、私の胸に向くので・・・

「私の胸はフェイトちゃん専用なので、こっちも却下なの」

「ウェイトレスさん、なかなかやるやないか」

「ふふ、お客様こそ」

私とはやてちゃんがギュツと熱い握手をしてる間中もザフィーラが、  
「私は犬ではない」と抗議するが当然無視。

終いにはあまりにも五月蠅いため、シャマルが闇の書を鞆から取り出すと、ザフィーラは静かになった。

私は、この書の正体を知ってるから、静かになった理由は推測できるが、他人から見たらこの光景はどの様に映るのだろうか？

「では、少しお待ち下さいね」

さてと・・・勢いに任せたとはいえ、これからどうしようなの・・・

厨房にオーダーを伝えに行く間、なのはの顔は険しかった。

何か思い悩む事が出来たのか、それともはやての事で新たな悩みが増えたのか？

ザフィーラのドッグフード・・・

その悩みは非常にどうでも良かった・・・

結局、ドッグフードが無かったので、ザフィーラのもとに出されたのは、出汁として使われた鶏ガラのガラだった・・・

これには、はやて以下ザフィーラとシグナム除くヴォルケنزの皆

様は大笑い。

出されたザフィーラは、「犬です。一見狼のように見えますが私は犬でございます」と夢遊病患者宜しく壁に話していた・・・なのは居なかった数分の間に何があったのか、それはシャマルのみぞ知る。

取り敢えず、後編に続くの！！

第二十五話 気にもならないアイツの名前は何だっけなの (後編) (前書き)

ちよっぴり声優ネタ入り。

みっ？分からない人はどうすればいいのかですか？  
分からない人は、ググって下さいなのです

第二十五話 気にもならないアイツの名前は何だっけなの（後編）

「恭也、手伝いに来てやつ・・・た・・・この、フラグ王め！！リア充核爆発しろ！！」

出合い頭に鞘から真剣を抜刀し、切りかかって来た馬鹿をいなし、奴の頭を掴んで、地面に叩き付ける。

運良く店内には、謎の機械を持つ車椅子少女、屈強な野郎、トレンチコートを身に纏う女性、幼女と云う怪しげな客しか居ないので、問題無かるう。

「どうした、そんなに興奮して？発情期か何かか？」

「うるせー！！俺は常時発情期じゃあ！！俺好みの女性是非とも力モーン！！」

「貴様は営業妨害にきたのか、手伝いにきたのかはつきりしろ」

即座に、店内で求愛する馬鹿に突っ込みを入れる。

「ふっ、そうだったな。フェイトちゃん、なのはちゃん、助けに来たよー！！」

「あっ、赤坂さん！！」

「いやいや！？赤星だからね！！赤坂だと、H波沢村の輪廻少女を助けに来る人になっちゃうよー！！」

あれ、そうだったけな？

俺もてつきり赤坂だと思ってた・・・

「みく？ボクは問題ないですよ」

「なのはちゃんは声的にオツケーでも俺が拙いから！！いや、寧ろ作品的に拙いから！！これ、作品違うから！！」

「冗談ですよ 助かりました。フェイトちゃん、悪いけど先に抜けるね」

「うん、お兄ちゃんの試合、しっかりビデオに撮っておいてね」

ビデオに俺の活躍を撮るだと・・・

ふっ、なのはよ。しかと、我が雄姿を納めてくれ。

「では、シグナム行くぞ。自宅までは、多少は歩くぞ？」

「構わない。では、行こうか」

俺達は道場が存在する我が家へと向かう。

が・・・

道中に変人が出現。

バイクを乗り回す連中は俺達を取り囲み、にやにや笑う。  
数は20人ばかり・・・

「やっと見つけたぜ、お姉ちゃん」

リーダー格の男がシグナムを見つけたのが嬉しいのか喜々としてい

る。

シグナムの知り合いか？

「お前は、確か・・・伝説の男渋谷丸拓生・・・」

「そうそう」

「略して電卓だったな」

「そうそう、10ケタまでなら、楽々計算。家計簿なら俺に任せろって何でやねん！？シブタクだよ！！どうやったら、その部分だけを見事に間違えるんだよ！？」

なかなか愉快な奴だな・・・

「知り合いか？」

「うむ・・・今朝に少し一揉めした連中だ」

「そうよ、あんちゃん。俺はこの辺じゃあちと伝説の男。渋谷丸拓生、略して」

「「電卓！！」「」」

お、流石はなのはとシグナム。  
俺の期待を裏切らん・・・

「太陽電池付いてるから、電池切れとは無縁って、何度同じことを言わす！？」



そして、こいつもな・・・

「冗談だ、電卓。で、要件は何だ？くだらん内容なら、斬り殺すぞ？」

俺の発した殺気に、電卓以外のチンピラは戦慄し退く。  
どうやら全く効かない電卓は、なかなかの凄腕か馬鹿のようだ。

「てめえら、何退いてる！！」

「タクさん、こいつヤバいっすよ」

「あんな小さな女の子を好んで引き連れてる時点で、危ない奴は確定っすけど、戦闘能力とかスカウターが壊れてしまっくらい拙いっす！！」

「ロリで豊満バディー好きとか、どこぞの次期組長なみにヤバいっす！！」

「オマケに二股だぜ？リア充核爆発しろ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

チンピラの中に何時の間にか赤星の馬鹿が混じっており、俺の悪口を言いやがる・・・

「あ、気にするな。恭也あ、土郎さんと桃子さんに、客少ないから良いよって言われたんだが？」

「そうか、ならこいつらを片付けてくれ。きっと、お前の活躍を見

た通りかけの美女が、お前に告白すると思うから」

「マジで!？」

「ああ、マジだ。ほらみる、既にあそこに携帯を持ってお前の活躍を待っている美女が居るぞ」

と、俺は携帯を取り出して警察に通報しようとしている女性を指差す。

「うおー!!フラグ来たああ!？」

そして、奇声と共に抜刀する馬鹿。

明らかに立てたのは銃刀法違反とムシヨ行きのフラグである。

さて、俺達は警察が来る前に逃げるとしよう。

すまんな赤星。お前は良いダチだった・・・

俺達は赤星死亡フラグ発言をして、馬鹿の奇声と電卓達の悲鳴を背にして道場へと向かう。

道中、サイレンを鳴らして走行するパトカーを見た。土曜日にも限らず実に忙しそうだ・・・可哀想に・・・

「あかん、このマンゴーゼライト、めっちゃ美味しい」

「本当ですね。あ、無事に電卓からは逃げたみたいですよ」

「てか、これ以上つけても面白い事になりそうにないから、素直に道場に向かおうぜ」

「私はチワワです。スペルはChihuahuaです。一見、狼のようですが、か弱いチワワです」

現在はやて達は運ばれて来たデザートに、舌づつみをうちながら、今後の自分達の行動についての作戦会議をしている。

「せやな。シャマル、シグナムに連絡取ってや」

「はいはい」

シャマルは念話をシグナムに繋げる。

『シャマルか？』

『はい。はやてちゃんの通院が今終わったので、そろそろ向かおうかと思しますので、大体の目印を言うか、少量だけで良いので魔力を発して貰えますか？』

『主はやての通院がもう終わったのか？それにしても、今日はやけに早いな？』

答えは、シグナムの追跡をする為に急用が出来たと言ってすっぱかしたからである。

流石にはそんな事をシグナムには言えず・・・

『今日は軽い会話だけでしたので』

と誤魔化す。

『そうか、なら到着次第魔力を発するから、クラールヴィントで探知してくれ』

『分かりました』

「シグナムには、今日の診断は会話だけで終わりと伝えましたので、皆さんは口裏合わせをお願いします」

「了解」／「おう」／「いえ、ワタシメハチャウチャウです」

あらあら、ザフィーラがちょっと変になったわね・・・しょうがない・・・

「ザフィーラ？」

「チャウチャウちゃんか？チャウチャウ、ちゃんちゃう？」

と、京都弁混じりの独り言を言うザフィーラに、私は闇の書に向けて・・・

「本当に蒐集しますよ？」

「私は気高き狼だ」

と軽く脅す。

そしたら、どうでしょう。

先程までは夢遊病患者宜しく独り言を言ってたザフィーラが、元に戻ったではありませんか

これこそ、匠のなせる技です

「はいはい、狼ですね　それでは、私達もシグナムのもとに向かいますよ」

「分かったが・・・先程からの記憶がないのだが・・・」

「気のせいですよ」

闇の書向けると、ザフィーラは首を縦に振って納得。

ザフィーラも納得したところで、私達は清算しシグナムのもとへと向かった。

ただ一つ、この店で引かった事がある。念話の際に、金色の髪の少女が私達を冷たい目で見ていたのだが・・・あれはなんだったのだろうか？

もしかして、先程の念話や魔力を察知された？

でも、私クラスの念話だとAAクラスでも困難なのに・・・まさかあの子、相当の魔術師？

なんて事を私は考えるが、直ぐにその考えを排除する。

そんな簡単に上位クラスの魔術師がいるわけないと・・・ましてや、こんな小さな喫茶店に・・・

第二十六話 久しぶりにあの少年からの報告なの（前書き）

まっくろくろすけ、出ておいで

## 第二十六話 久しぶりにあの少年からの報告なの

大きい屋敷だな・・・

おっと、取り敢えずシャルに分かるように魔力を少しばかり放出せねば・・・

私は術式を組まずに、ただ魔力だけを放出して、シャルに位置情報を知らせる。

「すみませんが、お電話をお借りできますか？」

私が今の今まで位置を把握してないのに、主が普通に来たのでは流石に怪しまれるので、電話を借りてかける振りだけはしておかねばと思い、願い出る。

「構わない。なのは、シグナムを電話機のところまで案内してやってくれ」

「あつ、私、携帯電話持ってるよ」

恭也殿の妹君は、自信の鞆から携帯電話を取り出して私に貸してくれる。

「忝ない」

携帯電話を受け取った私は、主の携帯に連絡を入れる。

『どちらさんや？』

「シグナムです。今、恭也殿の屋敷に着きましたのでご連絡を。目

印としては弁当屋のアツアツ亭とスーパーのマックスヴウルウア  
アリューがあります。そして、高町と表札の掛かったお屋敷です。  
かなり大きい屋敷なので、一目で分かると思います」

『了解や。ほんなら、着いたらこの携帯に連絡し直すな』

「畏まりました」

主が切った事を確認して、私は妹君に礼を添えて携帯を返す。

「じゃあ、私はカメラとか持って来るから、お兄ちゃんとシグナム  
さんは先に道場に行つててね」

携帯を受け取った妹君は、先程の少女との約束を果たすためにカメ  
ラを取りに自宅の中に早足で入って行く。

「じゃあ、俺達は先に道場に行くのでしょうか。ところで、今更だが  
シグナム、刀は持ってきてないのか？」

「あ、私の刀はここに。レヴァ・・・すみません、忘れました・・・

」

危うく一般人の前で魔法を見せるドジをするところだった・・・シ  
ヤマルではあるまいし・・・

「む、忘れたのか・・・生憎、うちには小太刀か木刀等の日本刀特  
有の型の刀しかないのだが、それでも構わないか？」

「すみません、助かります。私としたことが、恭也殿のような熟練  
者と試合が出来る事が嬉しく、刀を持って来る事を忘れてました」



「そうか、じゃあ俺達も」

「高町恭也あ！！今日こそ、僕が勝つ！！」

向かおうと言おうとした恭也殿の言葉を遮るように叫び、此方にやってくるのは一人の少年。

「また貴様か？好い加減諦めてくれないか、今から俺はこの女性との試合があるのだが」

「くっ、なら仕方無いな・・・だが、今度こそ僕の新型デバイスと新技でお前に絶対に勝つ！！」

デバイス・・・？

いやいや、まさか魔道具のデバイスと決めつけるのはいけないな・・・

「また改造したのか？デバイスとやらに頼るのも良いが、己の磨きも忘れるなよ」

「ふん、勿論、そんな事を言わなくても分かってるさ。っと、ところでこの辺で怪しい人物を見なかったか？僕が普段付けているバリアジャケットの様な物を着けてる人間とかを」

バリアジャケット！？

その言葉でこの少年がミッドチルダ式魔法に携わる人間だと云う事が判明。

しかし、この少年は・・・いったい・・・

「お前とお前の相方以外には見てないがどうした？」

「いや、最近何者かによって、何人もの味方がやられているんでね。君なら、何か知ってるかと思ったのだが」

「ふむ・・・まあ、頑張れよ」

「ふん、言われなくとも」

そう言い残して少年は去る。

会話から推測すると彼は管理局の人間であり、被害者とは、私達が蒐集した魔術師達の事だろう。

ついに、管理局も大きく動き始めたか・・・

だが、恭也殿は一体何者だ？

局員から情報を求められたり、試合をしたりと云う事は局員？

これは少し探りを入れてみるとしよう。

「恭也殿、今の方は？」

「何か知らんが、新手の宗教の過激派って奴だな。管理局とか云う妄想の中の組織がどうのこうのと危ない事を言って、俺に喧嘩をふっかけてくる輩だ。しかし、あの年で危ない宗教にはまるとは・・・この先が実に心配だ」

とつくの昔に100%を通り越した真面目顔でそんな事を言い出すので、どうやら、管理局が如何なる物かは理解出来てないようだ。しかし、今一関係が理解出来ない・・・

何故、管理局の局員が、恭也殿に喧嘩を仕掛ける必要が？

もしや、恭也殿の屋敷には、管理局を脅かす珍しいロストログアが存在するとか！？

ロストロギアは存在しないが、戦力は十二分に揃っていたりする。  
S越えランカー二名を筆頭に、執務官すらも手玉に取る最強のフラグ王、そしてその教え子と、師匠に値する父親。  
見た目は二十歳の夢色パティシエール桃子。

他にも夜の一族や、メイド界ではPADが自慢のメイドに次いで最強と呼ばれるメイドロボに、日本経済を牛耳る大手財閥が二つ、変態と云うなの馬鹿。

他にも香港警察と機動隊、拳句の果てには超能力者までバックに居るのだ・・・

この一族を脅威と呼ばずして何を脅威と呼ぼう。

「どうした、シグナム？」

「いえ、なんでもありません」

私が考える事に夢中になり、反応しないことに恭也殿は不思議に思われ、尋ねてくる。

「取り敢えず、道場に案内しよう。刀も道場に一緒に置いてるから、そこで一番しつくり来るのを選んでくれ」

「何から何まで忝ない。シャルルではあるまいし、私としたことが・・・」

「気にするな誰にも失敗はある・・・」

気の所為か、シャルルの抗議の声が聞こえたような気がするが、魔力の気配も無いし、シャルル達が会話を傍受してる可能性は無いので、そんな馬鹿げた考えを破棄し、恭也殿の後について行く。

館の中のポツンと離れた場所に、年紀の入った道場が一つ。

中は意外に広く、自分の型を見るための鏡、トレーニング用のダンベル等、様々な用具も揃っている。

そして道場の端には模造刀が置かれている棚。

恭也殿はその中から数本選び、私の前に置く。

「自分に合う刀を選んでくれ。俺はシグナムが選んでいる間に、道着に着替えてくる」

と、私にとって嬉しい事を恭也殿は言う。

わざわざ刀を用意してくれた恭也殿には悪いが、今の内に、騎士甲冑展開とレヴァンティンを通常形態に・・・

更に、怪しまれては拙いから、シャルだけでも良いから、急いで来て貰おう。

「レヴァンティン!!」

『Ja!!!(了解!!)』

レヴァンティンが返事した次の瞬間には、シャツとジーンズと云うラフな格好で

はなく、西洋の騎士が身に纏うような甲冑を着けた私の姿が在った。さて、次はと・・・

『シャル、私だ。悪いが、今直ぐにお前だけでも良いから来てくれるか?』

『どうしたの、シグナム?』

『いや、良く考えてみれば、恭也殿は魔法も知らない方だ。荷物すら持つて行つて無かつた私が、騎士甲冑やレヴァンティンを持つてたら怪しまれると思つたから、シャマルに持つてきて貰つた事にしようと思つてな』

『あらそう 本当にシグナムはうっかりさんねえ』 うふふ、良いわよ うっかりさんなシグナムの為ですもの』

何故だろう？

シャマルの言葉が所々棘のある言い方の上に、うつかりを強調して言ってくる。

非常にいらつと来る・・・だが、我慢我慢・・・

『忝ない』

・ 殺意を押さえて返事をし、私はシャマルが来るのを待つのだつた・・・

## 第二十七話 試合なの（前書き）

御久し振りです><

無事に期末試験も終わり、夏休みだぜこんちきしょおおおおお

！！

あまりの嬉しさに螺子が飛んで行きそうです（笑）

## 第二十七話 試合なの

その数秒後、道場内に魔力陣が出現し、シャルマルがやって来る。

「すまないな。ところで主の案内は？」

「少し心許ないけど、ザフィーラとヴィータに任せたわ」

その言葉を聞くや否や、私の脳裏に、「ワンワン！！」と雌犬に吠えるザフィーラと「はやて、アイス」と強請るヴィータ。そして最後に二人に混じって楽しんでいる主はやての姿。

シャルマルの言う通りあの二人では心許ない・・・

恭也殿が戻って来たら、シャルマルに再び向かって貰おう。

「カメラ持って来たよ・・・あれ、シグナムさんのお隣の方は

」

「あらー！！あなたは翠屋のウェイトレスさんじゃない お久しぶりー！！」

「む、知り合いか？」

「そうなのよね。実はシグナムに内緒で、昨日翠屋にジェラートを食べに来たのよね。ね、私、昨日来たよね？」

恭也殿の妹君は、語尾に『ね』を付けながら、自分に接近して来るシャルマルに恐怖したのか、首を縦に振る。

シャルマルの奴目・・・何か企んでるな？

恐らく背後には、手をワキワキさせた主はやてが居るはず。  
さて、何を探るように命じられたのやら・・・

「ほらね、ウェイトレスさんも大領きよ、あ、私、シャマルつて云うの。よろしくね」

「私は、高町なのはって云います。よろしく願いしますね、シャマルさん」

「こちらこそよろしくね、なのはちゃん。あ、後で、他の家族の人  
も来るからね」

「えっと、あと三人でしたよね？一緒に」

「そうよ。ヴィータちゃんにはやてちゃんにザフィーラ」

「ふえ、シグナムさんの所も大家族なんですね」

恭也殿の妹君は驚き、かつ嬉しそうに私に話を振る。

「ま、まあな」

突如振られた私は、そんな呆気ない返事しか出来なかった。

しかし、恭也殿の妹君は実に明るくて良い子だ。同年代の親友が居ない主と、これを機会に仲良くなって欲しいものだ。

「それにしても、シグナムさんのその格好中世の騎士みたいで格好  
良いですね!!」

「そ、そうか？」



次は私の騎士甲冑の話題になる。

まあ、確かにこの甲冑を見れば驚くだろうな。話題になっても可笑しくはあるまい。

「はい それにしても、何処で甲冑なんか買ったのですか？」

「む、これは、私の大切な主が、私の為だけに作ってくれた物だ」

「そうなんですか！？それにしても、凝った作りですね」

と、恭也殿の妹君は私の騎士甲冑をまじまじと見、感嘆の声をあげる。

「うむ。主も考えて下さるのにかなりの時間を費やされていたからなあ。それに、この鎧が誉められる事は、私にとって主が高く評価されてると同義で非常に嬉しい」

それから二、三分程度、私の騎士甲冑の話をしていると、武装隊が身に着けるような軽くて強度の高い布を用いた、黒い服とズボンを履いた恭也殿が道場に入ってくる。

明らかに、銃撃戦等を行うような服装に私はやや驚くが、向こうも私の姿に同様驚き、次いでシャルを見ると驚愕の顔は、嫌そうな顔に変化。

「む、シャルも来たのか？」

「うふふふ、その嫌そうな顔は何かしら？」

「別に・・・で、シグナムの家族とは、流石にこいつだけじゃあな

いよな？流石にこいつがシグナムの主だったら、お前の主に対する忠誠心を疑いかねん」

「あら、こいつって何かしら？そんな事を言うなら、この間」

「このお喋りめ！！」

「神速！！」

私がお喋り者の口を塞ごうとした時には、私が視認すらできない速度で恭也殿が

シャマルの口を塞いでいた・・・

管理局局員を相手に出来る人だけあつて、確かに速い・・・恐らく、私同様スピードタイプか？

「すまないが、シャマル・・・何を言うつもりだったのか知らんが、最近俺は耳が遠くてな？ゆっくりと大きな声で言ってくれるか？」

聞いた者を震わせる程、冷たい声で尋ねる。

これには流石のシャマルも首をふるふると横に振る。

『シグナム、この人怖い！？』

そして念話で現在の恐怖心をリアルタイムで伝えてくる。

ちなみにその光景には、念話が聞こえてない筈の恭也殿の妹君も苦笑い。

「しかし、シグナムは何時の間にその様な格好に？」

シャルも温和おとなしくなったので、お喋りな口を塞いでた手を離し、話題を私へと変える。

「いや、私が忘れていたのに気付いたシャルが、慌てて届けに来てくれたので、恭也殿が着替えに行ってる間に着替えておいた。あ、刀だが、わざわざ出して頂いたのに失礼だが、自分の刀が届いたのでこちらを使わせて貰います」

「それは構わないが・・・ふむ、西洋剣にしては形が変わっているな・・・ギミックを盛り込んだ刀だな。刃の所々に小さな筋が有るのを見ると、恐らく蛇腹刀の様なワイヤーを用いて延びる刀ではなかろうか？」

「流石ですね。見ただけで分かりましたか。ですが、今回は蛇腹シユランゲフォルムにはしません。剣術の試合で、不意をついたこの様な勝ち方では、騎士の名折れですので」

「別に構わんぞ？本気で掛かってこい」

と、にべもなく返してくる恭也殿。

だが、あの一瞬でレヴァンティンのシユランゲフォルムの存在に気付くとは・・・

この方は凄い！！

私の中で、恭也殿と早く戦いたいと臍が興奮し始めて、それを抑えんとレヴァンティンを握る手の力が増す。

「ちなみにだが、俺はこの様な刀を使う」

恭也殿は立て掛けている木刀の中から、日本刀にしては小振りな刀を二本手に取る。

「二刀流ですか？」

「そうだ」

一刀流と比べ、二刀流等の多刀流は、二つの人間に分かれやすい。格好だけの下手か、達人かである。中間と云う者は居ない。

常識を持つ武術家の大半が、始めて数月内に自身に才能が無いのに気付き、一刀流に戻すからである。

だが、百パーセント彼は後者であろう。先程の電卓の時の殺気も、常人では放てるレベルではない。

二刀流の達人とやり合うのは久し振りなだけあって、腕が鳴る・・・

「では、恭也殿。始めましょうか？」

「俺は構わないが、シグナムの所の者が、シャマルしか居ないぞ？」

「いえ、構いません・・・」

主には申し訳ないが、私は早く始めたい・・・

この胸の鼓動を切り結ぶ事で抑えたい。

私は恭也殿が二本の刀を構えるのを確認すると、一旦目を閉じて深呼吸。

そしてレヴァンティンを構えて・・・

「「お願いします！！」」

互いに挨拶。

そして、互いに動いた・・・

「お、ここやな？しつかし、おつきい家やな？」

先に来た二名の危惧は、現実と化さず、無事に三人は高町邸前へと到着していた。

まあ、シグナムに発信機が着いている時点で、辿り着けないと云う事はないのだが・・・

「はやて、シグナムの奴がもう始めるとか言ってるぞ。あの戦闘狂め・・・」

「なに、もう我々も館に着いたのだ。今始めても、見逃すのは最初の数秒程度。問題はない」

うちらは玄関のチャイムを鳴らして、お邪魔し、道場の方へ向かう。

「シグナム待たせたな、ひいっ!？」

そして、道場に入ると同時に、私の頭のすぐ横の柱にレヴァンティンが突き刺さる。

あと数センチずれてたらうちに刺さったわ・・・

「勝負あったようだな、シグナム」

地面に手を突きうなだれるシグナムと、そんなシグナムに木刀を向けるキヨウヤさん・・・

明らかに勝敗がつき、どちらに軍配が上がったかくらいは、誰が見ても一目瞭然である。

「シグナムが負けただと？」

それは非常にヴォルケンリッターには衝撃的で、誰一人と開いた口が塞がらない。

まあ、はやての場合は別の事で開いた口が塞がらないのだが・・・

「私が・・・手も足も出なかったと・・・」

「もう一度やるか？今度は卑怯とか気にせず、己の力全てを出して掛かってこい」

「分かりました。では、飛んで行ったレヴァンティンを・・・あ、主はやて！？何時来られたのですか！？」

うちに気付いたシグナムが、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「今、来た所やけど。なんか有ったんか？」

と、うちはシグナムが傷付かんように、先の戦いに関しては見てないことにする。

何が有ったんかは知らんが、シグナムも数秒で負けた事は知られたくないと思うしな。

「いえ、今、恭也殿に負けまして、今から二戦目です。シュランゲフォルムを使いますので、恭也殿の妹君は主はやてが居られる方に移動して下さい」

「シュランゲフォルムって！？シグナム、お前、何考えてんだよ！」

うちにはシュランゲフォームが何かは分らんけど、ヴィータが叫ぶのを見る所、一般人に使う物ではないのは確かやな。

「ヴィータよ・・・恭也殿はシュランゲフォームを用いても勝てるかどうか分からぬ相手。だから、私は全力全開で行く!!」

シグナムは叫び、私のすぐ横に刺さっているレヴァンティンを引き抜き、キョウヤさんに刃先を向ける。

「ふむ。良い気迫だ。シグナムよ、掛かってこい!!」

シグナムはキョウヤさんの妹さんこと、さっきのウェイトレスさんがうちのものと来るんを確認すると、キョウヤさんの方へとゆっくり近付き・

「参ります!!レヴァンティン!!シュランゲフォーム!!」

シグナムの怒涛の叫びに、レヴァンティンが呼応するかのよう激しく蒸気を吹き上げて、幾つもの刃がワイヤーで連結した鞭の様な刀へと姿が変貌する。

そして、キョウヤさんに一閃。

剣先は蛇の名にまさしくぴったりな、独自の動きでキョウヤさんに向かう。

予測不可能な軌道だが、キョウヤさんはボソツと口を動かす・・・

「神速」と・・・

瞬間、キヨウヤさんの姿がかき消えてって！？  
なんでやねん！？

あまりにも人間離れした速度に、ヴィータもザフィーラも驚愕する。  
シヤマルは先程の試合を見てたから、驚きは少なく、うちの隣で分析をしている。

ちなみに、ウェイトレスさんはカメラで捕らえきれておらずあたふたしながら試合を撮影。

「またか！？だが、今度は、そうはいかない！！」

シグナムのレヴァンティンの剣先が一気にユーターン、そして、ワイヤーと連結刃全体を使いシグナムを包むように防護壁を展開し、キヨウヤさんからの攻撃を防ぐ様にするが・・・

「臆したか？守りに徹して、俺から一本獲れると思ったか？それに一言言っておこう・・・俺には防御は通用せん。御神流最終奥義『  
閃<sup>せん</sup>』」

冷たい声、発信源はシグナムの後方。

そこには、先まで誰もいなかった筈なのにキヨウヤさんの姿。  
そして、次の瞬間に・・・

シグナムのレヴァンティンが真上に吹き飛び、シグナムの眼前には  
キヨウヤさんの木刀の剣先・・・

「勝負あつたな？」



## 第二十八話 信頼度の大切さなの・・・

そう、シグナムは負けたのだ・・・  
意図もあつさりと・・・

「はい・・・」

あまりの実力差にシグナム自身も意気消沈。  
恐らく、カートリッジや魔法を使ってもこの人には勝てない・・・  
そう、魔法すら使わないタダの人間に・・・  
そして、レヴァンティンが地面に落下した音と同時に、己の未熟さと無力さを自覚した。

「シグナム、今度は攻める戦いをしてみる。守りに徹せずにな」

「おい、もう勝負は完全についただろ！！これ以上は」

これ以上の試合は、シグナムが精神的に再起不能になる恐れがある  
と思った為、

反論しようとしたヴィータを、ウェイトレスさんが制止する。「大丈夫だから」と言つて・・・

「一言言つておこう。戦士たるものが恐れるのは、死んだと同義だ。  
先の戦いは俺の『神速』の前に恐れてたお前は、試合が始まる前から負けてたも同然なのだ」

「私が恐れてただと？」

「そうだ。だから、お前は全方位防御等と云う、自らの攻撃手段と

退路を無くすような真似を取ったのだ」

「私が恐れている・・・そうかもしれない・・・私は騎士として最もしてはいけない事をしてしまったようだな・・・」

そう言って立ち直るシグナム。

シグナムは再びレヴァンティンを構え・・・

「宜しく願います!!」

本日三度目の試合を開始。

シグナムはキョウヤさんのもとに一気に詰め寄り・・・

そして・・・

「踏み込みが甘いわ!!」

一撃で撃沈された!?

って!!手加減なしかいな!?

えっと、色々お兄ちゃんが、シグナムをボコボコにして空気が変わったけど、取り敢えずは自己紹介をしないと。

「えっと初めまして。私、高町なのはって言います」

「うちの名前は八神はやてで、こっちの子がヴィータや」

「ヴィータだ、よろしくな」

うーん、ヴィータちゃんが少し警戒気味だなあ……

お兄ちゃんが本気出し過ぎて警戒されてる。

でも、お兄ちゃん強すぎないかな？

幾らシグナムが魔法を殆ど使って無いと云えども、シュランゲフォルムまで使っているのに、赤子を相手するかのようにあしらう時点で、お兄ちゃんの強さが異常なのは一目で分かる。

前世の時に、PT事件やJS事件の時に手伝ってくれるようにお願いしたら、どれだけ楽に事件が解決してたやら……

特にガジェット兵に対してはお兄ちゃん是最強の気が……

あ、でも空を飛べないから、陸上戦限定になっちゃうか……

「そこで、ザフィーラや」

「ザフィーラだ」

ザフィーラに関しては無表情。面白くないなあ……帰りにスタライトブレイカーもしくは、こちらに来てから編み出した新技を撃ち込んであげたいくらい面白くない。

「俺は高町恭也だ。名字で分かるようになるのはの兄だ」

そしてお兄ちゃんの自己紹介。

すると、ヴィータちゃんとザフィーラの目が厳しくなる。

矢張り原因はヴォルケンリッター総大将のシグナムが容易く撃墜された事だろう。

『シャマル、ザフィーラ、シグナム。あいつをどう思う？』

むむむ、ヴィータちゃんが念話を始めたみたい・・・コンタクトはシヤマル、ザフィーラ、シグナムみたいだね。

はやてちゃんの名前を上げてないし、恐らく今後についての作戦会議かな？

でも、私にはただ漏れなんだけどね

『悪い方では無いが・・・この強さだ・・・万が一激突する事になったら、管理局局員百人を敵に回すより質<sup>たち</sup>が悪い』

うわゝ、お兄ちゃん凄い評価されてる。

でも、前世でシグナムの強さが、一般局員40人分だから、あながちオカシイ数値でも無いかも。

あ、私は記録は無いよ？

だって、私と向かい合った一般局員が、ミンナ逃ゲ出シタカラネ？  
記録測定の数日前の、ティアナへの仕打ちが漏れてたらしくて・・・  
取り敢えず、漏らした奴は、私の前に土下座して・・・アタマヒヤソツカ？

『ここはあくまで穏便に事を済ます為にも、喧嘩売っちゃ駄目よ？  
特にヴィータは』

『分かってるつつつの。でも、この男何者なんだ？』

『魔法は使った気配は無かったわ・・・恐らく、魔法とは異なる何かしらの力を持っていると思われるわ』

『なんだよそれ！！そんなん、聞いたことねえぞ！！』

妹である私も、知らないんだけど・・・

それにしても面白くない念話だなあ・・・  
ちよつとだけなら、悪戯しても良いよね

『恭也殿が用いてるのは肉体強化系だ。ザフィーラ、お前はどうか  
う？』

そうこう考えてたら、まさにHの神様が「今だ！！やれっ！！」と  
言わんばかりの状況を作ってくれる。

だから私は小学生名探偵の蝶ネクタイばりの声真似スキルを持つ魔  
法を発動。勿論、魔法は今即興で組み立てたなの  
そして、ザフィーラの声を真似て・・・

『ワンワン！！』

と、言ってみた。

『スマナイ、お前に聞いた私が馬鹿だったな・・・』

『まで、今のは私ではない！？』

当たり前にはザフィーラは否定。しかし・・・

『まあ、そうなるとは思っただけどよぉ・・・時と場合を考えろよ』

『保健所にぶち込むわよ？』

ヴォルケンリッターの皆様から総スカンピンを喰らう・・・  
この世界のザフィーラはどれだけ信用度が無いの！？

『では、この後も色々と探りを入れてみよう』

そうシグナムが纏めて念話が終了した。

さてと、私も同様に探りを入れるとするなの

「あの、はやてちゃん達はこの後暇？もし良かったら、遊んで行かない？」

「ほんまええんか？そんなら、お邪魔させて貰うな、他のみんなはどうなんや？」

ヴォルケンリッターの面々に尋ねるはやてちゃん。

ヴォルケンリッターの皆様も、お兄ちゃんの秘密に近づくチャンスと。

「では、お言葉に甘えて」 / 「お邪魔しますね」

と、シグナムとシャマルは願ってもない朗報に喜ぶ。

ヴィータちゃんはムスツとしたままなので・・・

「えっと、ヴィータちゃん。アイス有るけど食べる？」

「本当か！！」

<sup>アイス</sup>  
餌で釣る。

ちなみにアイスは、夏の定番スイカバー！。

と、云つても、今は夏ではなく冬の<sup>つむじか</sup>のだが、そんな事は気にしない。あと、「何時の間に時間軸がそんなに飛んだの！？」とか、そんな事も気にしちゃうダメだよ

こうして、私達ははやてちゃん達を家の中に招く事にしたなの。

後編に続くなの!!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

えっ？ザファイラはって？

勿論無視に決まってるじゃない

## 第二十九話　FF計画の始まりなの・・・（前書き）

只今、旅に出ております・・・

用のある方は、23日か24日に御連絡下さい・・・

あと、こんな投稿期間や長さの問題ある作品ですが、評価が300  
突破しました！？

ありがとうございます>>



## 第二十九話　FF計画の始まりなの・・・

「私、頑張る！！」

「その息や、なのはちゃん！！」

「あなたなら出来るわ！！」

私の決意に声援をくれる、はやてちゃんとシャマル。

「これが、私の全力全開なの！！」

「止める！！それは、幼き子供が使うには、精神に多大なダメージを与える恐れがあるぞ！！」

そして、悲痛な叫びをあげるシグナム。

「大丈夫。私を信じて・・・」

と、明らかに物語クライマックスな雰囲気漂う会話に、何事かと驚かれるやもしれないので、話を少し過去に巻き戻すなの・・・

私達ははやてちゃん達を家の中に招き入れ、私の部屋で現在は談笑中。

ちなみに男子禁制なので、お兄ちゃんとテキィラ・・・じゃなかった、青犬は居なかつたりもする

「それでね、フェイトちゃんに超ミニのメイド服を着せようかと試行錯誤中なの」

「あ、あの外人さんやな。ふふふ、ナイスアイディアや」

「流石ははやてちゃんなの。フェイトちゃんには、黒生地と白のふりふりレース一杯のメイド服に、純白のエプロン。そして、メイドカチエーシャで決まりなの!!」

「いや、うちとしては、メイドカチエーシャよりも猫耳帽子を推奨や!!」

「いえ、なのはちゃんとはやてちゃん。ここはバニーで行ってみましょう」

「なんてマニアックなのシャルさん!？」／＼く、そう来たか。  
流石は我が家の参謀長官」

とまあ、FF計画を練っていたりする。

あ、FFと云つても、サボテンが走り回ったり、プレイ中にカセツトを抜くことで、本来なら死ぬ仲間を死なせないバグ技が存在するあのFFではなく、フェイトちゃんふりふり化計画。略してFF計画の事なの。

明らかに小学生が話すような事ではない会話に、シグナムは苦笑い。ヴィータちゃんはアイス（スイカバー）を食べるのに集中。

そつえば、スイカバーの箱を買って付いて来るメロンバーって、好きな人が少ないから大抵箱の中に残ってるよね。

だからそれを防ぐために我が家では、箱では買わずに、スイカバー単体を大量購入してるなの。

「ほんなら、衣装の制作をせなあかな。でも、うちはあんまり縫い物は得意やないけど大丈夫やろうか？」

「大丈夫なの。こんな時のアマ ンなの」

飴玉、本、服とジャンル問わず扱う事で有名なアマゾ。

しかも、送料無料とかなり頼もしいなの！！

私はパソコンを立ち上げてア ゾンに繋ぎ、『メイド服』と検索をかける。

すると色物から至ってシンプルな物までがずらりと画面へと表示される。

「これがパソコンのネットショップちゅう奴か？色んな種類があるなあ・・・」

「どれにするか悩んじゃいますね」

普段の翠屋の手伝いのお金として毎月5000円貰ってるから、予算に関しては大丈夫なの。

なので、兎に角フェイトちゃんに似合いそうなふりふりを探すだけなの。

「メイド服風エプロンなんてどうですか？」

ページを下へと動かしていると、先ずはシャルさん。

選んだのはメイド服のようなエプロンで、明らかに裸の上に着用。そして、ふりふりと揺れるフェイトちゃんのヒップが、私の脳裏に！？き、際ど過ぎるなの！！

流石は大人の女、シャルさんなの！！

「は、破廉恥な!？」

硬派なシグナムは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「シグナムもこれを着て恭也さんにアタックしたら落とせるわよ!」

「な、何の話しだあ!？」

「あ、シグナムさんスタイル良いですもんね」

「我が家のおっぱい要員やしな。揉みごたえ最高やで？」

私が猫の目の様に軽く細め、シグナムの胸に視線をやると、シグナムはたわわに実った舶来物の南国果実を両腕で隠すように抱きかかえ、私より背を向ける。

しかし、あのサイズは、大人フェイトちゃんですら辿り着けなかった、未知の領域なの。

でも、今回は私がついてる。頑張ってフェイトちゃんの魔術ランクだけでなく、バストラंकをシグナム以上にするなの。

「なのはちゃん、こっちはどうや？」

次ははやてちゃんが選択。それは、スクール水着等の伸縮性抜群の生地で作られた、上下一体型メイド服。

今は胸の膨らみも小さいので、フェイトちゃんのボディラインの強調が難しいが、今後の成長が楽しみになる一品。

ナイス、エロスなの!!! 流石、はやてちゃん。じゃあ、私もシャマルさんもはやてちゃんにも負けないうな、かなりきわどい物を選

択しないと！！

そして、私が、口で表すには恐ろしいほどアダルトなメイド服を選択して、今に至るなの。

つまり、シグナムの使うとは、装着と同義なの。

「流石や、なのはちゃん。ほんなら、早速注文やね」

「時間指定にしとかないと、お兄ちゃん達に受け取られても困るしね えっと、お兄ちゃん達が居なくて私とフェイトちゃんだけの日は・・・」

私は携帯を取り出して、確認。

明後日の土曜日なら、私とフェイトちゃんしか居ないから大丈夫。

お兄ちゃんやお父さん、レンちゃん達も夜まで帰って来ないし・・・  
うふふふ・・・

私はお届け希望欄に明後日の午後一時を選択。

お支払い金額は、12600円と想像よりは安めに手に入った。

さて、後で振り込みに行かないと。

送料無料と云えど、代引き手数料315円は痛いからね。

「うふふ、明後日到着ね」

「楽しみやな」

と、盛り上がる。

だけど、私達は重大なミスを犯していたのだ・・・そして、それを商品が到着した時になって気付く事になったのだが、それはまた別のお話で・・・

注文する事で、話は一段落。

次の話題は何にするかで、悩んでいると・・・下から、激しい音が聞こえた気がした・・・

他の人を見ても、皆一様に驚いた顔をしてるので、幻聴ではないのは確かだ。

「下か・・・そういえば、ザフィーラと恭也殿は何をしてるのだろうか？」

上は男子禁制にした為、下のリビングにて会話(?)をしていると思われる二名。

だが、明らかに今の音は会話の音では無い。

机や椅子を動かすような音である。

そんなシグナムの疑問に、誰もが同じ考えなのだろう。

そして、どうするかと悩む事無く・・・

「よし、なら見に行くで」

と、はやてちゃんの鶴の一声で決定。

私達は、足音を立てずに一階へと降りて・・・

ドアに耳を当てた・・・

第三十話 R指定無いから、オチは分かってるけどねなの（前書き）

前回、活動報告でも書きましたが、恐らく見られてない方の方が多いと判断した為こちらを書く事にしました・・・

この度、学業に集中する為に、後期の間は『小説家になろう』のサイトに繋ぐ事を中止する事にしました。

と云うか、レポートの時以外でのインターネット接続すらも少なくなりそう・・・

ですが、小説を半年間も完全に放置は拙いと判断したので、アンケートの結果もあり、一定期間の特定の日に予約投稿する事にしました。

と云っても、あまり書いて無いんですけどね（汗）

こちらはシルフレと違い、携帯のメール機能を用いて執筆しているので、ちよつとした時に執筆出来るので、3月にはたつぷりと貯まってる、大量更新が出来るかも>>

まあ、『かも』なんであまり期待せずに・・・（汗）

### 第三十話 R指定無いから、オチは分かってるけどねなの

壁に耳を当てる。すれば、お兄ちゃんとザフィーラの怪しげな声が、聞こえてくる。

「中々、良い筋肉してるな」

「恭也殿の三角筋も中々の物だぞ」

「ふ、ありがとう。じゃあ、始めるとするか？」

「だな」

「ぐ、ザフィーラの・・・中々大きいな・・・」

「きよ、恭也殿のも・・・」

な、何の話をしてるなの！？

壁に耳を同じ様に当てるはやてちゃん達も顔を真っ赤にさせる。

但し、怪しげな会話を聞かせたらアウトな年齢な為ドアより離してるヴィータちゃんと、喜色満面アハロンで桃源郷にダイブしてるシャマルさんは別の反応だが・・・

しかし、私達の反応を無視して、二人の怪しげな会話は続く。

「じゃあ、行くぞ？」

「分かった」

何が行くなの！？何が分かったなの！？



ガチムチなの！？パンツレスリングなの！？

「ぐっ……」

「な、中々荒いな……」

「お前こそ、そんなに荒々しくしゃがって」

キヤアアアア！？R指定なの！！

しかも、その力んだ声とギシギシと音を立てる机は何してる音なの！？

「ナイス、エロス」

「あかん、禁断の恋や」

シャマルさん、嬉しそうに手をワキワキさせないなの！！

エロエロハンドはでっかい禁止なの！！

「ど、どうしたザフィーラ……もう終わりか？なら、ラストスパ  
ートを掛けさせて貰うぞ……」

「まだまだ、大丈夫だ……恭也殿こそ、そんなに汗をかいて大丈夫か……」

「こんなに激しいのは久し振りだからな……」

再び部屋から、荒い息づかい。

「は、は、は、は、は……」

そして反面、部屋の外では、顔を真っ赤にしたシグナムが、壊れたラジオの様に同じ言葉を繰り返している。  
しかし、それも二人の何か良く分からない行為の終わりに掛かった頃に、何かしらの衝撃がシグナムに加わったのである。

「破廉恥なあ！？」

と、シャウトし、ドアを蹴り開ける。

すると、そこには上の服を脱いだ状態で、アームレスリング腕相撲をするお兄ちゃんとザフィーラの姿。

まあ、こんな落ちたろうとは少しは思ってたなの！！

「ぬおっ！？どうした、シグナム！？」

「ふっ、ザフィーラ。勝負中に気を抜くとはな！！」

「しまった！？」

シグナム乱入に驚きふためいたザフィーラを咎めつつ、一気に勝負を畳み掛けるお兄ちゃん。

しかし、獣人相手に力で互角って、お兄ちゃん凄過ぎ！？

「ぐぬぬ・・・一生の不覚・・・で、シグナム。人の勝負を邪魔して、一体何事だ？」

かなり不服、否、不機嫌な顔のザフィーラが、シグナムをジト目で見つつ訪ねる。

「い、いやっ・・・そ、それはな・・・」

危ない勘違いでの突貫である。当然、口に出すのも阻まれる。

「うふふ、シグナムは、めるぽっ!？」

だが、そこで当然の如く公開しようとしたシャマルが、シグナムの俊足の一撃で、危ない悲鳴と骨の軋む悲鳴の合唱で、地面に沈没。ちなみに、それを見た私とはやてちゃんは合掌・・・

「な、何でもない!! 気にするな!!」

顔を真っ赤にして絶叫。何時もの冷静さなど微塵もない取り乱し様に、流石の二人もお口にチャックなの・・・地面に顔面部を埋没させて、高町家の床のカーペットを鉄分豊富な赤いペンキで染めているシャマルの様にならないように・・・

血って中々落ちないのに・・・このカーペットどうするの？

前もティアナの血が、私の部屋のカーペットに・・・おっと、これ以上は言ったら拙いね

皆の、私に対する印象が変わったら嫌だもん

「「そうか・・・なら良いのだが・・・で、大丈夫かシャマル?」」

「うふふ　アハハハハ」

「「うむ、大丈夫そうだな」」

いや、危ないから!?

血が出過ぎて、アドレナリンの分泌量が増えて、危なくなってるなの!!

「ほんま、シヤマルは元気やな」

はやてちゃん！？

「はやて、アイス食いたい。出来たら、苺か西瓜味の」

ヴィータちゃんも、アイス以外に考えるべき事があるでしょ！！  
しかも、血を見て、赤いアイスを欲するのは拙いなの！！  
常識人が皆無なこの空間。打開の為に、お姉ちゃん以外の誰か帰って来てー！！

そう願う物の、残念ながらそれは美由希フラグ。

なのはの願望を生贄に、天然レベル星五の美由希が帰宅する。

玄関から発せられる、美由希の「ただいま」に、なのはの頭の上を両の手に大根を持った妖精が「はあ、だいこん、だいこん」とグルグル飛び交う。

因みにネタが分からない人は、『キタキタオヤジ』を検索してね  
腰巻耄枝の爺の写真が恐らく出て来るから・・・

ちくしょーなの！！

### 第三十一話 最強フィアンセ忍ちゃん登場なの（前書き）

忍に関する説明はいらないと思いますが、簡単に・・・  
すずかの姉であり、吸血鬼であり、恭也の婚約者です

### 第三十一話 最強フィアンセ忍ちゃん登場なの

ちくしょーなの!!

私は心から、自分の不幸と作者を呪う声を上げ、お姉ちゃんが部屋のドアを開けるのを待つ。

部屋で、既に危ないテンションになっているシャルルを見ぬ振りして・・・

そして・・・

「恭也、遊びに来たよ」 / 「恭也様の嫁、忍様とメイドのノエルが参りましたよ」

すずかちゃんのお姉ちゃんであり、お兄ちゃんの婚約者である忍さんと、月村家のメイドロボのノエルさんがドアを本当に蹴り開けて入ってくる。

蹴り開けた際に、ドアが吹き飛び、笑い続けるシャルルに激突して完全に沈黙させる。

守護騎士プログラムだから、死にはしないと思うけど・・・大丈夫かなあ・・・

「げっ、忍・・・」

「そうだよ、恭也あゝ 愛しの忍ちゃんだよ」

「この果報者。ひゅ、ひゅ」

可愛く決めポーズを取る忍さんの隣で、お兄ちゃんを囁すノエルさ

ん・・・

あれ？お姉ちゃんの姿が無い？  
確かに声はしたのだが・・・

「あれ、忍さん。お姉ちゃんは？」

「えっ、ああ、美由希ちゃんは、玄関の鍵を開けてくれた後に、急用を思い出したらしくてね、先に上がっててくれて言われたの」

「決して、私に搭載されてる複声模写機能とピッキング機能を使った訳では無いのでご安心を」

うん、ノエル。わざわざ説明ありがとうなの・・・

高町家に不法侵入して来た二人は、部屋にいる面々へと視線をやる。そして、部屋の隅で沈黙するシャル、上半身裸で向き合う青犬とお兄ちゃん、

そしてシャル沈黙が理由で怯える沢山の女性陣・・・

「まさか乱交パーティー！？」

「違うわっ！！」

忍さんの思いつく先にあつた回答を述べるものの、明らかに違う為、お兄ちゃんと青犬が顔を真っ赤にして否定。

「このロリコンめっ！！」

「違うと言ってるだろうが！！」

「恭也が最近会いに来てくれないと思ったら、こんな小さな子達に

ご執心になつてたからなのね！！18歳過ぎた私はアウトオブ眼中で、食手も伸ばせないなんて！！」

と涙目で叫び、お兄ちゃんに手の届く範囲に有る物を次々と投げつける。

クツシヨン、時計、椅子と・・・

「落ち着け忍！！俺の説明を聞いてくれ！！」

「落ち着いてください！！別に恭也殿は何もしてません！！」

あ・・・シグナムう・・・援護しに行ったら駄目だよ。話がややこしくなっちゃう。

「むう・・・アナタ、誰？何で、恭也の家に居るの？」

「私は八神シグナムと言います。此度は、恭也殿とお手合わせをして頂き」

「どんなお手合わせよ！？ベツトの上でのお手合わせなら、私が居るから帰りなさい！！この泥棒猫めっ！！恭也をその魅惑的な舶来おっばい果実で誘惑したのね！！」

「つまり、恭也様はロリ巨乳が舌なめずりする程、大好きだと・・・

」

「ノエル！！俺の人格が問われるくらいにぶっ飛んだ意識は止めろ！！一ピコも当たってないわ！！それに、ロリはどっから湧いて出た！？」



ピコねえ・・・お兄ちゃんって、意外に単位とか雑学を知ってるよねえ・・・

「勿論、こんなに小さな女の子を囲ってる時点でペドフィリアと判断して、何が問題でしょうか？」

「問題大有りだ！！何もしてないのに、ペドフィリア扱いされてたまるか！？」

「ふむ。では、ペドフィリア予備軍の称号を差し上げましょう」

「勝手にしてくれ・・・」

あのお兄ちゃんを言葉で封殺するノエル。

これが、お姉ちゃんやシャマルなら何か言う前に肉体言語で封殺され返されてるなの・・・

「では、そうさせて貰います。忍様の婚約者でありペドフィリア予備軍の高町恭也容疑者様と、今後白昼堂々とお呼びすることにさせていただきます」

「長い上に、最後の容疑者は何だ！？」

「安心して恭也！！恭也が捕まっても、月村財閥が警察に圧力をかけて、無かった事にしてあげるから！！」

「警視庁の弱みはしっかり握ってますし、万が一月村関連の者を牢に入れた日には、バニングスと夢想に呼び掛けて、ありとあらゆる物を警察関係者の手に渡らないようにシャットダウンしますので」

うわゝ、流石月村財閥・・・某国ばりにする事が凄いな・・・

バニングスグループ、夢想財閥と並び、日本の経済界を牛耳る一族だけあって、その力は凄いな・・・

そういえば、月村財閥の娘が嫁ぐのはおかしいと騒がれて、私が逆行する前の時は、お兄ちゃんは婿養子として迎えられたんだっけ？不破、高町、月村とコロコロ名字が変わってるなの。

「俺捕まる前提で話すのは止めてくれないか？あと、サラッと恐ろしい事を言っな・・・」

「じゃあ、話を戻すよ？この惨状を、文中に『忍、好きだ。愛してる』の文字を入れて11文字で説明しなさい」

『忍、好きだ。愛してる』だけで11文字有るんだけど、忍さん？明らかに状況説明不可能な無茶振りをする忍さんにお兄ちゃんは・・・

「後は任せたぞ、なのは・・・」

リビングの窓ガラスをハリウッド映画のワンシーンの様に、体当たりして突き破って庭に脱出。

そして、靴も履かずに逃走を開始した・・・

「恭也さん、逃走したで？」

「恭也殿、ご武運を・・・」

お兄ちゃんの逃走行為に啞然とする一同・・・いや、青犬だけは敬礼してるなの！？

しかし、あの逃げ際の良さ・・・この様な事態が来ると想定してた

の？

「あゝあ、恭也が行っちゃった・・・」

「甲斐性なしですね。あの状況でしたら、『忍、好きだ。愛してる』と抑揚を込めて言いながら、懷から指輪の入った箱を取り出して差し出すくらいして欲しいですね」

「だよね。でも、恭也が本当にそんな事をしたら、偽者と判断して殴り飛ばしちゃうかも」

まあ、あの仏頂面と古臭い考えを持つお兄ちゃんに、そんな行為を求めるのは無理な相談なの。

「うーん、恭也が居なくなっただから、どうしようかしら？うーん、あつ、そうだ！！じゃあ、自己紹介でもしようか。私の名前は月村忍。恭也のお嫁さんです」

明らかに視線をシグナムに向けて釘を刺す忍さん・・・向けてる視線は当然「この女狐めえ！！」と云う敵意だ・・・

オマケに最後に自分が婚約者である事を可愛くアピールしてる！？

「あ、忍さん。恭也さんのお嫁さんやったんや。残念やったなシグナム」

「な、何がですか！？」

顔を真っ赤に否定するのは良いけど、それじゃあ肯定してるも当然だよ？

「む、新しいライバル参戦ね！？く、ロケットボインが相手じゃあ、普通サイズの私では分が悪いわ！！」

「お前も人並み以上だと思うぞ・・・」

シグナムには劣るが、十二分に平均以上のサイズを普通と言う忍さんに、貧乳のヴィータちゃんより突っ込みが入る。

え？「今の私も貧乳じゃん！！」と突っ込まれそうだけど、将来はちゃんと凹凸有りの カップだから良いの！！

あ、作者さん。個人情報関係でバストサイズには伏せ字入れてね

「考えが甘いわよ！！貴女の所の、ロケットボインの前では、私のなんて小さいに過ぎないの！！」

「だが、胸など無い方が、動きやすくて良かるう？」

青犬<sup>キジ</sup>も鳴かずば撃たれまい・・・

空気読めないザフィーラが、ぼそつと呟く・・・刹那・・・

「あら、女性ばかりの部屋に獣が一匹居たわね はやてちゃん、駆除して良い？」

私以上の般若が笑った・・・

第三十二話 それでも君達は僕の掌の上で踊っているなの（前書き）

久し振りの投稿です

色々と遅れてすみませんね><

シルフレは、暫く投稿は出来そうには有りませんが、こっちはちよつこちよつこ書いてた分が有りますので、取り敢えず2話同時に投稿しますね

### 第三十二話 それでも君達は僕の掌の上で踊っているなの

「勿論、構わんで。乳をバカにする奴は、太陽おてんとうさんとPTAが許しても、うちが許さん」

「主はやて!？」

「うふふふ、ノエル・・・ヤッテヨシ」

「畏まりました」

ストストとザフィーラの側へと歩み寄って、ザフィーラの肩を掴み、お兄ちゃんの突き破った窓ガラスを通って、外へと引つ張り出す。ザフィーラも必死に抵抗してるみたいだが、ノエルの力に勝ててないみたいだ・・・

そつえば、ノエルって忍さんからロボットって聞いてたけど・・・。獣人のザフィーラより力が強いとは・・・

力だけなら、ヴィータちゃんよりも強いザフィーラを圧倒的な力で倒す、お兄ちゃんとノエルさんが居たら、簡単に守護騎士どころか、事件に介入して来ると思われる管理局のクロノやユーノ君を鎮圧出来そうだね

まあ、今の私なら、アースラ程度なら簡単に沈めれるけどね

なんて事を、クロノやユーノが恭也やノエルによって既にシバかれた事をつゆ知らず思うなのは。

だが、それによって、彼等の実力やデバイスがなのはが想像する数段上になって居る事は、彼女には知る由もなかった・・・

場所変わって、アースラより・・・

「今、第九十八管理外世界地球を中心に、魔術師や魔力生命体のリ  
ンカーコアの魔力を奪われる事件な多発。その為、我々がジュエル  
シード回収と平行して担当する事になりました」

ああ、もう闇の書事件かぁ・・・

結局、まだなのはどこか、フェイトすらも会えてない・・・

会えたのは時空管理局とアルフと恭也さんだけ・・・

というか、恭也さんが邪魔過ぎるね。

なのはの所に行こうとする度に狙ったかのように現れて追い払われ  
るし・・・

しかも、最近じゃあ、クロノが打倒恭也さんにお熱だし。

だけど、流石になのはも今回の一件には大きく介入してくるだろう。  
ジュエルシードと違って今回の事件ははやての命に関わる。

問題はどの様に介入して来るかだ・・・

「これが今回の魔術師襲撃事件の際の襲撃を受けた魔術師の位置で  
す」

淡々とモニターを操作して、事件の説明をするエイミィの話なんぞ、  
なのはの事で一杯のユーノは聞く耳すら持たず。

恐らく、闇の書の完成を手伝うのは間違い無いだろう。

ただ、どの様に完成に関わって来るかだ・・・

候補として考えられるのは、リーゼロッテ姉妹率いるグレアム提督  
の裏での援護・・・

管理局どころか僕にすら姿を見せないのだから、管理局に関わりた

く無いのは簡単に見て取れる。  
だからこそ、自分の姿を見せずして解決出来るこの方法を選ぶだろう・・・

だが、ここで問題が発生する。

グレアム提督が望むのは、闇の書とその主の永久封印だ。明らかにこの点でなのはと考えが食い違う。  
完成後になのはがどの様に動くか？

「あゝ、ユーノ君？」

もし、ここで姿を表せば、必然的に管理局と関わる羽目になる・・・  
といっても、既にプレシアとの戦闘で、第九十八管理外世界にエース級の魔術師の存在があるという事は管理局にばれてるけどね・・・  
まあ、まだなのはとバレた訳じゃないから、良いのかな？

「ユーノ君、聞いてますか？」

さて、ここからの僕の行動は、闇の書完成の為に、管理局を密かに誘導する事だ・・・

「おいつ、ユーノ」

必死に思考を巡らせていると、クロノが僕の肩を叩いて邪魔をしてくる。少しイラッとしたので、魔法砲撃を撃とうかとも思ったが、流石にアースラの面々の前なので攻撃は控えた。

「ごめん、ちょっと考え事をして・・・どうしたの？」

「エイミィが呼んでいる」



「えっと、ユーノ君はこの資料を見て、何か思い浮かぶ事はある？」

僕はサツと前方のスクリーンに映し出される資料を見る。

大半が前に見た資料と同一だ。

唯一違う場所と云えば、襲撃される可能性の有る人物欄になのはの名前がなく、謎のSSSランク魔術師と書かれてる点だけだ。

さて、これからどう誘導しようかねえ・・・とりあえず、管理局の局員には悪いけど蒐集対象になってもらおう。

「そうですねえ・・・襲撃された魔術師に関する資料を見せてもらえますか？あと、襲撃された時間の一時間前に何をしていたのかも」

「襲撃された魔術師のデータと行動？分かったわ」

スクリーンの襲撃地点や襲撃された魔術師の名前一覧が消え、次に僕の要求するデータが映し出される。

確かシグナム達は魔術師の使った魔力を探知して魔術師を発見してた筈だから・・・

ビンゴ！！案の定、襲撃された魔術師は襲撃一時間前には単独任務や、自主訓練中である。

「成る程。このデータから見て分かりますが、襲撃を受けた魔術師は皆、襲撃される前に何かしらの魔法を行使してます。つまり、敵は術者が魔法を発動したのを感知し、襲撃に来てます。なら、敵を誘い出すのは簡単かと」

「つまり、罠を使うと・・・」

「うん・・・」

僕の肯定で場が静まりかえる。

味方を危険にさらす大胆な作戦だ。アースラ陣のこの反応は予想はしてただけ……

「囷作戦は構わないが、問題は誰が囷をするかだな」

だが、真面目すぎるが故に合理的な考えもするクロノだけは、僕の読み通り当然反応が異なる。

しかも、執務官の地位を持つので、発言の影響力もそこら辺のオペレーターとは天と地の差がある。

言い方は少し悪いが、扱いやすい上官だ。

「僕とアルフがやる。クロノ達は犯人が接近して来て戦闘に入ったら、僕達と犯人を包むように結界を展開して、戦闘に自身のある魔術師のみで援護に来てくれ」

「君とアルフだけで大丈夫か？僕も一緒に居た方が……」

「いや、駄目だ。囷の人数が多いと逆にまずい」

そして、何よりも僕の作戦が……

「敵に感づかれやすいと……ならば、僕と君の方が良いと思うのだが？アルフの力は本来の主が居ない今では、戦力になるかも怪しい」

「誰が戦力外だ！！フェイトが居なくても、私は戦える！！」

クロノの反論には、気の短いアルフが当然噛み付く。

そう、僕の読み通りに……

なんか、僕の手の平でみんなが騒いでるのを見ると、少し悪役になった気分だよ・・・

「いや、クロノ。アルフには使い魔の状態である犬の姿をとってもらう。そして、僕は、敵に魔力をだだ漏れにして、犬の散歩をしている子供を演じる。恐らく、敵は怪しむ筈だから、先ず近くの探知をしてから僕を襲撃すると思う。だから君達は」

「転送用魔法陣だけを設置して、敵が罠にかかるまで待機と・・・」  
僕の続けようと思った通りの事をクロノが代弁。

「そうだ。そして、作戦の実行は明日にしよう」

「明日？やけに急な話だな」

「地球にはクリスマスというイベントがあつて、12月に入ると盛り上がりを見せる。姿や証拠を見せない犯人が、そんな人目につきやすい最中に暴れたりはいしないだろう？」

「成る程・・・では、この案に反対の人間は居るか？」

アースラの人間は当然手を挙げない。

自分に被害が及びさえしなければ、一番最良の案を選ぶ筈だ。

そして、僕とアルフは民間協力者であり、管理局の局員ではない。だから、万が一の事故が起きても、手駒を減らすことはない。

だからリンディさんも、こんな危険な作戦に対しても沈黙している。

「では、本案で明日に作戦を実行する！！」

さあ、僕の作戦もスタートだ・・・  
なのは、待っていてね・・・

### 第三十三話 一家に一台は必需品なの！！

久し振りにはやてちゃん達とお話したな〜・・・

おっと、余韻に浸ってる場合じゃないね。

そろそろ、シグナム達の動きがより活発になる筈。

そして、明日は私が襲われた日・・・過去に来てから、もう半年も経ったんだ・・・

さて、今回は魔力の制御練習をしてないから、ヴィータちゃん達に認知されてないけど、恐らくは高い魔力を発すれば気付く筈。

でも、気付かせはするけど、そう簡単には魔力を蒐集されるつもりもないし、正体を明かすつもりもない。

裏で暗躍したグレアム提督が、闇の書を完全封印する為にはやてちゃんの後見人になったことは前世で教えて貰ってる。

だから、過去に私が変な介入をしたとしても、グレアム提督の作戦停止は絶対にあるえない。

今回はこのグレアム提督の作戦を密かに補助して、最後の最後ではやてちゃんを奪還し、闇の書より解放する。

闇の書は、防衛プログラムを破壊すれば解決だが、それでは初代リインフォースが消滅してしまう。

だから、今回は代替物にリインフォースより防衛プログラムを移し、代わりに消滅させる。

代替物は・・・

うーん、思い浮かばないから、取り敢えずザフィーラってことにしておこう。

もし、思い浮かべば、ザフィーラ生存ルートが確立される訳で

その時魔性の女の台詞に、ザフィーラに悪寒が走ったとか走らなか

ったとか・・・

私の介入時の格好は、リーゼロッテがしてた物と同じ格好。理由は特に無いけど、前史ではグレアムは最後に自分が犯人である事を、一部にしか話さずに管理局を自主引退する。

クロノ君やリンディさんも事を荒立たせずに、終わらせたい筈だから、出来る限り三人目の仮面男の存在に、事件後は目を瞑るはず。これでバッチリ

そういえば、リーゼロッテが偽装してた魔力光の色って何色だっけ？確か群青色だと思うけど、間違えた日には、仮面男の複数存在がバレてしまう・・・

まっ、いっか

グレアムさんが、きっと闇の書の覚醒までは補修してくれると思うし

この時にグレアムの背筋がゾクゾクとしたとかしなかったとか・・・元管理局の白い悪魔は伊達じゃない・・・

「ザフィーラ、主は眠られたか？」

尋ねるわ、烈火の将・・・

「ああ・・・」

応えるわ、蒼き狼・・・

「よっしゃあ、んじゃ、今日もページをがんがん埋めるぞ」

張り切るわ、紅の鉄騎・・・

「みんな気をつけてね。これ、今日のカートリッジ」

気遣うわ、風の癒し手

我等が四人が、闇の書の守護騎士。

そして、主八神はやてを命に代えても救うモノ達也！！  
そして、彼等は転送魔法を発動し、暗闇の部屋を発<sup>た</sup>った・・・

うふふ・・・はやてちゃんちより、転送魔法の発動を探知、移動先は海鳴公園付近のビルの屋上。

さて、私も行くでしょうか？

私は隣で寝てるフェイトちゃんを起こさないように、ゆっくりと起き・・・

「あれ、にゃのは、どこ行くの？」

あれ？起きた！？

「ちょっとお手洗いにいくだけだよって、寝言か・・・」

フェイトちゃんの方を向くと、可愛い笑顔で寝てるし・・・  
確かに、本当にフェイトちゃんが起きてるなら、にゃのはなんて言わないしね・・・うう、こんな時にレイジングハートがあれば、さっきのにゃのは発言を録音

出来たのに・・・やっぱり、デバイス欲しくなってきたなあ・・・録音、録画、多言語対応辞書、インターネット機能、データ通信機能に地図機能と一家に一台!!

あ、そうだ。現場に居る局員のストレージデバイスを略奪しよう  
管理局局員用デバイスの初期化とかのやり方はしっかりマスターしてるし

クロノ君のS2Uとか待機中なら財布に入るから、持ち運びにも優れてるし、アクセサリじゃないから目立たないし良いよね

レイジングハートは、20年愛用してた相棒だけど、球形なのが駄目なんだよね・・・

まあ、手近の人から略奪するから、良い子と巡り会える事を祈ろう

さて、行くよ・・・はやてちゃんを助ける為に・・・

私は部屋の隅に歩み、前もって作っていた転送魔法用の魔法陣を踏み・・・海鳴公園の林の中に跳んだ・・・

時刻は夜の11時と、公園には人っ子一人と居らず、フクロウの鳴き声が非常に不気味さを醸し出している。

そして、更に不気味さを出しているのが、公園の地面に刻まれている円形の魔法陣・・・

これは・・・ミッドチルダ式の大規模用転送魔法陣・・・

何故、こんな物がここに？

まあ、大体は予想つくけど・・・

シグナム達はベルカ式だから外れる。

グレアムの所は二名で行動するから、こんな大規模を使うメリットがない。

と言うことは、残るはアースラ。

だけど、こんな所に魔法陣を何故書いてるの？

まるでこの近辺にシグナム達が出現するのを知ってるかのように・・・



・  
私が魔法陣に悩まされていると、公園の中心にて魔力反応が発生したのを感じする・・・

そこで、私は魔法陣の存在の謎が解明出来たのだ・・・  
管理局がしようとしてるのはおとり作戦。

そして、シグナム達がおびき寄せられたら、一網打尽にするつもりだろう。

って事は

この姿で長居するのも拙いから、早く変身魔法を使わないと

変身魔法の呪文って何だっけ？

リリカルまでしか覚えてない・・・

まあ、あれは気分的な物だから別に適当で良いや

『ぴるぴるぴるぴるぴる』 って、叫んだとしても変身できない事も無いしね

なんでも出来ちゃうバット、レイジングハートオ

「リリカル・トカレフ・キルゼムオール」

取り敢えず、肉体言語を得意とする魔法の国のお姫様の変身呪文を拝借する事に

私の体を白いジャケットと青いズボンのバリアジャケットが包み、最後に顔にお面が付けられる。

さて、シグナム達が公園で発せられている魔力に惹かれてやって来たのと、地面の大規模用転送魔法陣が発動し始めたので、私も動くでしょう・・・

私は右手に大量の魔力粒子を収縮させ始めて、手の平を、魔法陣より今まさに出てこようとしている局員達の方へと向ける。  
そして、局員の姿が見えた刹那・・・ワタシハハナッタ

### 第三十四話 新しい相棒なの（前書き）

はい、半年ぶりです（汗）一切言い訳はしません（汗）  
普通になのは以外にハマってて、作品制作を怠ってました（汗）  
あまた マギ力を完成させたら、シルフレと一緒に再び更新を頑張  
っていききたいと思います><

（追記）

なんで、デバイス名がこんな事になった（笑）

### 第三十四話 新しい相棒なの

「大変です！！ 第二戦闘班の転送陣付近で大規模魔力反応が発生  
！！」

艦内のモニターに急に表示された文字を見て、一期では、名前すら与えられなかった局員Aが声を荒らげる。

「何ですって！？ 今すぐ局員の転送を中止して！！」

局員Aの報告に、リンディは大慌てで転送の中断を命じるが……

「駄目です！！ もう間に合いません！！」

既に転送は開始されており、途中中断が出来ない段階となっているため、転送陣に居た局員たちの運命を変える事は不可能……

そして、数秒後……

『『『『ぎゃあああ！！』』』』

転送された局員達の苦痛により、無理矢理発せられる叫びが艦内のスピーカーより響き渡る……

『こちら第二戦闘班！！ 転送と同時に攻撃され、部下四名がやられました！！ 敵は一名！！ 交戦開始します！！』

勿論、皆が皆攻撃を食らった訳でなく、何名かは回避や防御でかろうじて急襲を防ぐ。

そして、敵と臨戦する旨をリンディに告げる。

「了解しました。エイミー、第二戦闘班の交戦画像をモニターに！」

「分かりました。モニターに表示します」

エイミーの指がタッチモニターの上を素早く這い、交戦中の局員達のデバイスと情報リンクをして、モニターへ交戦の画像を映し出す。

そこには、仮面をつけた謎の男に、圧倒的な力で蹂躪される局員の姿が……

地面にはバリアジャケットが無惨にも破られ気絶した局員の姿。

敵が非殺傷指定の魔法を使っているので、外傷見られないのがせめてもの救いだ。

「敵推定魔力量1000万！！ SSS級魔術師です！？」

恐らく、以前の二人のSSSランク魔術師のどちらかね……反応以降ジュエルシードの回収時に妨害等に来てないから、管理局と敵対してたわけではないのは確か……そして、今回の事件で初めて戦闘を挑んできたことから推測するに……

あの魔力を略奪してる魔術師の仲間なのはまず間違いない。

そして、彼等が半年前からここ海鳴市に居るということも……

つまり、本当に管理局と敵対するなら半年前から敵対してくる筈向こうは好んで敵対してる訳ではない？

それか、この魔術師襲撃による魔力略奪の果てに何か目的が？

「第二戦闘班は、第一戦闘班が他の犯罪者の捕縛に成功するまでの時間稼ぎをお願い！！ それと、結界魔術師は、クロノとユーノさ

んと第一戦闘班と犯罪者のみを包むように結界を展開！！ クロノ、ユーノさん、第一戦闘班の皆さん。第二戦闘班がSSSランク魔術師の襲撃を受けてますので、迅速に捕縛して、援護に向かって下さい！！」

『『『『『『『『了解っ！！』』』』』』』

第二戦闘班の最高魔力ランクは部隊長のBランク。

他の隊員はCからDランクかつ今年局に入った新人ばかり。

相手がSSSランクでは、多勢に無勢でも、分が悪い……

第一戦闘班なら部隊長のAAランクが居るから、まだ違ったかもしれないけど……

既に事件は起きており、今は悔やむ事よりも優先すべき事がある。リンディは唇を強く噛み締め、戦場で苦戦を強いられる隊員に指示を出すのであった。

アースラにこの時期搭乗する局員は戦闘及びオペレーター含めて最高がAA、平均C程度だった筈。ただし、リンディさんとクロノ君を除く……！

そして、今の彼等に私を倒す力はない。

でも、問題はシグナム達、ヴォルケンリッターなんだよねえ……

管理局のアースラ局員は、前世とは異なるおとり作戦で攻めて来た。

オマケに結界魔術師による結界で、結界外に出れないように閉じ込められたし……

闇の書のページは、私からの大規模蒐集がないから、ページの埋

まり具合も悪く、無けなしの魔力で、魔力解放による結界破壊を行う気にはなるまいし……

しょうがないね……

時間短縮の為に、デバイスの選択は諦めるなの。

だから、デバイスは隊長格の人が持つてる奴を頂くことにするの。デバイスが多弁に術者と会話してる点から、待機状態の形状は分らないけど、インテリジェントデバイスなのは確かなの。

ただ、通常状態は、日本刀に似た片刃の刀というのが玉に瑕だけど……

お兄ちゃんじゃあるまいし、私は刀なんて使えないしなあ……

「余所事を考えてる隙があると思うなよ!!」

私が余所事を考えていると、突っ込みと共に隊長格の魔術師が、まるで本当に地面の少し上を滞空して滑るかのような摺り足を披露しつつ、刀を私に向かって振り下ろしてくる。

見事な歩法だが、だからどうしたの？

残念ながら、速度ではフェイトちゃんどころかスバル以下。技術では、シグナムどころかエリオ以下。

イジメガイデやサンドバックグアイデハ、ティアナ……ゲフンゲフン

取り敢えず、ガジェット以下の雑魚敵なの

私は振り下ろして来た刀の刀身を側面より裏拳を当てて、私に直撃する筈だった軌道をずらす。

そして、一撃を難無く回避されて呆気にとられている敵の腹部に拳を当てて……

「スターダストフレイカー  
星屑粉碎ああ！！」

スターライトフレイカー  
星光粉碎をゼロ距離かつ無詠唱で放つ必殺技を放つ。

ゼロ距離での使用なので、魔力を飛ばすために圧縮する必要だった過程が省略された事と、J S 事件以降に、ミッドチルダの技術上昇により私の総魔力量が上がった事と、逆行前のティアナの犠牲のお陰で実現化した一撃必殺！！

この一撃を喰らったら、非殺傷指定でも『GO GO H O K E  
N S H I T U ！！』なの！！

それが、打たれ強さに定評のあるザフィーラやティアナであつても！！

ヤバい、止まらない止められない

「アベシっ！？」

腹部に突き刺さる筈だった一撃が、うっかり手が滑って顔面に炸裂。

いやあ、何で腹部に拳を当てたのに、顔面に移動してるのかなあ、いやあ、うっかりうっかりなの

直接敵魔術師の内部に魔力が吸い込まれ、私の群青色の魔力光が、体の外に出ようとするので、お湯が沸騰したヤカン宜しく、魔力の光が鼻や耳の穴、更には目から飛び出す。

これが、管理局名物ミッドチルダ式ふぐ提灯なの！！  
しかも、色々とネタなやられ台詞を吐いたので。

「オマエハモウ、死ンデイル」

と、死兆星を召還すると名高い星魔導師ケンシロウの決め台詞をオマケする。

ふっ、決まったなの。



私が隊長格の魔術師を討伐うちめくさせると、他の隊員どうまいが一斉に悲鳴を上げる。

まあ、私はそんなのを一切気にせず、可哀想にもこの寒い季節に、地面に転がっている隊長格の魔術師が持っているデバイスを手に取る。

「What is your name? (名前は何か?)」

手に取ったデバイスから、私にかけられた最初の言葉は名前に関してだった。

恐らくは、アースラに情報を伝えるためだろう。

「そうだな……勇者王と言っておこうか……」

偽名臭バリバリな名前で答える。

「OK. Your name is good. Ah…… My name is Rahatt haherev hamitohapefet. Call me Rahatt (そうか、よい名前だな。我が名は、ラハット・ハヘレヴ・ハミトウハペヘットだ。ラハットと呼んでくれ)」

ラハット・ハヘレヴ・ハミトウハペヘット?

確か第九十八管理外世界の神話上に出て来る武器の名前で、旧訳聖書に出て来る炎の剣だったはず……

ってどうか、勇者王が良い名前ってどんな感性してるなの!!

「My master is stylized human form because there is no very fun. But you will certainly nev

er bore us . umm . . . . Do you take  
my Lord ? (我が主は形に嵌った人間故に、非常に面白味がない。貴殿なら、きっと我を退屈させる事もなかるう。どうだ、我が主にならないか?)」

元々略奪する気満々だったこちらにとってみれば、関係を気付くのが大変なインテリジェンスデバイスと、何もせずに相性を考えると、非常に渡りに船だが……

だが、これがデバイスの演技の可能性も否定できない。インテリジェンスデバイスは機械的では無い故に、その心配性が発生する。

「ふん。俺が、貴様の言葉を信用できると思ってるのか?」

『H m m . . . . T r u s t ? O K , T a k e t h a t . 』ふむ、信頼か。なら、これでどうだ?」

私の意志とは別に、デバイスの刀身が魔力で輝き始める。驚いたことに、このデバイスには自身の意志で魔力を集めて使用する事が出来るようだ。

この特徴を持つのは、私を知る限りではユニゾンデバイスか一部のロストロギアだけである。

『F r a m e ( 炎 ) 』

そして、ふぐ提灯に一時的なっていた隊長格の男、つまり元主に向かつて躊躇いもなく、刃状のスフィアを放つ。

その一撃は、隊長格の男のバリアジャケットを容赦なく切り刻む。しかも、殺傷指定で……

『A r e y o u O K ? M y n e w L o r d ? (これで、

どうだ？私の新しい主よ？）  
『

元主との決別を、私の眼前で行い、満足げに訪ねてくる。  
これが彼なりの味方という証明なのだろう。

「面白い。なら、お前を使ってやろう……今から、もう一つの敵部隊へと斬り込む。貴様の实力を見せてもらおうぞ」

『Yes my lord.（御意）』

この世界での新しい相棒を手に持ち、シグナム達が閉じ込められている結界へと向かって……

私は飛び立つ……

### 第三十五話 勇者王参上（前書き）

けんさん 見参、推参、参上の意味の違いを調べたところ。

見参は「偶然通ったから、こいつら殺つてやるです」 〓 偶然やつて来た

推参は「こいつらを殺りに来たです」 〓 狙つてやつて来た

参上は「こいつらを殺る手伝いに来たぜ」 〓 助けにやつて来た  
みたいな感じがらしいです。

ですので、味方の救援に向かってやって来た場合は、参上が一番良いみたいです。

### 第三十五話 勇者王参上

「御前達は何なんだよ!!」

「時空管理局だ。君達を傷害罪及び公務執行妨害の罪で逮捕する」

感情的になり、熱く叫ぶヴィータに淡々と罪状を告げるクロノ。

逆行前と比べ、今回の僕達はデバイスを始め、魔力量、戦闘経験が格段に増している。本来なら、互角か押されてしまう筈の実力差も払拭し、本来では有り得ない僕達が圧倒的優位な立場へと世界が書き換えられる。

恭也さんは、僕の進む道を阻む存在だけど、少し感謝しても良いかなと、こんな立場に立つてみると思ってしまう自分がいる……考えてみれば、近接戦闘の訓練(?)は彼でやってたようなものだし

……

「私達は止まらない!! 主を助ける為にも!!」

僕がクロノとヴィータを観察していると、僕の捕縛魔法を力ずくで破壊したシグナムがレヴァンティンの切っ先を僕に向けて特攻を仕掛けてくる。大人しく捕らわれたままで居てくれたら助かったんだけど……まあ、この世界では初見の彼女達には僕の思惑は分かるわけがないから、それが一番シグナムが行うと考えられる行動かな

……

しょうがない、怪我させない程度に威力を落とした一撃で暫く眠っていて貰おう。

「レイジングハート!!」

『ロードカートリッジ』

「私達と同じベルカ式カートリッジシステムだと!？」

「悪いけど、僕にも叶えたい願いがあ。君達には決して悪いようにはしないつもりだ。だから、今は……大人しくしていて欲しい」

レイジングハートの矛先をシグナムへ向け、カートリッジをロードしたことで、魔力エネルギーが満ち溢れたデバイスへ、発射命令を……

「デイベイン・バスター!!」

下した……

本来なら僕の一撃はシグナムに命中する筈だったが、大規模結界が破壊される音と共に現れた、御呼びでは無い闖入者によって防がれる。

仮面を付けた青髪の男……そう、グレアムの使い魔のリーゼ姉妹に……

まあ、これも予測の範囲内か。グレアムの目的はヴォルケンリッターとは違つと云えど、その通過点である夜天之書の完成までは一緒だからね……

今相手にしてるのは、強力な魔力障壁を展開したから、アリアの方かな？

ロツテなら、シグナムを抱えて躲すか、発射前の僕を攻撃して防ぎそうだし。

「貴方は誰ですか？」

例え相手の正体を知っていても、この世界では初めての出会い。だから、名を問い掛ける。

まあ、恐らく無言で攻撃をして来るだろうけどね……僕は攻撃を防ぐ態勢に入り、何時攻撃されても良いようにと身構える。

だが……

「我が名か？ ふっはっはっは！！ 我が名は悪の権化鬼畜王だ！  
！ 管理局の愚民め、私の前に五体倒置してひれ伏すがよい！！」

返事が返って来た……

物凄いノリノリで、物騒な偽名を發した……

顔半分を手で覆い隠し、酔狂なラスボス的台詞に御満悦。

一体、グレアムのプランに何が有ったのだろう……僕が介入したのが原因なのか？

僕は正直この展開に戸惑いを隠せずにいる……勿論、助けられたシグナムもポカーンと開いた口が塞がってない。

「む？ 何かセリフを間違えたか？」

『Although it thinks that words  
are flying away before it……Do  
es it say, Is your name Yusa  
ou, isn't it? (それ以前に、台詞がぶっ飛んでる  
と思うが……というか、勇者王ではなかったのか?)』

「硫酸に浸けるぞ？」

『Oh, I will be quiet. (黙っておこつ……)』

…）  
』

自ら生み出してしまった無言の空間に疑問を抱き訪ねると、それにデバイスが返信する。

って、デバイス？

何で使い魔の彼女達がデバイスを使ってるんだ？

次々と浮上する疑問の大群に頭を痛めつつ、僕は決して前方の仮面の男ことアリアから目を離さない。

いや、離せなかった……

にやはは、ユーノ君に会うのは久しぶりだなあ

結局、あそこで私がユーノ君の呼び掛けを無視しても、大丈夫だったみたいだね

魔物に食べられてないかと心配で御飯も喉を通らなかったんだよ

……

ほ、本当だよ！？ 決して、フェイトちゃんを愛でるのに夢中で、存在を忘れてたとかじゃないよ！！

「闇の書の騎士よ、今は私に任せて、他の三人も連れて行くがよい……今の状態では魔力の蒐集もままなるまい」

「忝ない。だが、聞きたいことがある。何故貴方は私達を助けるのだ？」

「私とお主等の目的が一致しているとだけ告げておこう。彼女の死は私も見過ごせない」  
やがみはやて



「何故それを知っているのか聞いたいたが、今はそんな悠長にしている暇もなさそうだな。この場合は感謝する」

「しっかり、感謝しろ。その代わり、謝礼として次に会ったら乳を揉まゲフンゲフン……何かを要求するやもしれん」

おっと、うつかり本音が出かけてしまったなの。

「今、非常に問題発言をしたような気もするが……この場合は甘え失礼する。撤退だ！」

シグナムの言葉に苦戦を強いられていたヴォルケンリッターの面々は、すぐさま相手に大技を放ち、相手が怯んだ隙を利用し撤退。

管理局局員の頑張つて張った結界は、年末の障子の張り替えの際に穴を空けるノリでビリビリと割いて破壊してるので、彼女達が逃げるのには支障をきたすことは一切無い。

穴の空いてない障子に手を突っ込んで穴を開けるのって、プチプチを潰すみたいに何か気持ち良いよね

北斗百裂拳アタタタタタって言いながら、次々と障子に穴を空ける気持ちよさは来るモノが有るよ

おっと、会話がかなりズレータね  
ヴォルケンス

獲物を逃がした元凶である私に一齐に視線が集まる。ふっ、何て罪作りの女なの

リアル罪作りをした私へと杖を向ける魔術師達の総数は20人弱。まあ、クロノ君とユーノ君以外はマリオで云うクリボー、ドラクエで云うスライム、ゼルダで云うデクナッツ的ポジションだから、戦力としては数えるまでもない。

恐らく、スターライトブレイカーの余波で撃墜出来そうだし。

「君は自分が何をしたのか分かっているのか？」

早速余波でやられそうなスライムAが話しかけてくる。しかも胸にジャラジャラと付けた勲章をアピールしながら。

普通の犯罪者なら勲章の多さで怯むと思ったのだろう。処がどこい、元局員の私には勲章の意味はバツチリ

虚仮威しも大概にしやがれなの

大半が私が入局1年以内に授与されたものばかりで、犯罪者逮捕50人やら、マークテストで8割以上だとか……あとは被災者救助の勲章かな？

まあ、どれもこれも普通にやってたら貰える物ばかりである。

「ふむ。目の前で多勢に無勢で圧されていた魔法使い達と犬一匹を助けたただけだが？」

「奴等は法を犯す犯罪者だ。その犯罪者相手に大勢の何が悪い？」

「主に御前の顔かな？」

「ぐぬぬぬ、犯罪者風情が言わせておけば！！ 引捕らえろ！！」

その号令を皮切りに局員が動こうとするが……

「待てっ！！」

制止する声がその号令の持つ命令を上書きした。勿論、制止命令を出したのは現場で最も権力を持つクロノ君。

「敵は第二部隊を全滅させ、一人で結界班の結界を破壊した魔法使いだ。ここで闇雲に衝突しても、僕達も同じ目に会っただけだ。君の

目的は何だ？」

矢張り、クロノ君は冷静だねえ　でも、それ故に先の行動が読みやすい欠点も有るんだけどね？

さて、目的ねえ？　何て答えようかなあ？

ちよつとRPGのラスボスっぽく言ってみるなの。

「私の目的は唯一つ、全ての虫に等しく苦しみを与え、我を断罪せしめん輩を死へと誘う事だ。私にはそれを可能とする力が有り、貴様等には我に抗う術は無い。さあ、諦めて五体統治して平伏すが良い」

私のラスボス顔負けの台詞に、局員達はこの世の終わりを目の当たりにした顔を……

「ジェノサイドプレイヤー！！」

しないので、何かムカつくから一撃を放つ。因みに技名は変だけど、術式はスターライトブレイカーと同じ物だよ

不意を突かれた局員の大半は暴虐の一撃に、台風に吹き飛ばされる木の葉の様に次々と悲惨な姿となり果て、地面へと自由落下する。

「いきなり、何をする！？」

私の八つ当たりの意味が理解出来ないクロノ君が驚き、S2Uの改良型の矛先を向ける。

驚く事にS2Uには、ベルカ式カートリッジシステムを既に搭載している。正史ならば、まだまだ後になってからと云うか、クロノ君はベルカ式カートリッジシステムは使わない筈なのに……

因みにその変化はユーノ君のレイジングハートにも同じ事が言え

た。

この時点でレイジングハートがエクセリオンになっているのだ。矢張り、私と云う有り得ない存在がある故の改変であろう。管理局は私と云う危険因子に備えて、シグナム達と遭遇する前に、ベルカ式カートリッジシステムに手を出していたとは……

「良いか、管理局の者よ。ラスボスチックな台詞の後には、怯える仕草かそんな事はさせない熱い台詞と決まっておるだろ。それなのに、何故冷めたような目で私を見るのだ？」

「決まってると思うが……」 / 「イヤ、決まってると思うよ……」

私の問い掛けにまさかの全否定……しかも、ユーノ君まで……  
ちよつと傷つくなあ……

「ふつ、まだまだガキにはラスボスの心情を理解するには早かったようだ……さて、私はそろそろ撤退させて貰うでしょう。長居は禁物だ……アデュオス!!」

逃げようとしてるのが台詞より丸分かりなので、クロノ君が咄嗟に展開したバインドで私を捕らえようとするが、紙一重でかわす。そして、そのまま無詠唱でジャミングと転送魔法を発動し退散した。

窓がないのに灯りも点けていない故に誕生した暗い部屋。髑髏の頭蓋骨の窪みにでも蝋燭を立てれば第六天魔王もノリノリで酒盛りを始めるような空間に、三つの人影。

明らかに悪ですぜな雰囲気醸し出しつつ、イレギュラーな事態に騒いでいた。

「アレは一体何なんだ！？どうして、私達が変装する予定だった格好と瓜二つな姿をしてるんだ！？」

いや、騒いでいるのは一人だけ……後の二人は無言で何度も映像を見続けている。

「私達の情報が内部から漏れてるなんて有り得ない話だ。それに、この部屋からは盗聴などの類の装置は発見されていない。本当に訳の解らない話だ……例えばもし私達の計画が分かる者が居るとしたら、未来が見える人間が居るか、他人の頭の中を覗ける人間だけだろう」

「お父様、計画の方はどうなされますか？」

「勿論、計画を取り止めはしない。ただ、変更はする予定だ……私達には、もう時間は無いんだ……そう彼女にも……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5593i/>

---

魔法少女リリカルなのは ～あの頃をもう一度～

2011年12月1日20時55分発行